

Augustus

Ein Märchen von Hermann Hesse

Anmerkungen von Tsugio Sekiguchi

1.

In der Mostackerstraße wohnte eine junge Frau, die(1) hatte(2) durch ein Unglück bald nach der Hochzeit ihren Mann verloren, und jetzt saß sie arm und verlassen in ihrer kleinen Stube und wartete auf(4) ihr Kind, das keinen Vater haben sollte.(3) Und weil sie so ganz allein war, so verweilten immer alle ihre Gedanken bei dem erwarteten Kinde, und es gab(6) nichts(7) Schönes und Herrliches und Beneidenswertes, das sie nicht für dieses Kind ausgedacht und gewünscht und geträumt hätte.(5) Ein steinernes Haus mit Spiegelscheiben und einem Springbrunnen im Garten schien ihr für den Kleinen gerade gut genug,(8) und was seine Zukunft anging,(9) so mußte(10) er mindestens ein Professor oder König werden.

(1) 此の *die* は関係代名詞ではない。それはその次の文章の構造でわかる。即ち、定形の *hatte* がすぐ後に来ている。----此の *die* は、指示代名詞の *die* である。*die* の代りに *sie* と云ってもよろしい。けれども、童話の書き出しには、*der*, *die*, *das*, の指示代名詞を用いるのが例になっている、

Es war einmal ein König, der hatte keinen Sohn.

昔ある所に一人の王様がありました、その王様には子息がありませんでした。

なぞと云うのが慣例になっているから、作者はその口調をまねて、抑々の最初から童話的気分をそそったのである。

(2) *hatte verloren* と、普通の過去(*verlor*)を用いないで過去完了を用いたところに注目を要する。何故かと云うに、此の話の書き起こしてある時には「既に失ってしまっていた」のであって(*hatte verloren*)その時にはじめて「失った」(*verlor*)のではない。詳細は文法第二巻 110 及び 111.----失うの三形は、*verlieren*, *verlor*, *verloren*.

(3) 「.....の筈である」の意の助動詞 *sollen* の過去である。即ち、*sollte*(筈であった)に拘泥して訳すれば、「父親というものが持てない筈であったところの」となる。生まれぬ先にすでに父親を持たないことに運命づけられていた、という意。

(4) 「或ものを待つ」ことを *auf etwas warten* と云って、単に *etwas warten* と云わない。四格を使って、*etwas warten* または、相手が人間なら *einen warten* (或人を *warten* する) というと、*warten* の意味がすっかり変って来て、それは、英語の *waiter* (給仕人、ボーイ) という字に現れている *wait*, 即ち「お給仕をする」とか、「世話をする」とか「御用を承わるために慎しみ畏んで控えている」という意味になる。

(5) *hätte* は、第三巻第二十九講で述べた、*haben* の第二式接続法である。「夢想しない」という概念は、やがてそれを打ち消さんがために、一寸仮に作上げた事実であるから、そう云う際には第二式接続法を用いる。第二式接続法は、第三巻の 219 頁の表に見えている第四段目に相当するので、「事実は全くそれに反す」と書いてあるのが、即ち之れである。その文章を書く人が、即ち作者が、全然その反対の事実を信じている時に、最も好んで此の第二式接続法が用いられるのである。

(6) *es gab* は *es gibt* という非人称熟語の過去である。忘れた人は第三巻 272 を一寸読んで頂きたい。

(7) *nichts Schönes* という云い方については、第二巻 185 項。

(8) *gut genug* は、文字通りには「充分よろしい」----*gerade gut genug* は、うんと意識すれば、「ちょうどマア好い加減なところだろう」「それならまあ大体辛抱できる」----つまり、我児のことにかけてはすぐに己惚れたがる母親の気持ちを滑稽化したわけである。----*genug* (充分) という副詞は、必ず形容詞または他の副詞の後につけられる。時には名詞の後へ付けてもよろしい。たとえば *Sie ist nicht Weib genug, um sich in meine Lage einzuführen*. (彼女はすっかりわたしの気持になって考えてみられるだけの女らしさを持

っていない。)なぞと云う。

(9) *angehen*(関する)の用法は、次の例で推定して貰いたい。すべて文章の中に一寸挿入される形である。

「私に関しては」の言いかた。

- | | |
|---|---|
| 1. <i>angehen.</i> Was mich angeht. | |
| 2. <i>betreffen.</i> Was mich betrifft. | 3. <i>anbetreffen.</i> Was mich anbetrifft. |
| 4. <i>belangen.</i> Was mich belangt. | 5. <i>anlangen.</i> Was mich anlangt. |
| 6. <i>anbelangen.</i> Was mich anbelangt. | 7. <i>Mich anlangend.</i> |
| 8. <i>Für mich.</i> | 9. <i>Ich für meinen Teil.</i> 10. <i>Soviel mich angeht.</i> |

ずいぶん云い方がある。だから如何によく用いられる形式化という事がわかる。----此の文句の中に用いられている *was* は、一種の省略形で、完全に云うとすれば、*um daran zu denken, was seine Zukunft anging*(彼の将来に関することを考えるとすれば)となる。*anging* と *angehen* の過去形を使ったのは、物語の中だから過去にしたのである。それと同時にまた、次の註に述べる事実とも関係している。

(10) 扮役的過去(*Praeteritum mimicum*)----此の *mußte* の使いかたに細心の考察を加えて頂きたい。これはドイツ語だけの問題ではなく、西洋語全部に関する一般的な用法です。即ち、「少くとも教授か、それとも国王にならなければならなかった」という「ならなかった」は、決して此の童話を書きつつある作者その者の意見ではない。作者が仮にお母さんの身になって見て、いわばつまり「お母さんの名に於て」芝居をしているのである。言い換えれば、「.....なければならなかった」という文句は、作者がお母さんの役に扮した文句である。小説ではこうした文句が盛に出て来る。それは、主人公の考えた事を伝えるたびに一々「.....と彼女は考えた」と繰り返す必要をなくするための手段であったのが、多く用いられるうちに、ある独特な面白さを帯びるようになってしまったのである。普通の荒っぽい文法書では、こんな微妙な事は一々分解して説明されないから、まだはっきりした名前がない。私はこれを仮に扮役的過去と呼んでおく。必ずしも過去だけではなく、現在を用いる場合もあるが、一ばん多いのは、また我々日本人に一番珍しいのは過去の場合だから、特に「過去」と名称をつけたのである。学問的に厳重であらんがためには、むしろ「扮役的直説法」(*Indicativus mimicus*)と名づけた方がよろしい。----一寸此の過去の用法を例で示して見ると、たとえば、私は、彼女のところへお土産を持って出掛けると『好いかたねえ』と呼ばれ、何も持たずに出掛けると『またうるさいのが来た』と云われた....これを扮役の直説法で表現すると、「私は、彼女のところへお土産を持って出掛けると『好い方』であり、持たないで出掛けると『また例のうるさいの』であった。」

2.

Neben der armen Frau Elisabeth wohnte ein alter Mann, den man nur selten ausgehen sah, und dann war er ein kleines, graues(1) Kerlchen(2) mit einer Trottelmütze(3) und einem grünen Regenschirm, dessen Stangen(4) noch aus Fischbein(5) gemacht waren wie in der alten Zeit. Die Kinder hatten Angst(6) vor ihm, und die Großen(7) meinten, er werde(9) schon(8) Gründe haben, sich so sehr zurückzuziehen. Oft wurde er lange Zeit von niemand gesehen, aber am Abend hörte man zuweilen aus seinem kleinen, auffälligen Hause eine feine Musik wie(10) von sehr vielen kleinen, zarten(11) Instrumenten erklingen.(12) Dann fragten(13) Kinder, wenn sie dort vorübergingen, ihre Mütter, ob da drinnen die Engel oder vielleicht die Nixen(15) sängen,(14) aber die Mütter wußten nichts davon und sagten: "Nein, nein, das muß(17) eine Spieldose(16) sein."

(1) *Grau*(灰色の)は、此处では、白髪、の意。灰色だからと云って決して所謂胡麻塩頭(*meliertes Haar*)ではない。*Wer zeitig grau wird, lebt lang.* (早く白髪頭になるものは長生する)という諺でもわかる。また *Mancher wird grau, aber nicht weis.* (白髪の翁になるのは大勢いるが、同時に賢明になるのは少い)は *weis(e)* (かしこい)と *weiß* (白い)とに掛けた語呂洒落。

- (2) Kerlchen は Kerl(男)の縮小名詞。Kerl は Karl(人名)と同語源の字で、多少侮蔑的な意を含み、つまり「あの男なんか」という際の「男」。
- (3) Trottelmütze=Droddelmütze. Droddel は房(フサ)で、Mütze は英語の cap. (英語の hat は der Hut)つまりサンタクロース(Weihnachtsmann, od. Sankt Nikolaus)の冠っているような房附頭巾で、古めかしい、民衆的な、且つ子供に親しい印象を与えるもの。元来子供が冠るもの。
- (4) Stange.(竿)は、此处で Stangen と複数に用いてあるのでわかる通り、傘の柄(der Schaft)ではなくて、骨である。
- (5) Fischbein(魚骨)と云うのは、鯨の上頤(おとがい)の髻であって、非常に弾力に富んでいるので、傘の骨組や、婦人のコルセットや、昔風のぱっと広げたスカート等の台に用いたものであるが、近頃は鋼鉄という便利なものが普及してあまり用いなくなってしまった。
- (6) vor ihm. 文字通りには、「彼を前にして」である。sich fürchten(恐れる)Respekt haben(畏縮する)fliehen(逃げる)等、多少たりとも相手に近づくのを嫌う意味の文句は vor を支配する。
- (7) Die Großen は Erwachsenen (大人)と同じ。
- (8) schon.「屹度」「大丈夫」という schon の使い方がある。「云はなくても既にわかっている」と云う「既に」と思えば好い。das ist schon richtig それは「もう」間違いはない。
- (9) werde. ---- werden は必ずしも未来の助動詞ではなく、斯う云う風に「だろう」という想像の意に用いられる事もある。
- (10) wie. これが所謂前置的接続詞である。(309, 310, 311 参照)故に次のように組み立てて考えて見ると関係がはっきりする。eine feine Musik wie eine Musik von sehr vielen kleinen etc. Instrumenten
- (11) zart. (デリケートな)の発音は長い。ツァールト。(ツァルトに非ず)
- (12) erklingen hören 及び一寸前の ausgehen sehen 等の組み合わせに就ては、第三卷 253 参照。
- (13) fragen は四格支配。(第四卷 422 参照)
- (14) sängen. 接続法第二式。この際は間接話法。なぜ第一式の singen を使わないかに就ては第三卷 210(2)(3)参照。
- (15) Nixe, f. (人魚)所謂 Meerweib で、上半身が女で下半身が魚の怪物、丁度あのギリシャの英雄 Odysseus を誘惑しかかった Sirenen という歌の上手な女怪共と同じように、北欧の Nixen も非常に魅力ある声で歌うとされている。
- (16) Spieldose, f. Dose は元来箱の事で、これは Spieluhr 即ち音楽入りの時計です。
- (17) muß sein. Müssen は、屹度こうに違いない、という理論上の帰結を意味する用法。

3.

Dieser kleine Mann, welcher von den Nachbarn als Herr Binßwanger angeredet (1) wurde, hatte mit der Frau Elisabeth eine sonderbare Art(2) von Freundschaft. Sie sprachen nämlich (3) nie miteinander, aber der kleine, alte Herr Binßwanger grüßte jedesmal auf(4) das freundlichste, wenn er am Fenster seiner Nachbarin vorüberkam, und sie nickte(6) ihm wieder (5) dankbar zu(6) und hatte ihn gern,(7) und beide dachten: Wenn es mir einmal ganz elend gehen(8) sollte,(9) dann will ich gewiß im Nachbarhaus um(10) Rat vorsprechen. (11) Und wenn es dunkel zu werden anfang und die Frau Elisabeth allein an ihrem Fenster (12) saß und um ihren toten Liebsten(13) trauerte(14) oder an ihr kleines Kindlein dachte und ins Träumen geriet,(15) dann machte der Herr Binßwanger leise einen Fensterflügel auf, und aus seiner dunkeln Stube kam leis(16) und silbern eine tröstliche(17) Musik geflossen wie Mondlicht aus einem Wolkenspalt. Hinwieder(18) hatte der Nachbar an seinem hintern Fenster einige alte Geranienstöcke(19) stehen, die er immer zu gießen vergaß und welche doch immer grün und voll(20) Blumen waren und nie ein welches Blatt zeigten, weil sie jeden Tag(21) in aller(22) Frühe von Frau Elisabeth begossen(23) und gepflegt wurden.

- (1) anreden. 話し掛ける、呼び掛ける、即ち呼ぶこと。
- (2) Art. (種類)[発音アールト] Art の用法には二種ある。近代式の建築ならば、日本語

通り eine Baute von moderner Art でもよし、反対にして eine moderne Art von Bauten でもよい。此処は後者。

(3) nämlich(即ち、というのは)は接続詞。何故文の先頭に来ないかと云う問題に関しては第四卷 306.

(4) auf das freundlichste の auf das は単なる形式。(第三卷 227)

(5) wieder. wieder には二つの意がある。「再び」「即ち二度目に」の意と、「.....してかえす」という、方向の反対を指す場合である。(英語の前綴 re- も同様の区別を持っている。)此処は後者で、ihrerseits(彼女の側でも)の意。

(6) zunicken. 日本人なら頭を下げるが、毛唐は決して「下げる」という程は下げない。一寸頷でしゃくって微笑むのが会釈である。そうかと云って決して横柄なのではない。

(7) einen gern haben.(或人を好む)または einen lieb haben は熟語。

(8) es geht mir elend. 非人称の熟語。Wie geht es Ihnen?(近況如何? 英語の How do you do?) Danke, es geht mir gut. (thank you, I am very well.) 第三卷 271 参照。

(9) sollte については第三卷 218, 249.

(10) um Rat. (策を求めて、妙案を求めに)um には、或物を求めて、の意がある。ich bitte Sie um Hilfe. (私は君に助けを求めて願う) der Kampf ums Recht (権利闘争、即ち権利を求めての争い) der Kampf um Rom. (ローマ争奪戦)

(11) vorsprechen. 人の所へ出掛けて行く事。vor- なる前綴には、「現れる」の意がある。即ち「語り現れる」または「現れ語る」の意。車を乗りつける、または玄関に廻す、という vorsprechen の vor- にも非常に似ている。従って、一寸立寄ると云った方が正しい。

(12) ihrem Fenster. 此の一見余計に思われる ihrem については、第四卷 417 に詳しく説明あり。

(13) Der Liebste. (愛人、良人)妻が良人を呼ぶ時、良人が妻を呼ぶ時には Liebster! Liebste! (最愛の者よ)と云うから、それをすぐ名詞的に用いて、「良人」の意を出したもの。

(14) um einen trauern (或人の亡きを悼む)「喪」の事を die Trauer という。

(15) geriet = geraten, geriet, geraten .陷入る。

(16) leis = leise

(17) tröstlich = 発音トれーストリヒ(ö の長い所に注意)

(18) hinwieder = auch.

(19) Geranien-stock, m. = Geranium (英語のジレーニウム、普通ジラニウムと呼んでいるもの、天竺あおい?) -ium に終る字の複数は -ien になる、そして必ず中性。Stock, m. は、ステッキではなく、「株」の事。たとえば、Rose は、草でもなく、樹でもなく、株であるから Rosenstock (バラの樹)という。その他 Weinstock (葡萄)も同じ。

(20) voll は、此際は前置詞で、二格支配。voller とも、voll von (三格支配)ともいう。

(21) jeden Tag が四格になる訳は第四卷 326.

(22) in aller Frühe (あらゆる早朝に於て、即ち非常に早くから) ganz früh というに同じ。in aller Eile (大急ぎで) in allem Ernst (大真面目で) in aller Stille (極くそっと)等と同じ形式。

(23) begießen, begoß, begossen. (前出の gießen, goß, gegossen 水をかける、と同じ。)

4.

Als es(1) nun gegen den Herbst ging und einmal ein rauher, windiger Regenabend und kein Mensch in der Mostackerstraße zu(2) sehen war, da merkte die arme Frau, daß ihre Stunde (3) gekommen sei, und es wurde ihr angst, weil sie ganz allein war. Beim Einbruch(4) der Nacht aber kam(5) eine alte Frau mit einer Handlaterne gegangen, trat in das Haus und kochte(6) Wasser und legte Leinwand zurecht(7) und tat alles, was getan werden muß, wenn ein Kind zur Welt kommen soll. Frau Elisabeth ließ(8) alles still geschehen, und erst als das Kindlein da(9) war und in neuen feinen Windeln seinen ersten Erdschlaf(10) zu schlummern begann, fragte sie die alte Frau, woher sie denn käme.(11)

(1) es geht gegen Herbst. (それが秋に向って行く、即ち秋近くなる)は、es という主語でわかる通り、非人称の熟語である。

(2) zu sehen war. = zu sehen sein (見る可くある、即ち見受けられる、の意。)此の zu を伴う不定法については第四巻 291 の(1)参照。

(3) ihre Stunde ist gekommen. (彼女の時が来た)は、いよいよ来るべき筈の時が来た、即ち産が迫った、の意。また、時には、悪人が遂にその報いを受けねばならぬ時刻に逢着したと云った様な際にも、「汝の天運は盡きたぞ」と云う意味で Deine Stunde hat geschlagen. (何時の時打ったぞ)と云う事がある。いずれにしても、最後の時が迫ったと云う事である。

(4) Einbruch は die Nacht bricht ein, または bricht herein (夜が到来した)の einbrechen を名詞にしたものである。

(5)kam gegangen. (やって来た。) gegangen は殆んど余計なもので、日本語の「やって」が全然無意味なのと好一対をなしている。gegangen という過去分詞の形が kommen に附せられる文法的関係については第四巻 372.

(6) 日本語では「湯を沸す」と云うが、ドイツ語は合理的で、水を煮ると云う。「湯」なら沸さなくても好いはずだが、その「湯を」は、所謂結果的補足語になる。(第四巻 424 を見れば、それがドイツ語にもある形式だという事がわかる。)

(7) zurechtlegen (置き揃える)zurecht- という前綴は、正しく、きちんと、の意。子供が生れる時には、まず Windeln, pl. (お襁褓)が要る、Wäsche (肌着その他)が要ると云ったように大変な用事がある。此の、何処の女とも知れぬ stockfremdes Weib (全然見知らぬ女)が Hebamme (産婆)の役をつとめて呉れるのが先ず mystisch (神秘的)である。

(8) geschehen lassen (行われしめる)即ち、するが儘にさせて置く事。geschehen には、getan werden (なされる)の意がある。たとえば召使に向って、あれをしろと命ずると、召使は es soll geschehen (それは行われるであります、即ち、致しておきましょう)と答える。

(9) da sein. (顔が見える、姿が見える)はよく kommen の現在完了の代りに使う。

(10) Erdschlaf schlummern については第四巻 425. 「所謂 inneres Objekt」の項参照。

(11) käme. (kommen 接続法第二式現在)これは決して過去形ではない。直説法ならば Woher kommen Sie? または wo kommen Sie her? と云うところである。日本語でならば「何処からおいでになりましたか」という所を、ドイツ語では「何処から来ますか」と現在形で問う習慣がある。Woher sind Sie gekommen? といえ、日本語の感じではちっともおかしき無いが、ドイツ語ではおかしいので、こんなのを称して japanisches Deutsch というのである。

5.

"Der Herr Binßwanger hat mich geschickt," sagte die Alte, und darüber(1) schlief die müde Frau ein, und als sie am Morgen wieder erwachte, da war Milch für sie gekocht und stand(2) bereit, und alles in der Stube war sauber aufgeräumt, und neben ihr lag der kleine Sohn und schrie,(3) weil er Hunger hatte; aber die alte Frau war fort.(4) Die Mutter nahm ihren Kleinen an die Brust und freute sich, daß er so hübsch und kräftig war.(5) Sie dachte an seinen toten Vater, der ihn nicht mehr hatte(6) sehen können,(7) und bekam Tränen in die Augen, und sie herzte das kleine Waisenkind und mußte wieder lächeln, und darüber schlief sie samt dem Büblein(8) wieder ein, und als sie aufwachte, war wieder Milch und eine Suppe gekocht und das Kind in neue Windeln gebunden.

(1) darüber は文字通り英語の thereupon. Darauf ともいう。「その後すぐに」という意味ではあるが、「それを聞いて」という様な時に好んで用いられる。damit (それを以て)が、mit diesen Worten (斯く云い終って)の代りに用いられるのと同じ訳で、大抵人間の話す言葉に関係があるのである。

(2) stehen という字は都合の好い字で、何でも宜しい、物がちゃんと其の位置を占めて定着した様に儼然と動かずに居る事を指す。Die Sterne stehen am Himmel. (星が天に輝いている) Das steht in der Zeitung. (それは新聞に出ている) Es steht fest. (それは確固たる事実である)等。bereit stehen は、「ちゃんと」準備されて置いてある、の意。

(3) 英語でも子供が泣くのは weep とは云わない、cry という。ドイツ語でも weinen ではなく、schreien (叫ぶ)である。

(4) fort は fortgegangen の意。前綴だけでわかる際にはよく動詞そのものを省く。結局、

前綴が形容詞であるかのような感じを与える。Das Feuer ist aus. (火は消えた) Der Laden ist noch auf. (店はまだ開いている) Das Glück ist hin. (幸福は去りぬ) Der Ring ist entzwei. (指環は真二つにこわれた)

(5) 此の war は、日本語の感じからは ist でもよさそうに思われる。ところが、主文章が freute sich (欣んだ)と過去になっているから、daß 以下の動詞である war は、やはり過去でなければならない。時称の一致 (consecutio temporum) とは此の事である。

(6) hatte の一寸変な位置については第三巻 259.

(7) können は不定法ではなく過去分詞である。(第三巻 256)

(8) Büblein は Bube (男の児)の縮小形。男の児は Knabe (俗語 Bube) 女の児は Mädchen, n. (俗語 Mädel) というのが普通である。一寸した序でに、男児が生れたのだと云う事を知らせたわけである。

6.

Bald aber war die Mutter wieder gesund und stark und konnte für(1) sich und den kleinen Augustus selber sorgen, und da kam ihr der Gedanke, daß nun der Sohn getauft werden müsse und daß sie keinen Paten(2) für ihn habe. Da ging sie gegen Abend, als es dämmerte(3) und aus dem Nachbarhäuschen wieder die süße Musik klang, zu dem Herrn Binßwanger hinüber. (4) Sie klopfte schüchtern an die dunkle Türe, (5) da rief er freundlich "Herein!" und kam ihr entgegen, die Musik aber war plötzlich zu Ende, (6) und im Zimmer stand eine kleine alte Tischlampe vor einem Buch, und alles war wie bei andern Leuten. (7)

"Ich bin zu Euch gekommen," sagte Frau Elisabeth, "um Euch zu danken, weil Ihr(8) mir die gute Frau geschickt habet. Ich will sie(9) auch gerne bezahlen, wenn ich nur erst(10) wieder arbeiten und etwas verdienen kann. Aber jetzt habe ich eine andere Sorge. Der Bub(11) muß getauft werden und soll(12) Augustus heißen, wie sein Vater geheißen hat; aber ich kenne niemand und weiß(13) keinen Paten für ihn."

(1) für は sorgen (心配する、面倒を見る)の支配する前置詞である。

Ich will dafür sorgen. (私が引き請けました)等。

(2) Pate, m. [弱] (名親)というものは必ずなくてはならない。それが基督教の規則である。つまり、肉を与えた肉親の外に、宗旨を与える霊父、または教父、教母を必要とするのである。

(3) es dämmt. 非人称動詞である。

(4) hinüber- なる前綴は、向う側へ、の意。

hinübergehen は、出掛けて行くとても云えば宜しい。

(5) Türe, f. (扉)は Tür と同形。

(6) zu Ende sein (終る)という熟語。

(7) alles war wie bei andern Leuten. すべてが他の人々の家に於けると同然であった。即ち、ちっともあたり前の人間の家と変ったところはなかった。---- 一寸風変りな男の事だから、未亡人は何か大変変った所でもあるように思っやって来たに相違ない。bei は、或人の「家」或人の「許」という「家」または「許」である。但し人間以外の意味の名詞の前に来るとまた違って来る。

(8) 敬称代名詞は、現今は「彼等」という sie を大書して Sie と云うが、昔は「汝等」という ihr を大書して Ihr と云ったものである。(Euch はその三格)もっと昔には「彼」「彼女」という er, sie を大書して Er (汝) Sie (汝)を使った事があるが、これは敬称とは云えない、むしろ相手を見下した言葉であった。今は絶対に使わない。

(9) bezahlen (支払う)は人間を四格に用いる。或人に支払う、ではなく、或人を支払う、と云う。従って「お前の給料の方が高いな」と云う時には du bist besser bezahlt. (汝の方がよりよく支払われている)と du を主語にして受身で云えるわけである。

(10) nur erst (ただまず)は「とにかく.....しさえすれば」と云う熟語。

(11) Bub は Bube の省略。

(12) sollen が wollen の逆であることは、第三巻 249 に於て詳しく述べた。これがその好例である。Augustus と名乗らせようと思う、と云う訳は其処から出て来るのである。

(13) ich weiß keinen. (私は誰も心当りが無い)の wissen は、前の kennen とは用法が違う。

一の熟語と思えばよろしい。wissen にすぐ人間の四格をつけると云う事は、「その人を知る」という意味に於ては決してしない事で、「心当りがある」と云う時に限られるのである。知るという際には必ず kennen.

7.

"Ja, das habe ich auch gedacht," sagte der Nachbar und strich an seinem grauen Bart(1) herunter. "Es wäre(2) schon(3) gut, wenn er einen guten und reichen Paten bekäme, der für ihn sorgen kann, wenn es Euch einmal(4) schlecht gehen(5) sollte. Aber ich bin auch nur ein alter, einsamer Mann und habe wenig(6) Freunde, darum kann ich Euch niemand raten, wenn Ihr nicht etwa(7) mich selber zum Paten nehmen wollet."

Darüber(8) war die arme Mutter froh und dankte dem kleinen Mann und nahm ihn zum Paten. Am nächsten Sonntag trugen sie den Kleinen in die Kirche und ließen ihn taufen, und dabei erschien auch die alte Frau wieder und schenkte ihm einen Taler,(9) und als die Mutter das nicht annehmen wollte, da sagte die alte Frau: "Nehmet(10) nur, ich bin alt und habe, was ich brauche.(11) Vielleicht bringt ihm der Taler Glück.(12) Dem Herrn Binßwanger habe ich gern einmal einen Gefallen getan,(13) wir sind alte(14) Freunde."

- (1) Bart, m. [ひげ]の発音はバールトと a が長い。
- (2) wäre (接続法第二式の約束手法的用法)の用法については第三巻 212 以下参照。
- (3) schon の用法は既に註 2 の 8 で述べた通り、「申すまでもなく」「勿論」の意である。
- (4) einmal (いつか、他日)は einst と同云う。
- (5) es geht mir schlecht. (私は廻り合せがよくない)という非人称熟語。
- (6) wenig が準否定詞で、「少し」(ein wenig, 英語の a few)の意味でない事に関しては、第四巻 397.
- (7) etwa (ひょっと)は wenn.....nicht etwa (もし.....もしない限りは)という成句を構成している。etwa は etwas (something)とは全然別物である。
- (8) 此の darüber も、それを聞いて、の意。(前出)
- (9) Taler といえ一円五六十銭に当る銀貨であるが、洗礼の際には、Taufbecken (洗礼盤)の中へ銭 (Geldstück)を入れて贈るのが例になっていて、此のお金のことを Taufpfennig, Patengeld, Einbindepfennig, もっと荒っぽくは Waschpfennig などと云う。つまり日本の香奠と同じように、一種の強制的習慣で、時にはうんと奮発する人があると、er hat dem Kinde einen großen eingebunden などと云う。einbinden というのは、恐らくは子供の身体にでも結びつけてやるからであろう。その贈物を一名 Eingebinde と同云う。同時に数珠(Rosenkranz)を水の中に入れ、或いは、女の見であると、糸紡ぎの道具などを入れてやる習慣がある。
- (10) nehmet は nehmen の Ihr に対する命令法。du で話す際には nimm! になる。次についている nur は、命令法に附けるお定りの字で、大した意味はない。nimm nur! (まあ取ってお置き) nimm doch! (さあお取り) doch は nur より少し強くなる。
- (11) brauchen は英語の need, want で、gebrauchen (to use)と混同すべからず。ich habe, was ich brauche は、何も不自由はない、の意。
- (12) Taufpfennig なるものは、其の子供が将来お金に事欠かぬようにと云う縁起を祝って贈るものであるから、こんな事を云ったのである。此の一句は要するに誰でも云うおざなりである。
- (13) einem einen Gefallen tun (或人に好意を示す)は熟語である。それから、此処の一文にはよく注意して貰いたい。大意は、つまり「ビンスヴァンゲルさんには何時か一度好意を示したいと思っていたのですから」という事であるが、別に「それに其の機会が未だに見つからぬ」というのではなく、現に見つかったのであるから、約束手法を使わなくても好いのであるが、約束手法で hätte ich..... と云っても間違いではない。且つ詳しく云うと、habe ich gern einmal einen Gefallen tun wollen と wollen の過去分詞を使うのが合理的であるけれども、gern (好んで)という副詞が這入って来ると、wollen の意味は充分出るから、単に gern と云ってしまうわけである。他の場合で云うと、Sie hätten das besser nicht tun sollen (あなたはそんな事はなさらない方が好かったですよね)では、besser という批評的副詞(第四巻 330)で sollen の意が充分に表わしてあるから、sollen

を省いて Sie hätten das besser nicht getan と云うのが普通である。また、「それはすぐなされる事ができる」は das kann bald getan sein とは云わないで、Das ist bald getan と云う。斯う云う助動詞の省略は至る所で行われる。

(14) alter Freund の alt は年寄りの意ではなく、古いの意である。

8.

Da gingen sie miteinander heim,(1) und Frau Elisabeth kochte für ihre Gäste Kaffee, und der Nachbar hatte einen Kuchen mitgebracht, daß(2) es ein richtiger(3) Taufschaus(4) wurde. Als sie aber getrunken und gegessen hatten und das Kindlein längst eingeschlafen war, da sagte Herr Binßwanger bescheiden: "Jetzt bin ich also der Pate des kleinen Augustus und möchte ihm gern ein Königsschloß(5) und einen Sack voll Goldstücke schenken, aber das habe ich nicht, ich kann ihm nur einen Taler neben den(6) der Frau Gevatterin(7) legen. Indessen,(8) was ich für ihn tun kann, das soll geschehen.(9) Frau Elisabeth, Ihr habt Eurem Buben gewiß schon viel Schönes(10) und Gutes gewünscht. Besinnt(11) Euch jetzt, was Euch das Beste für ihn zu sein scheint, so will ich dafür(12) sorgen, daß es wahr werde.(13) Ihr habet einen Wunsch für Euren Jungen frei,(14) welchen Ihr wollet, aber nur einen, überlegt Euch(15) den(16) wohl, und wenn Ihr heut(17) abend meine kleine Spieldose spielen höret, dann müßt Ihr den Wunsch Eurem Kleinen(18) ins linke Ohr sagen, so wird er in Erfüllung gehen.(19)"

(1) heim- という前綴は zurück, nacu Hause と同意で、英語の home と同語源。

(2) daß は sodaß の意。daß 以下の文章は所謂後続的副文章 (第四巻 300)であるから、日本語では、後で訳する必要がある。

(3) richtiger Taufschaus. richtig は、正しい、まともな、で、此処では「本当の」または「人なみの」「世間並みの」の意。

(4) ドイツでは、子供が生れた時の行事が色々であるが、此の Taufschaus はその最も重要な部分である。飲んだり食ったり (Schlemmerei) は独逸人の最も嗜む所で、その他結婚式に婚礼の祝宴 (Hochzeitsmahl) を張って牛や豚を沢山殺す量に於ては恐らく万国に冠絶する所であり、また人が死ねば Leichenschmaus (お葬式の宴)を張って、これもうんと食ったり飲んだりする。田舎ほどひどいそうで、中世期以降に於て、誕生、結婚、葬儀などの宴を簡単にせよという教会の宣旨 (Erlaß)が何度も出ているところを見ると、古来からの根強い習慣なのであろう。

(5) 王城を贈りたいの何のと云うのは勿論冗談である。けれども此の冗談の持っている味は、「城」という意味にあるので、ドイツ人は期せずして Luftschlösser (空中楼阁) (蜃気楼) と云ったような事を考え、spanische Schlösser, böhmische Schlösser (西班牙の城、ボヘミヤの城) なぞと云ったような滑稽な文句を想像する。噂ばかりで一向信用ならない、実在性に乏しいことをいうのである。あの人は別荘を作ったそうだと、なぞと云う当てにならない話を聞くと、それは多分ボヘミヤの城だろうと云って冷かす。此処では別にそんなつもりでもないが、ビンスヴァンゲルさんが、多少のユーモアを以て、自分自身の貧乏を皮肉りながら、一寸そう云った事を想像するような云い廻し方をしているのが面白いのである。

(6) den=denjenigen. (指示代名詞、第二巻 178. 180 を見よ。)

(7) Gevatter, Gevatterin は Pate, Paterin (名附親、教父教母)と同じ。

(8) indessen は丁度英語の however.

(9) das soll geschehen=das will ich tun. [註 4 の 8]それは為される可きである、即ち、私はそれを致しましょう。

(10) Schönes, Gutes の形については第二巻 185.

(11) sich besinnen (考える)は überlegen, nachdenken と同じ。篤[とく]と熟考すること。

(12) dafür の für は前に出た如く、次の sorgen の支配する前置詞で、da-というのは、次の daß 以下の文章を受ける。

(13) 直説法なら wird で、werde は第一式接続法である。(第三巻 209)

(14) einen Wunsch frei haben. 「自由に持つ」というのは、選択の自由を有すること。

(15) Euch は三格。sich überlegen (自分のために熟考する)という、三格の再帰代名詞を

支配する再帰動詞と考えても好いわけである。

(16) 此の **den** も、冠詞ではなく、指示代名詞である。

(17) **heut** は **heute** の省略形。

(18) **Eurem Kleinen** (あなたの赤ちゃんに) と云う三格の用法については第四巻 416 を見よ。

(19) **in Erfüllung gehen** (実現する) は熟語。**in** の次に冠詞がない故、熟語である事はすぐにわかる可き筈である。(第三巻 244 を見よ。)

9.

Damit(1) **nahm er schnell Abschied, und die Gevatterin ging mit ihm weg, und Frau Elisabeth blieb allein und ganz verwundert zurück, und wenn die beiden**(2) **Taler nicht in der Wiege gelegen**(3) **und der Kuchen auf dem Tisch gestanden**(4) **wäre, so hätte sie alles für einen Traum gehalten.**(5) **Da setzte sie sich neben die**(6) **Wiege und wiegte ihr Kind und sann und dachte sich schöne Wünsche aus.**(7) **Zuerst wollte sie ihn reich werden lassen oder schön, oder gewaltig stark, oder gescheit und klug,**(8) **aber überall war ein Bedenken**(9) **dabei,**(10) **und schließlich dachte sie: Ach, es ist ja**(11) **doch**(12) **nur ein Scherz von**(13) **dem alten Männlein**(14) **gewesen.**

(1) **damit** が **mit diesen Worten** (斯く云いつつ) の意を持つ事は、前に **darüber** (これを聞いて、又は斯く話し合つて、又は斯く考えた後) を説明する際に述べて置いた。

(2) **beide** (両方の) は、時として単に **zwei** という代りに用いる。但しそれは二つきりしか無いものに関して云うのである。彼は二人の友達を持っていた、なぞという時に使つてはならない。

(3) **gelegen** は **liegen** の過去分詞で、**legen** (置く) の過去分詞ではない。

(4) **stehen** には、時とすると **sein** という意味だけしか無い事がある。此処がその好い例で、**gestanden** = **gewesen**。

(5) **etwas für etwas halten (to take something for something)** は第二巻以来盛に出て来た筈の熟語である。漢語の「以て云々と為す」即ち、「以為く」というのに似ている。

(6) **neben** は、四格を支配すれば方向を指す。(第三巻 236)

(7) **ausdenken** (考え出す) に三格の **sich** (自分のために) がついている。この三格も所謂 **Dativ des Interesses** (利害関係の三格) の一種である。

(8) 二語一想 (**Hendiadyoin**) ---- **gescheit** も **klug** も共に「利口」という意で、別に何の差もない。こう云う風に、二語を以て一想を表わすものを **Hendiadyoin** [ヘンディアデュオイ] (二語一想) と呼ぶ。**klar und deutlich** (明瞭に) **fix und fertig** (用意万端整うて)

Wind und Wetter (風雨) **Spiel und Scherz** (一場の戯れ) 等いずれも二語一想である。それが名詞の際には冠詞が無いのを以て特徴とする。

(9) **Bedenken**. 一寸考えさせられる様な事、即ち心配である。**bedenklich** [形] は、心配な、気遣わしき。

(10) **dabei sein** (その側にある、即ち付き纏う。)

(11) **ja** は、副詞的に用いられると、「確かに」の意。つまり文章全体に勢がつくのである。**das ist falsch** は「それは誤りだ」**das ist ja falsch** は「それは明かに誤りさ」

(12) **doch** は「矢張り」

(13) 此の **von** の用法はちょっと解りにくいかも知れない。全体の意味は、「やれやれ、これはまあ矢張りあの御老人が一寸冗談を仰せになったのだろう」 ---- **von** の用法を類似の例で示すと、**das ist sehr nett von dir**. それは君としては大変親切 (**nett**) なやり方だ。つまり **von** は或人の自分に対する仕打、やり口、に就て云うのである。

(14) **Männlein** または **Männchen**. **-lein, -chen** の縮少語尾は、小さい意味を持っているが、同時にまた、親しい、慣々しい気持をも表わすのである。たとえば **Elisabeth** に対する縮少形 **Lisbethchen** は、日本語でなら、「何々ちゃん」と云ったような称呼である。

10.

Es war schon dunkel geworden, und sie wäre(1) **beinahe sitzend bei der Wiege eingeschlafen, müde**(2) **von der Bewirtung**(3) **und von den Sorgen und den vielen**

Wünschen,(4) da klang vom Nachbarhause herüber(5) eine feine, sanfte Musik, so zart und köstlich,(6) wie sie(7) noch von keiner Spieldose gehört worden ist. Bei(8) diesem Klang besann(9) sich Frau Elisabeth und kam zu sich, und jetzt glaubte sie wieder an(10) den Nachbar Binßwanger und sein Patengeschenk,(11) und je mehr sie sich besann(12) und je mehr sie wünschen wollte, desto(13) mehr geriet ihr(14) alles in den Gedanken durcheinander,(15) daß(16) sie sich für(17) nichts entscheiden konnte. Sie wurde ganz bekümmert(18) und hatte Tränen in den Augen, da klang die Musik leiser(19) und schwächer, und sie dachte, wenn sie jetzt im Augenblick ihren Wunsch nicht täte,(20) so wäre es zu spät(21) und alles verloren.(22)

(1) wäre は約束法、即ち所謂約束法的語法(第三卷 212)の結論部である。「若し.....であったとしたら」という前提の方が省かれている。

(2) müde von.....は「云々のために疲れて」----此の形容詞を基礎とする客語句は、第四卷の 371 に説明した分詞を基礎とする副詞句に相当すると思えば宜しい。

(3) Bewirtung [接待]は、bewirten (或人をもてなす)という動詞から作った名詞。

(4) 此の、沢山の願のために疲れると云うのが面白い。人間はそんなもので、我々でも、たとえば、一万円やるから之れを一晩で使って見ろと云われたら、随分考えくたびれるに違いない。

(5) vom Nachbarhause herüber の herüber は、前置詞の追加詞 (第三卷 240)というもので、von.....herüber (.....からこちらの方に向って)という形式である。

(6) zart (もの優しい)と köstlich (好い気持の)の二つの形容詞は、前の Musik に掛かる、所謂附加的形容詞である。形容詞を名詞の後に置く用法に就ては、第四卷 413.

(7) wie sie に就ては第二卷 173 「wie と人代名詞で表わす関係文」の項を見よ。

(8) bei の意味の見わけ方----bei と云う前置詞は時によって色んな意味になるが、それは其の次に来る名詞の種類によって判断できる。名詞には具体名詞 (家、石、町、壁) 人名詞 (父、母、友達) 時間の経過のある事件名詞 (祭、戦、試験、音、読書) 空間をも時間をも占めぬ抽象名詞 (性質、意味、寒さ、智識、美) 四大別を設けることが出来るから、それに従って bei の意味を示すと、

(1) 具体名詞と共に「.....の傍 bei der Schule 学校の側 beim Stuhl 椅子の側に (2) 人名詞と共に「.....の許で」「.....の家で」 bei mir 私の宅に bei meinem Vater 私の父の許に (3) 事件名詞と共に「.....の際に」 beim Schreiben 書く時に beim Examen 試験の際に beim Krieg 戦争の際に (4) 純抽象名詞と共に「.....にも拘らず」 bei seiner Weisheit 彼の賢明さにも拘らず bei dieser Hitze 此の暑さにも拘らず (5) 唯一つ、「.....に懸けて」誓うという時には次にどんな名詞が来ても構わない。bei meinem Schwert! 私の剣にかけて! bei Gott! 神に懸けて! bei meiner Ehre! 私の名誉に懸けて!

此の場合は第三の「.....の際に」「.....と同時に」の意。

(9) sich besinnen は「はっ」と思う事。つまりその次の zu sich kommen と同意である。

(10) 或人を信ずることを an einen glauben という。an は glauben の支配する前置詞である。

(11) Patengeschenk (教父としての贈物)というのは、前出の、何でも願を掛ければ実現させてやると云う約束の事である。

(12) 此の sich besinnen は、反省するという意味では前の sich besinnen と同じであるが、前後でわかる通り、考えをめぐらすこと、即ち sinnen と同意。

(13) desto は je と対立する、所謂対照的接続詞である。(第四卷 307, 308)

(14) ihr alles (彼女の凡てが)ではなく ihr (彼女には) alle (凡てが)である。即ち ihr は物主代名詞ではなく、人代名詞の三格である。その用法については特に第四卷 416 を見よ。

(15) durcheinander-geraten (入り乱れる) gegeneinander-geraten (衝突する)等。geraten は陥るの意。

(16) 此の daß も sodaß の意。

(17) 此の für の用法に関しては第三卷 239 前置詞使用上の細則の項の(8)を見よ。

(18) 此の bekümmert は前に würde があるから一寸受動形のように見えるがそうではない。過去分詞ではなく単なる形容詞である。(第四卷 375 過去分詞の純形容詞化の項)従

って wurde は、「成る」という werden の過去。

(19) leiser と schwächer は leise (かすかな) schwach (弱い)の比較級。immer leiser (段々かすかに) immer schwächer (段々弱く) の意。(第三巻 225 の 1 に immer の説明あり。)

(20) täte は tun, tat, getan (為す)の接続法第二式。次の wäre と共に約束法的語法をなしている。(第三巻 214)

(21) zu spät (英語の too late)もう晚い、間に合わぬ。ドイツ語の zu は、英語の to にもあたれば too にもあたるわけである。但し too (余りに)の意の時には、発音法がちがって、音階が一寸高まる。

(22) verloren (失われた、駄目)は verlieren (失う)の過去分詞。意味は英語の lost だが、語としては forlorn に当る。たとえば forlorn hope (決死隊)等。verlorene Mühe (無駄骨折り) verlorene Liebe (失恋) verlorener Sohn (見限られた息子)等の成語がある。要するに、駄目になって取り返しがつかないことを verloren (失われた)というのである。

11.

Da seufzte sie auf(1) und bog(2) sich zu ihrem Knaben hinunter und flüsterte ihm ins linke Ohr: "Mein Söhnlein, ich wünsche dir – ich wünsche dir –,“ und als die schöne Musik schon ganz am(3) Verklingen war, erschrak sie und sagte schnell: "Ich wünsche dir, daß alle Menschen dich liebhaben(4) müssen." Die Töne(5) waren jetzt verklungen, und es war totenstill(6) in dem dunklen Zimmer. Sie aber warf sich über die Wiege und weinte und war voll(7) Angst und Bangigkeit(8) und rief: "Ach, nun habe ich dir das Beste gewünscht, was (9) ich weiß, und doch(10) ist es vielleicht nicht das Richtige(11) gewesen.(12) Und wenn auch(13) alle, alle Menschen dich liebhaben werden, so kann doch niemand mehr(14) dich so liebhaben wie deine Mutter."

(1) aufseufzen (ほっと溜息をつく)seufzen は溜息をつくこと。此の auf の妙味は一種独特である。aufatmen (ほっと息をはく、胸を撫で下す。) aufleben (生気を恢復する、よみがえる) aufblitzen (ぱっと明るくなる)----auf には、急に楽になると同時に、結ばれていたものが一時に解け寛ろぐ意味がある。

(2) biegen, bog, gebogen (曲げる) sich hinunterbiegen (上体を下へかがめる)

(3) an という前置詞は、際どく接する、である。am Verkingen は、als die Musik schon nahe daran war, zu verklingen 又は imbegriff war, zu verklingen (将に響止まんとするの刹那にあった時)の意。nahe daran sein または imbegriff sein という熟語は英語の to be on the point of である。

(4) liebhaben は前に一度出た gern haben と同じ。たとえば Liebhaber, m.は、女なぞの崇拜者、恋人である。また時には Dilettant(所謂愛好家、ファン)の意にも用いる。Liebhabertheater は素人芝居。

(5) Ton, m.(音)は Klang (響き)Schall(音響)と同じものであるが、一番普通な字である。Tonkunst (音楽)Tonfilm (トーキー)等。

(6) totenstill (シーンと静まりかえった)は分解すれば Toten (死人たちのように)still (静かな)ことである。mausstill (廿日鼠のように静か)は、ひっそりした事。

(7) voll は二格支配の前置詞とされているが、次に来る名詞には冠詞をつけない。むしろ無格(Nennform)支配と云った方が好いのである。

(8) Angst und Bangigkeit も所謂二語一想(Hendiadyoin)

(9) was は不定関係代名詞で、前の das Beste を先行詞としている。「凡そ」私の知る限りの、の意。不定関係代名詞 wer, was 等は大概「凡そ」.....「する限りの」といえば云い表わされる。

(10) und doch (英語の and yet)それでもやはり。

(11) das Richtige 正しきもの、即ち正鵠を得たもの、機宜に適したもの。

(12) 前に、適当な副詞があれば話法の助動詞が略されるという話をして置いたが、此処もそれで、vielleicht (ひょっとすると)があるから、本当は mag.....nicht das Richtige gewesen sein. (肯綮に中ったものではなかったかも知れぬ)という mögen を略したものである。

(13) wenn auch (もし.....ても)については第四巻 299.

(14) この **mehr** は、「より以上」の **mehr** でもなければ、「もはや」誰も、の **mehr** でもない。**niemand mehr** (誰も)という、単に否定詞を強めるだけの意味しかないのである。其他の例は、たとえば「決して」を **nimmer** と云えば好いところを、**nimmermehr** と云う。これも決して「もはや決して」ではなく、単に「決して」である。たとえば父が娘に向かって、**Heirate diesen Burschen!** (此の若者と結婚しろ)と云うと、娘はびっくりして **Nimmermehr!** (滅相もない)と答える。

12.

Augustus wuchs nun heran(1) wie andre Kinder, er war ein hübscher, blonder(2) Knabe mit hellen,(2) mutigen Augen, den die Mutter verwöhnte(4) und der überall wohlgeleitet(5) war. Frau Elisabeth merkte schon bald, daß ihr Tauftagswunsch sich an(6) dem Kind erfülle, denn kaum(7) war der Kleine so alt,(8) daß er gehen konnte und auf die Gasse(9) und zu andern Leuten kam, so fand(10) ihn jedermann so hübsch und keck und klug wie(11) selten ein Kind, und jedermann gab ihm die Hand, sah ihm in die Augen und zeigte ihm seine Gunst. Junge Mütter lächelten ihm zu,(12) und alte Weiblein schenkten ihm Äpfel, und wenn er irgendwo eine Unart verübte,(13) glaubte niemand, daß er es(14) gewesen sei, oder wenn es nicht zu leugnen(15) war, zuckte man die Achseln(16) und sagte: "Man kann dem netten(17) Kerlchen wahrhaftig(18) nichts übelnehmen."

(1) **heranwachsen** (追々大きくなる)の前綴。これは **wie andre Kinder** の次に来ても好いのであるが、口調を重んじて規則を犯したのである。

(2) **blond** (金髪の)---西洋人は、髪の毛の色によって、**blond** 型と、**braun** (褐色)型とに分ける。南方人は髪が黒いから **braun** なのが多く、北欧人には **blond** な、時には **aschblond** (灰色)なのが多い。北欧人の美人、美男の理想は **blonde Haare, blaue Augen** (金髪青眼)である。一たいに **blond** は詩的な型とされている。

(3) **hell** [淡色の]は **dunkel** [濃色の]の反対。

(4) **verwöhnen, verhätscheln** [甘やかす]甘ったれ児のことを **Mutterkind, Muttersöhnchen** と云うも宜なる哉。

(5) **wohl leiden** は **gern leiden mögen** (第三巻 247 の 4 に此の熟語の詳しき説明あり。) 過去分詞 **wohlgeleitet** は **wohlgeleitet** の意。

(6) **an dem Kind** は、此の小供の身に、小供の身の上に。

(7) 此の **kaum** の用法については第四巻 300 の文例 1 を見よ。少し下の **so fand ihn** の **so** と対比して意味をなす。

(8) **so alt, daß.....** は「.....云々である程の年になった」即ちやっと云々の年に達した事をいうので、決して非常に年を取った事を云うのではない。**Warten Sie solange, bis ich zurückkomme!** は「私が帰ってくるまで、そんなに長く待ってください」ではなく、ただ其の間だけの意である。

(9) **Gasse, f. 街、は、小さな町筋を云う。本通りは Straße である。Gasse (英 lane) Straße (street)**

(10) **einen so und so finden** (或人を云々と見出す、即ち或人を云々であると思う、評価する)という熟語。

(11) **wie selten ein Kind** は一つの省略された形と見る事が出来る。**ein Kind** は四格で、**wie man selten ein Kind so hübsch findet** である。ところが日本語では第一そんな事すらも言わない。「稀に経験する程.....云々であると思った」と考えればわかる。その「稀に経験する程」が長く延ばされて、「人が稀に一人の子供を左様に云々に見出す程」と前にある通りを繰り返したのである。既に此の繰り返しが全然日本語には無い所へ持って来て、それがまた省略された形になっているので一寸困難なのである。同じ様な例をあげて見る。(第四巻 405)

Die beiden Eheleute reisten in einer so düsteren Stimmung, wie je (または nie) ein Mann mit einer Frau. 二人の夫婦は、凡そ曾て一人の男が一人の女と[旅行した時の例には見出せないほど]左様に陰気な気持の裡に旅行した。

要するに此の種の文章に共通な点は、「例が無いほど」と云う意味になる事と、**selten, je, nie** 等の副詞がある事と、それから動詞が省かれるという此の三点である。

(12) **zulächeln** (或人に微笑み掛ける) **zu-** の意味は此の場合に明瞭にわかる。**zuwinken** (或人の方に向かって会釈する) **zuschicken** (或人に或物を送って寄越す) **zu-** はつまり「.....掛ける」「.....つける」「.....て寄越す」の語尾にあたる。

(13) **verüben** は単に「なす」という意味だけしかない。「為す」「行う」と云う動詞は、その伴う名詞によって色々ある。日本語でも「抵抗を」と云えば「試みる」と決まっており、「対策を」といえば「講ずる」と決まっている。**Abbitte tun** (謝る) **Halt machen** (停止する) **Widerstand leisten** (抵抗する) **Gerechtigkeit üben** (正義を行う) **Wache halten** (立番する) **Entschluß fassen** (決心する) **Sorge tragen** (心配する) **Wucher treiben** (暴利を貪る) これらの動詞はみな熟語として決まっている故、勝手に作るわけには行かない。

(14) 「それが彼である」「それは私です」等は **er ist es, ich bin es** または **es** を's に略して **er ist's, ich bin's** という。**es** と云うのは、悪事を働いたところの「其の者」の謂である。

(15) **nicht zu leugnen sein** (否む可くない、否む可からず) 第四巻 291.

(16) **die Achseln zucken** (英 **to shrug one's shoulders**) 両肩をキュッと縮めて上へ上げる表情。近頃は活動(Kino)で西洋人の動作をよく見るから、若い人々には説明する必要もあるまい。日本人なら苦笑いして一笑に附するという時にする **Gebärde (gesture)** である。一たい日本人は何につけても笑う人種であるが、西洋人には笑いの代りにこう云う沈黙の表情があるのだろう。

(17) 新しい時代の独逸語は語彙もかなり違って来ていて、此の **nett** なぞは其の最も特徴的な単語である。要するに **gut** または **schön** という意である。「好い気持の」と云えば略その概念がわかる。**Das ist sehr nett von ihm.** (私は彼に謝する、の意) **ein nettes Büchlein** (一寸感じの好い書物) **ganz nett!** (とても好い)

(18) **wahrhaftig** (まったく、本当に、実際)----**wirklich** と同意。文語体では **wahrlich** (洵[まこと]に) という。**Ich will euch wahrlich sagen.** 我まことに汝等に告げん。

13.

Es(1) **kamen Leute**, die auf den schönen **Knaben aufmerksam**(2) **geworden waren**, zu seiner Mutter, und sie, die niemand gekannt und früher nur wenig **Näharbeit ins Haus**(3) bekommen hatte, wurde jetzt als die Mutter des **Augustus**(4) **wohlbekannt** und hatte mehr **Gönner**, (5) **als sie sich**(6) **je**(7) **gewünscht hätte**. **Es ging**(8) **ihr gut** und dem **Jungen auch**, und **wohin**(9) sie miteinander kamen, da freute sich die **Nachbarschaft**, (10) **grüßte** und sah den **Glücklichen**(11) **nach**.

(1) **es** は単なる文法上の主語で、意味上の主語は次の **Leute**. (第三巻 273)

(2) **auf etwas aufmerksam werden** (或物に対して注意深くなる、即ち或物に注目する事) こう云う熟語では、たとえば **werden** (なる) 等の意味に拘泥して考えると全体の意味が変になる。

(3) **ins Haus bekommen** は、外へ出掛けて仕事するのではなく、自宅でするのであるからそう云うのである。

(4) ニ格の語尾を省く。(第四巻 355 の(4)を見よ。)

(5) **Gönner** は所謂パトロン、または保護者で、つまり最良にしてくれる人のこと。故に「人気」「愛顧」のことを **die Gunst** と云う。**Augustus** はつまり皆の **Günstling** (寵児) になったのである。

(6) **sich** は三格。**sich wünschen** で、自分のために願う。

(7) **je** は「曾て」「およそ」。その否定は **nie** 「決して」である。

(8) **es geht ihr gut**. (彼女は景気よし) 此の非人称句は必ずしも健康状態にのみ関して云われるのではなく、一般に運命、境遇に関しても用いられる。

(9) **wohin sie auch.....** と **auch** を入れて考えて見る。所謂認容文である。(第四巻 299 の3を見よ)

(10) 集合名詞 **Kollektivum -schaft** の語尾について

Nachbarschaft, f. (近隣、向う三軒両隣) これは **die Nachbarn** (近所の人たち) と、人間の複数を用いる代りである。**-schaft** の語尾は斯う云う風に或種の集合名詞を作る。**die**

Mannschaft (乗組員、人員) die Herrschaft, Herrschaften (お客たち、または召使から見た家の人々) die Dienerschaft (召使一同) die Lehrerschaft (教員一同) -schaft にはつまり das Personal (人員、一同、一行、団体)の意がある。けれどもその定動詞は複数にしないから、集合名詞(Kollektivum)でありながら集合名詞扱いをしないわけである。(11) den Glücklichen (複数三格)幸福な母子、という代りである。(第四巻 427) 三格になるのは、動詞 nachsehen (見送る)が三格支配故。

14.

Das Schönste(1) hatte Augustus nebenan(2) bei seinem Paten: der(3) rief ihn zuweilen am(4) Abend in sein(5) Häuschen, da war es dunkel, und nur im schwarzen Kaminloch(6) brannte(7) eine kleine, rote Flamme, und der kleine, alte Mann zog das Kind zu sich auf ein Fell am Boden(8) und sah mit ihm in die stille Flamme und erzählte ihm lange Geschichten. Aber manchmal, wenn so(9) eine lange Geschichte zu Ende und der Kleine ganz schläfrig geworden war und in der dunklen Stille mit halboffenen Augen nach dem Feuer schaute, dann kam aus der Dunkelheit eine süße, vielstimmige Musik hervorgeklungen,(10) und wenn die beiden ihr lange und verschwiegen zugehört hatten, dann geschah(11) es oft, daß unversehens die ganze Stube voll(12) kleiner glänzender Kinder war, die(13) flogen mit hellen, goldenen Flügeln in Kreisen(14) hin und wieder(15) und wie in schönen Tänzen kunstvoll umeinander(16) und in Paaren, und dazu(17) sangen sie, und es klang(18) hundertfach(19) voll Freude und heiterer Schönheit zusammen. Das war das Schönste, was Augustus je(20) gehört und gesehen hatte, und wenn er später an seine Kindheit dachte, so war es(21) die stille, finstere Stube des alten Paten und die rote Flamme im Kamin mit der Musik und mit dem festlichen,(22) goldenen Zauberflug(23) der Engelwesen,(24) die ihm in der Erinnerung wieder emporstieg und Heimweh(25) machte.(26)

ä ö ü ß Ä Ö Ü ä ö ü ß Ä Ö Ü ä ö ü ß Ä Ö Ü ä ö ü ß Ä Ö Ü

- (1) das Schöste は四格。(schön は美しいではなく、単に「好い」「面白い」の意。)
- (2) neben-an (すぐ脇で、すぐ隣で)nebenan と bei seinem Paten との配語の順序に関しては第四巻 317.
- (3) der は、指示代名詞で、er と云っても好い所だが、男性名詞が二個 (Augustus と Pate と)あるから、最近に述べた方のものだと云う点に念を入れるために態々[わざわざ]der と云ったのである。こう云う時には dieser (英語の the latter 後者)と云っても宜しい。(dieser に関しては第二巻 182)
- (4) am Abend (晩に) am Morgen (朝に) am Tage (日中)但し in der Nacht (夜中)----その他 am Sonntag (日曜に) am Mittwoch (水曜に) am Anfang (当初に) am Ende (終に) am ersten Dezember (十二月一日に)等、時間関係の副詞的規定には an を用いる句が多い。
- (5) in の次の四格に注意。家の中で、ではなく、家の中へ[呼び入れた]である。
- (6) der Kamin [発音、カミーン] は壁暖炉で、der Ofen は普通のストーヴである。Loch (穴)は、その口のことである。
- (7) brennen, brannte, gebrannt は、所謂混合変化の動詞 (第二巻 108 の最後の注意 2 を見よ。)で、nennen, nannte, genannt (名づける) rennen, rannte, gerannt (走る)等も同様である。
- (8) zu sich auf ein Fell am Boden の配語については、前述の第四巻 317 の規則を適用して考えよ。
- (9) so ein [英語 such a] so eine lange Geschichte (そう云う長い話)と eine so lange Geschichte (そんなに長い話)とはちがう。
- (10) kam..... hervorgeklungen. 此の過去分詞の意味については第四巻 372.
- (11) es geschieht, daß..... (.....という事が起る、即ち会々そういうことがある。)
- (12) voll の二格支配は斯う云う時にはっきりと出るわけである。
- (13) die は指示代名詞。関係代名詞でない事は次にすぐ定形が来ているのでわかる。
- (14) in Kreisen (環を描いて)の in は「中で」ではない。「.....をなして」「.....を形作って」である。次に出て来る in Paaren (組を組んで)も同様。その他の例は in der Gestalt

eines Menschen (人間の形をなして) in Stücken (別々に、ばらで) in Strömen (流れをなして) in Massen (群れをなして) これらは凡て kreisförmig, paarweise, stückweise, stromweise 等、-förmig (.....形に) -weise (.....式に)というのと同じ。

(15) hin und wieder = hin und her. (英 to and fro)

(16) umeinander = einer um den andern お互同志相手の周囲をめぐって。(flogen 飛んだ、に掛かる)

(17) dazu = dabei (それと同時に)dazu には伴奏(begleiten)する意味がある。Er geigt und singt dazu (彼は提琴を弾じ同時に歌を唄う) Er schlummert nun im Meeresgrund und die Wellen murmeln ein Wiegenlied dazu. (彼は今や海底に眠り、浪が子守唄をつぶやいている。)

Da drunten fließt der blaue
Stadtgraben in stiller Ruh';
Ein Knabe fährt im Kahne,
Und angelt und pfeift dazu. (Heine)

見下ろす下は外濠の
静かな流れが青ずんで
小舟に乗った少年が
口笛吹いて釣をする。 (ハイネ)

(18) es klingt zusammen. (交響する)普通の動詞を非人称化したもの。(第三巻 270)

(19) hundertfach (百重に)千態万容に。-fach なる語尾に関しては第四巻 348 を見よ。

(20) je (およそ曾て)は was と云う不定関係代名詞の意を補うためのもの。

(21) es はずっと後の die と云う関係代名詞の先行詞である。此の種の構文については第三巻 279 を見よ。

(22) festlich は Fest, n. (祭)から来ている。同じ祭でも die Feier (儀式の方を指す)と das Fest (後の宴会、余興を含む)とは区別する。feierlich (物々しい、もったい振った、或いは深閑とした)と festlich (賑やかな、お祭気分の)とはむしろ全然反対である。

(23) Zauber は魔法の事。従って「不思議なもの」は直ぐ Zauber- で造語する。日本は Zauberreich (仙境、お伽噺の国)であるとか、Zauberland であるとか云うのもそれである。

(24) Wesen, n. (本質、本体)というのは、つまり所謂「存在」である。詳しく云えば「存在すること」ではなく「存在物」である。たとえば Lebewesen (生物) Doppelwesen (中間物) Teufelswesen (悪魔的存在) Frauenwesen (婦女子)等。Gott ist das vollkommenste Wesen, das überhaupt existiert. (神は凡そ有りとならゆる最も完全なる存在である)なぞと云う時の Wesen がそれである。軽蔑的に用いると Existenz と云う。たとえば dunkle, verdächtige Existenzen (行動不明にして不審の廉[かど]ある分子)等。----茲では Engelwesen は Teufelswesen, Frauenwesen 等と同様、単に die Engel と云うのと同じとも違わない。(因みに wesen という sein と同意で、gewesen にその跡をとどめている。)

(25) Heimweh, n. (懐郷病)英語の homesickness である。-weh は「苦痛」で、Schmerz, m. と同意。Zahnweh, Kopfweh, 等。

(26) machen は verursachen (惹起する)の意。つまり Augustus に里心を生ぜしめたのである。

15.

Indessen wurde der Knabe größer, und jetzt gab es(1) für seine Mutter zuweilen Stunden, (2) wo sie traurig war und an jene Taufnacht zurückdenken mußte.(3) Augustus lief fröhlich in den Nachbargassen umher und war überall willkommen, er bekam Nüsse und Birnen, Kuchen und Spielsachen geschenkt,(4) man gab ihm zu essen und zu trinken,(5) ließ ihn auf dem Knie(6) reiten und in den Gärten Blumen pflücken, und oft kam er erst(7) spät am Abend wieder heim und schob(8) die Suppe der Mutter widerwillig beiseite. Wenn sie dann betrübt war und weinte, fand er es langweilig(9) und ging mürrisch in sein Bettlein; und wenn(10) sie ihn einmal schalt und strafte, schrie er heftig und beklagte sich, daß alle Leute lieb und nett(11) mit(12) ihm seien, bloß seine Mutter nicht. Da hatte sie oft betrübte Stunden, und manchmal erzürnte sie sich ernstlich über ihren Jungen, aber wenn er nachher

schlafend in seinen Kissen lag und auf dem unschuldigen Kindergesicht ihr Kerzenlicht(13) schimmerte,(14) dann verging alle Härte(15) in ihrem Herzen, und sie küßte ihn vorsichtig, daß er nicht erwache.(16) Es war ihre eigene Schuld, daß alle Leute den Augustus gern hatten, und sie dachte manchmal mit Trauer und beinahe mit einem(17) Schrecken, daß es vielleicht besser gewesen wäre, sie hätte(18) jenen Wunsch niemals getan.

- (1) es gibt etwas. 非人称熟語 (第三卷 271)
- (2) Stunden (時間)は「瞬間」の意に用いる。冠詞のないのに注目する必要がある。単数なら eine Stunde と不定冠詞をつける筈の場合だからである。(仏語には des という不定冠詞の複数があるが、英独には之れが無いから、その代りに無冠詞にして置く。)念を入れると gewisse Stunden (或種の瞬間)
- (3) 此の場合は「.....せざるを得なかった」の意の müssen. müssen の此の用法が如何にドイツ人に好まれるかに就ては第三卷 250 に詳しく述べた。
- (4) geschenkt bekommen (贈られて手に入れる、即ち貰う)おいう云い方の geschenkt に就ては第四卷 313 文例を見よ。その ich habe es zugeschickt erhalten と同じ構造である。
- (5) zu essen geben (食べ物を与える) zu trinken geben (飲物を与える)
- (6) auf dem Knie reiten lassen. 子供を膝に乗せて馬の真似をして子供を喜ばせるのは西洋の習慣である。
- (7) erst (やっと)「最初」に非ず。「最初」は zuerst.
- (8) schieben, schob, geschoben. (押す)此处では beiseite schieben (押しのける)
- (9) Langweile, f. (退屈)から来た形容詞。退屈というのは面白くない、厭な、という事である。langweilig の反対は kurzweilig (滑稽な、面白い)
- (10) wenn と als とはどう違うか----wenn は als と違う。als は「或時云々した時に」と、過去に起った一回きりの事実を述べる接続詞であるが、wenn は、その次に来る動詞が過去であろうと現在であろうと、「もしも.....すると」の意になり、従って過去の場合には、何度もあったことを指すのである。次に einmal があるから、wenn のそう云う意味を知らないと、「或る時彼女が彼を叱って罰したら」なぞと訳することになって来る。初歩の人にはよく有り勝ちな間違いである。
- (11) lieb und nett 前述の二語一想なるもの。
- (12) mit ihm = gegen ihn,
- (13) 母親が蠟燭を片手に持って我が児の寝た様子を見に来ている事がそれとなく叙述されている。
- (14) schimmern は微光が輝く事で、蠟燭そのものは leuchten すると云うが、それを反射する小供の顔は単に仄々[そくそく]と明るいに過ぎないから schimmern を用いたのである。
- (15) 酷なことを hart または streng という。その名詞 die Härte は「気の強さ」「気丈夫さ」位の所か。
- (16) 此の第一式接続法に注意。(第三卷 209)エスペラントならば斯ういう時は断然命令形を用いる。ドイツ語では此の場合命令形と第一式接続法との間に形の上の区別がなくて曖昧なのである。
- (17) 此の場合の不定冠詞は、mit einem gewissen Schrecken (或種の恐怖を以て)という意味。
- (18) hätte は接続法故、此の文は前の文の副文章になる。即ち daß を用いるのと同じ。

16.

Einmal(1) stand sie gerade beim Geranienfenster des Herrn Binßwanger und schnitt(2) mit einer kleinen Schere die verwelkten Blumen aus den Stöcken, da hörte sie in dem Hof,(3) der hinter den beiden Häusern war, die Stimme ihres Jungen, und sie bog sich vor, um hinüberzusehen. Sie sah ihn an der Mauer lehnen, mit(4) seinem hübschen und ein wenig stolzen Gesicht, und vor ihm stand ein Mädchen, größer als er, das sah ihn bittend an(5) und sagte: "Gelt,(6) du bist lieb und(7) gibst mir einen Kuß?"

"Ich mag(8) nicht," sagte Augustus und steckte die Hände in die Taschen.

"O doch,(9) bitte, "(10) sagte sie wieder. "Ich will dir ja(11) auch(12) etwas Schönes

schenken."

(1) einmal [発音、アインマール] einの方にアクセントを置くと malの方に置くと「或る時」の意になる。

(2) schneiden, schnitt, geschnitten (剪る)此の場合の schnitt は「剪った」ではなく「剪っていた」という進行形である。(第二巻 114)

(3) Hof, m. は英語の court で、庭と云っても樹や池のある Garten とはちがう。空地、広っ場というとなんか大袈裟になる。

(4) mit. 顔を持って、というのは、顔をして、の意。

(5) ansehen. これは必ず「顔を見る」ことである。たとえば子供が嘘を吐こうとすると、母親が sieh mich an! (私の顔をごらん!)と云う等。

(6) gelt? は nicht wahr? と同じ。詳細は第四巻 385.

(7) 注意すべき und の一用法----これはかなり重要な現象で、一種の習慣であるが、命令文または懇願の意の文にあっては、元来ならば主文章副文章の関係に置かれる可き筈の文を、und でつなぐ事がある。その場合は前の方が主文章的なのが普通である。これは二三例を示す必要があろう。(日本語にもその言い方はある。)

1. Geh und bringe mir eine Flasche Bier! (Geh, um mir eine Flasche Bier zu bringen!) 行ってビールを一本持って来い。(ビールを一本持って来るために行け)

2. Kommt und helft! (Kommt, um mir zu helfen!) 来れ而して助けよ!(助けに来てくれ!)

3. Sei so gut und leihe mir dein Messer! (Sei so gut, mir dein Messer zu leihen!) 親切であれ、而して我に汝の小刀を貸し与えよ。(我に汝の小刀を貸し与える可く親切であれ)

第一第二の場合は日本語にその形式があるが、第三の場合は直訳すると一寸変になるのがわかるであろう。

(8) mögen は此の場合 wollen と同じ様な意になる。(第三巻 247 の(4)に詳述す。)

(9) O doch!----doch は切願の意を表わす言葉である。O, gib mir doch einen Kuß (おゝ、どうか接吻を与えて下さい)の省略形とも見られる。命令法に nur (まあ)を付け加えるとかなり余裕のある命令形が出来、doch を加えると切願になる。Komm nur hierher! (まあ一寸おいでよ) Komm doch hierher! (どうか一寸来て下さい)

(10) bitte! (どうか!)は ich bitte の ich を略した形で、むしろ間投詞に属す可きものである。(第四巻 376 の(2)の表を見よ。)

(11) ja も稍[やや] doch と似た役目を持った助詞で、文章全体に力を入れる時に間に挿む。日本語ならば文章末に「.....だよ」「.....のよ」「.....じゃないか」等を附加する場合に相当する。das ist herrlich! (それは素敵だ) das ist ja herrlich! (それは実に素敵じゃないか!)

(12) auch の用法----auch は、日本語にもよくある或種の「また」である。一寸微妙な機能を持っているから二三例をあげて説明する。

1. 泥坊をすれば懲役になる。「だからまた」泥坊なんかする必要はない。

Wenn man stiehlt, so kommt man ins Zuchthaus; man braucht [ja] auch nicht zu stehlen.

2. それは全然間違っている。僕も「また」そんなことを主張しようとする訳ではない。

Das ist ganz falsch; so etwas will ich auch nicht behaupten.

3. 「彼の男は最近別荘を建てたそうだよ」-----「そりゃそうだろう。あいつはまた非常な金持なんだもの。」

"Er hat sich neulich eine Villa bauen lassen, sagt man."----"Kein Wunder! Er ist [ja] auch ein steinreicher Kerl."

4. あいつは自腹を切ると言っている。それがまた当然だろう。

Er will alles selbst bezahlen: so gehört sich [denn] auch.

要するに、auch は前に一度云ってしまった事に関する再度の註釈であって、ja auch, denn auch 等の結合形を以て現れる事が多い。ja auch は「だからまた」denn auch は「果して」と訳すれば大抵の場合は間に合う。

"Ich habe zwei Äpfel," sagte sie schüchtern.

Aber er drehte sich um (2) und schnitt eine Grimasse. (3)

"Äpfel (4) mag ich keine," sagte er verächtlich und wollte weglaufen.

Das Mädchen hielt ihn aber fest (5) und sagte schmeichelnd: "Du, ich habe auch (6) einen schönen Fingerring."

"Zeig' ihn her!" (7) sagte Augustus.

Sie zeigte ihm ihren Fingerring her, und er sah ihn genau an, (8) dann zog er ihn von ihrem Finger und tat (9) ihn auf seinen eigenen, hielt ihn ans Licht und fand (11) Gefallen (10) daran.

"Also, (12) dann kannst du ja einen Kuß haben," (13) sagte er obenhin (14) und gab dem Mädchen einen flüchtigen Kuß auf den Mund.

"Willst du jetzt (15) mit mir spielen kommen?" (16) fragte sie zutraulich und hing sich an seinen Arm.

Aber er stieß sie weg und rief heftig: "Laß (17) mich jetzt doch endlich (18) in Ruhe! Ich habe andre Kinder, mit denen (19) ich spielen kann."

(1) denn. (第四卷 384)

(2) um- ----sich umdrehen, sich umwenden (くるつとあっちを向く事) um- には、くるりと一回転するという意味がある。その際は分離動詞。(第二卷 146)

(3) Grimasse schneiden, (唇を前へ突き出したり、口をへ字にしたりして、不愉快な、嘲笑的な顔をする事。Gesicht schneiden とも云う。)

(4) Äpfel mag ich keine は Keine Äpfel mag ich または Ich mag keine Äpfel の代りで、Äpfel だけを特に抽出して先頭に据えたのである。(所謂 Voranstellung 先置) Äpfel ? ich mag keine. または Was die Äpfel betrifft, mag ich keine. と考えればよろしい。

(5) festhalten (つかまえる) は aufhalten (引留める) zurückhalten (引留める) の意で、別に「しっかり」と捉えるの意ではない。

(6) この auch は単に「それにまた」の意。前出の auch のような微妙なものではない。

(7) herzeigen. her は自分の方へ近づけること。「出して見せる」とでも云うところ。Her damit ! (出せ、よこせ) などとも云う。

(8) ansehen は人に就て云う時は顔を見る事だが、物体に就て云う時には「眺める」こと。betrachten (観察する) と同じ。打ち眺める、とでも云ったところ。

(9) tun という動詞は非常に便利で、何でも物体を或る場所に移動せしめる時に使って好いのである。etwas in die Tasche hineintun (何かをポケットに入れる) den Faden durch das Ohr (die Öse) tun (針孔に糸を通す) tu mir das Brot her ! (パンをこちらへ寄越せ) 其他 wegtun, forttun (片づける、のける) heraustun (出す) 等。

(10) Gefallen (快感) は gefallen から来たものであるに拘らず男性。

(11) an etwas Gefallen finden (或事に愉快を見出す) という熟字。その他 Er hatte seine Freude daran. (彼はそれを面白がった、打ち興じた) もやはり an を支配する。こういう時には sein (彼の) を附して und fand seinen Gefallen daran と云っても好いのである。

(12) also は nun または其の次の dann と同じようなもので、「それでは」「そんなら」の意。

(13) haben は、物を「やる」とか「貰う」とか云う際に y 用いられる。Da hast du es ! (そらこれをやろう) ich will es haben (僕はそれが欲しい。) Er hat nichts gehabt. (彼は何も貰わなかった。)

(14) obenhin (そわそわと、浅薄に、何でもなく、誠意なく) は、分解すると、表面を (oben) 滑ってあっちへ (hin) 行ってしまふ事である。flüchtig (散漫に、粗略に) nur so (ただ一寸) oberflächlich (皮相的に) leichthin (軽々しく) 等とも云う。

(15) jetzt = nun. (もう、では)

(16) spielen kommen = spielen gehen. 日本語で「行く」という際に kommen を使う事がある。Komm mit ! (一緒に行こう！一緒に来たまえ。)

(17) einen in Ruhe lassen (或人を安息に放置する、即ち、邪魔をしない、構わないこと)

(18) endlich (最後に、即ち、もう好い加減に) は辛抱を切らした時の言葉。jetzt endlich で「もう好い加減に」 ----doch は「.....てばよう」位の所。

(19) denen は関係代名詞、複数三格。先行詞は Kinder.

18.

Während das Mädchen zu weinen begann und vom Hofe schlich,(1) schnitt er ein gelangweiltes und ärgerliches Gesicht; dann drehte er seinen Ring um den Finger und beschaute ihn, und dann fing er an zu pfeifen und ging langsam davon.(2)

Seine Mutter aber stand mit der Blumenschere in der Hand und war erschrocken(3) über die Härte und Verächtlichkeit, mit welcher(4) ihr Kind die Liebe der andern hinnahm. Sie ließ die Blumen stehen(5) und stand kopfschüttelnd(6) und sagte immer wieder(7) vor sich hin: (8) "Er ist ja böse, er hat ja gar kein Herz." (9)

(1) schleichen. たとえば馬の歩き方にも並歩(Schritt) 速歩(Trab または Trott) 駈歩(Galopp)の三種があるように、人間の歩き方にも色々ある。殊に表情なぞも関係して来る。単に歩むのは gehen 闊歩するのは schreiten 走るのは laufen 疾走するのは stürzen, stürmen ぶらぶら歩くのは wandeln, schlendern てくてく歩くのは wandern ペソツとして渋りながら行くのは schleichen である。在来の独和辞書を引いて見ると、どれも実感の伴わない訳になっていて、「匍[はらば]う」「忍び歩く」「拔足差足で歩く」「潜行する」「人目を忍んで歩く」「こっそり逃げる」などの訳語が附してあるが、それは此の動詞の一つの特殊な場合であって、それとは明かに別物である所の「渋りつつ歩く」「悄気て頭垂れた儘一步一步と歩む」という方の意味は全然書いてない。ところが実際用いられる場合には此の意味の方が普通なのである。なるほど雙解辞典には langsam (ゆっくりと)という注意が附してある。けれどもそれも「ぢいっと何物かを覗[のぞ]い狙いながら忍び足で歩く」という方にのみ解釈されているらしい。本当にわかっていたらもつと何とか具体的な訳語が「忍び歩く」以外に別項をなして出ている可き筈である。----schleichen という歩き方に対する実感は、たとえば映画なぞでは盛に出て来る。叱られた子供が家へ帰る時、大威張りで出掛けて行った男が失敗して恥かしそうにのっそりと元の所へ帰って来る時、人を殺してしまった男が万感交々胸に迫りつつ一步一步と其の場を立ち去る時、それらには凡て或種の共通な歩み癖がある、「歩き渋る」とでも云えばよからう。それが schleichen で、極く具体的な、はっきりした概念である。

(2) davon という前綴は von dannen, fort-, weg-, ab- 等と同意で、「去る」意。

(3) erschrecken, erschrak, erschrocken (愕く)の過去分詞を純形容詞的に用いたもの。

(4) 関係代名詞に関する注意----welcher (女性三格)は die Härte und Verächtlichkeit を先行詞とする関係代名詞。その二つは、所謂連句と見るが故に、冠詞も一つで間に合せ、次に関係代名詞で受ける時も単数として取扱う。----それからその前後一帯の意味であるが、日本語には第一こう云った構造の文がないから、直訳文はどうしても一寸変に聞こえるのは已むを得ないのである。類似の例を二三挙げて見ると、Das ist die Beziehung, in welcher ich mit ihm stehe. (これが私が彼と共に立っている所の関係である。) Das kommt auf die Weise an, auf welche er mich behandelt. (それは彼が私を取扱う其の取り扱い方次第による)斯ういう際の in welcher, auf welche, mit welcher 等は日本語では全然訳し方がない。関係代名詞の無い国語は実に不便である。此の問題の場合も、Ihr Kind nahm die Liebe der andern mit Härte und Verächtlichkeit hin (彼女の子供は他人の愛を無情と侮蔑とを以て受け入れた)という文章が基礎となっていると考えればわかる筈である。

(5) stehen lassen, liegen lassen (ほったらかす)

(6) kopfschütteln はてさて困ったもんだ、とか、こいつはいけない、と云う時の表情で、大抵溜息を吐きながら頭をゆるやかに左右に揺る。日本人なら長大息といった所。

(7) immer wieder またしてもまたしても、何度も。

(8) vor sich hin [即ち für sich hin] 第三巻 240 の最後に説明あり。

(9) 心臓を以て情の座とし、頭を以て智の座とするのは洋の東西を問わぬ共通現象で、両者は常に対照をなしている。Warmes Herz und kalter Kopf sind gut beisammen. (温き心と冷静なる頭脳は両立し得)とか Das Herz geht ihm mit dem Kopf durch. (彼の心が彼の頭を誘拐した)とか云ったような事が云われ、冷酷なのを評して Er hat ein steinern Herz (彼の心は石だ)なぞと云うのは皆それである。

Aber bald darauf, als Augustus heimkam und sie ihn zur Rede stellte, (1) da schaute er sie lachend aus (2) blauen Augen an und hatte kein Gefühl einer Schuld, und dann fing er an zu singen und ihr zu schmeicheln und war so drollig (3) und nett und zärtlich mit ihr, (4) daß (5) sie lachen mußte und wohl sah, (6) man dürfe bei (7) Kindern nicht (8) alles gleich so ernst nehmen.

Indessen gingen dem Jungen (9) seine Übeltaten nicht ohne alle Strafe hin. (10) Der Pate Binßwanger war der einzige, vor (11) dem er Ehrfurcht hatte, und wenn er am Abend zu ihm (12) in die Stube kam und der Pate sagte: "Heute brennt kein Feuer im Kamin, und es gibt (13) keine Musik, die kleinen Engelkinder sind traurig, weil du so böse warst," dann ging er schweigend hinaus und heim und warf sich auf sein Bett und weinte, und nachher gab er sich manchen Tag (14) lang alle Mühe, (15) gut (16) und lieb zu sein.

(1) zur Rede stellen 問い詰める、詰問する----詰問を受けるのは Rede stehen 答弁する、という。

(2) aus blauen Augen = mit blauen Augen. aus を用いるのは、眼を肉体の窓であるように見て、その中から本人が首を出していると云う面白い考え方である。これは決して作者の発明ではなく、そう云う云い方があるのである。キョトンとした眼附をしている人に限って使われる文句である。

(3) drollig おどけた、巫山戯た。つまり真剣 (ernst)n の反対。但し多少可愛いという意味が含まれている。大人だったら närrisch (浮かれた、悪ふざけをする)と云うところ。

(4) mit ihr = gegen ihr (彼女に対して、彼女を相手に)何故 mit を使うかと云うに、er war so drollig mit ihr は、換言すれば er trieb es so drollig mit ihr 或いは er ging mit ihr so drollig um. (彼は彼女を相手に馬鹿げた真似ばかりした)という事で、態度ではなく、むしろ行動の事を云おうとしたのである。但しこれは原文よりも註釈の方が難解になっては困るからこれ位にして置く。

(5) so.....daß. ----drollig の前の so と一緒になって、「,,,,,事程左様に」の意になる。

(6) 此の sehen は einsehen (悟った)の意。えいごでも Yes, I see と云えば、「ははあ、わかりました」である。

(7) bei には「.....の場合にあっては」の意がある。即ち wenn man es mit den Kindern zu tun hat (小供を相手にしては、小供が相手では)である。

(8) nicht は、(定形を打消す時以外は)必ず打消さる可き言葉の直前に置くと説明して置いた。(第四巻 400 の前半)此の場合は alles を打ち消しているのではなく、dürfe nicht である。それはその次の alles gleich so ernst nehmen (なんでもすぐに大真面目に考える)が全体として一つの句に考えられるからである。----すぐ次の行の nicht の位置に関しても同じ事が云える。ohne alle Strafe hingehen (何等の罰なくしてすむ)は単一なる熟語である。

(9) 三格に Ethischer Dativ, Dativ des Interesses (利害関係の三格)なるもののある事は第四巻 418 に述べたが、これも其の例である。利害の三格は、どうも「.....に」で訳するのはまずい。「.....に取っては」とでも云わないと日本語にならない。

(10) ohne alle Strafe hingehen については数行上に述べた。人間を主語にすると Er ging nicht immer ohne alle Strafe aus, または er kam nicht immer ohne alle Strafe davon (彼は必ずしも何の罰もなくして脱出すると云うわけではなかった。)

(11) 逃げる (fliehen) 畏れる (sich fürchten) 等の意味の句が vor を要求すると云う事は既に一回註しておいた。

(12) zu ihm in die Stube (彼の所へ、部屋へ)という副詞的規定の序列についても前に註した事がある。(規則は第四巻 317) 此处では ihm in die Stube 即ち in seine Stube と云っても好い。(第四巻 416)

(13) 此の es gibt の使い方は、第三巻 272 es gibt の項を覚えている人には、一見規則に反する如く思われるであろう。これはあの es gibt ではない別な es gibt である。即ち es wird gegeben (催される)の意である。たとえば、今月は歌舞伎に何が「掛かって」いるか、(Was wird in diesem Monat in Kabuki gegeben?) 曲目は.....だ。(man gibt.....或は es gibt 或は wird gegeben.)

- (14) *manchen Tag* に *lang* がついて四格になるのは何故か？(第四巻 428)
 (15) *sich Mühe geben* (努力する) = *sich bemühen, bemüht sein, versuchen*.
 (16) *gut* には「親切」という意味がある。前に述べた *sei so gut und sage es niemand!* (どうか後生だからその事は誰にも云ってくれるな) 等の言い廻しの *gut* がそれである。*gütigst* (どうか)の事も第三巻 228 で述べた。

20.

Jedoch das Feuer im Kamin brannte seltener und seltener, (1) und der Pate war nicht (2) mit Tränen und nicht mit Liebkosungen zu (3) bestechen. Als Augustus zwölf Jahre alt (4) war, da war ihm der zauberische Engelflug in der Patenstube schon ein ferner Traum geworden, (5) und wenn er ihn einmal (6) in der Nacht geträumt hatte, dann war er am nächsten Tage doppelt wild und laut und kommandierte seine vielen Kameraden als Feldherr über alle Hecken weg. (7)

Seine Mutter war es (8) längst müde, von allen Leuten das Lob ihres Knaben zu hören und wie fein und herzlich er sei, sie hatte nur noch (9) Sorgen um ihn. Und als eines Tages (10) sein Lehrer zu (11) ihr kam und ihr erzählte, er wisse (12) jemand, der erbötig (13) sei, den Knaben in fremde Schulen zu schicken und studieren zu lassen, da hatte sie eine Besprechung mit dem Nachbar, und bald darauf, an einem Frühlingsmorgen, kam ein Wagen gefahren, (14) und Augustus in einem neuen, schönen Kleide stieg hinein und sagte seiner Mutter und dem Paten und den Nachbarsleuten Lebewohl, weil er in die Hauptstadt reisen und studieren durfte. Seine Mutter hatte ihm zum letzten Male die blonden Haare schön gescheitelt und den Segen (15) über ihn gesprochen, und nun zogen die Pferde an, (17) und Augustus reiste in die fremde Welt.

- (1) *selten* (稀な) *seltener und seltener* = *immer seltener*. (第三巻 225 の 1.)
 (2) *nicht* が二個連続して使っているのは *weder.....noch.....* というのと同じ。(第四巻 307)
 (3) *war.....zu bestechen*. (第四巻 291)
 (4) *zwölf Jahre alt*. (第四巻 428)
 (5) *war geworden* = *werden* (成る) の過去完了。なっていた。
 (6) *einmal* = *zufällig* (たまたま)
 (7) *über alle Hecken wegkommandieren*. (あらゆる生籬の上を越えて号令引率し去る)之れを称して *Lativum* (搬動語法)と云ったのである。(第四巻 430) 丁度持って来いの実例であるから必ず 430 を一読復習して貰いたい。
 (8) *es.müde* (疲れた) *zufrieden* (満足したる) *gewohnt* (慣れた)はすべて支配が定っていて、*müde* は二格 (*ich bin des Schreibens müde* 私は書くのに疲れた) *zufrieden* は *mit* (*ich bin zufrieden mit dir* 私はお前に満足する) *gewohnt* は *an* 又は二格 (*ich bin an das Rauchengewohnt*, または *des Rauchens gewohnt*)となっているが、「それ」と云う *es* の場合だけは四格支配になる。(*ich bin es müde, ich bin es zufrieden* 等)
 (9) *nur noch* (ただもう.....のみ)
 (10) *eines Tages* (或日の事)此の二格の形が副詞的になる事に就ては第四巻 329.
 (11) *zu* については第三巻 239.
 (12) *wissen* の補足語に人間を意味する字が付くと、それは *kennen* (顔見知りがある)の際とは違って、「心当りがある」という意になることは既に註で述べた。
 (13) *erbötig* = *bereit*. (申し出でている、志がある) *erbötig sein* で「提議している、申し込んでいる」の意。*das Anerbieten* (申し出で) *sich er bieten* (義侠的に打って出る)等と関係がある。----日本語でなら動詞で云い表わす所を、形容詞で云い表わす事は決して少くない。*bemüht sein, bestrebt sein* 努力する *so frei sein, etwas zu tun*. (敢て.....する)等。
 (14) *gefahren kommen* に関しては第四巻 372.
 (15) *den Segen über einen sprechen* (ある人の上に祝福の辞を述べる)とは要するに *einen segnen* (或人を祝福する)ことである。子供が旅行に出ようとでも云う時には必ず親が祝福してやる。子は親の前に跪[ひざまず]いて合掌し、親はこの頭上に手を置き、天を仰

いで神の祝福を乞う。たとえば沙翁のハムレットの中のポローニアスが子息レーヤーチーズに与える祝福、または Dumas (デュマ) の「三銃士」の最初の、ダルタニアンが巴里へ出掛ける時に父から受ける祝福等は人口に膾炙した名場面である。一たいに父母の祝福、父母の呪いは人の運命を左右する力を持つものとされている。

(16) über ihn. ----或人の上に (祝福あれ、呪あれ) というのは、その人の全運命を一瞥の下に集めて、という気持の文句である。über は時々そう云う意味を持つことがある。

Ein Unglück kommt über mich. (不幸が一身に振り掛かる、頭上に一下[いっか]する。)
Standrecht ist über die Hauptstadt verhängt. (首都に戒厳令が布かれている。)

(17) anziehen は普通の anziehen (着物を着る) という方ではなく、全然別字である。馬が鞭打たれてぐっと一引き車を引く、その次にはごろごろと車が動き出すわけであるが、その最初の衝動 (Anstoß) を与えるのを anziehen と云うのである。an- の此の意味は、諸種の面白い造語を許す。たとえば跳躍 (Sprung) をやるものは、まずスプリングボード (Schwungbrett) の後に引き下って相当の距離を置き、然る後はつと身がまえして Anlauf nehmen (スタートを切る、機[はず]みをつける) をする。それが Anlauf (勢をつけるための走り) である。その他 Anstoß (最初の衝動) Anlaß (動機) Anfang (初め) Ansatz (意志の動き) 等の an- はみんな「初め」という意味を持っている。

21.

Nach manchen Jahren, als der junge Augustus ein Student geworden war und rote Mützen (1) und einen Schnurrbart trug, (2) da kam er einmal wieder in seine Heimat gefahren, (3) weil der Pate ihm geschrieben hatte, seine Mutter sei (4) so krank, daß sie nicht mehr lange leben könne. (5) Der Jüngling (6) kam am Abend an, und die Leute sahen mit Bewunderung zu, (7) wie (8) er aus dem Wagen stieg und wie der Kutscher ihm (9) einen großen ledernen Koffer in das Häuschen nachtrug. Die Mutter aber (10) lag sterbend in dem alten, niederen Zimmer, und als der schöne Student in weißen Kissen ein weißes, welches Gesicht liegen sah, das ihn nur noch (11) mit stillen (12) Augen begrüßen (13) konnte, da sank er weinend an der Bettstatt nieder und küßte seiner Mutter (14) kühle Hände und kniete bei ihr die ganze Nacht, (15) bis die Hände kalt und die Augen erloschen waren. (16)

(1) Mütze, f. (縁のない帽子、英語の cap) が此处で複数になっているのは、一般的に云ったからである。理屈を云い出せば、或る時期の間、一つの帽子を冠り通すと云う方が反って不思議な位である。要するに単数複数という問題は必ずしも形式的には裁き得ない。たとえば、縦令[たとえ]十人子供のある人でも für Weib und Kind (妻子のためには) 命を投げ出すであろうし、たとえ一人しか子供の無い人でも ich habe auch für Kinder zu sorgen それに子供(複数)の事も考えなくっちゃ成らないし、と云う。Kinder と云うから何人いるのかと思って訊ねて見ると実は只今のところ一人きりだと云ったような事が有勝ちである。要するに一般的に云う時には、具体的に考えた数とは必ずしも一致しない。

rote Mützen は日本語でなら「赤帽なんてものを」である。同様に、「私が彼と初めて遭った時には、彼は金時計を持っていた」を訳するとすると、これは具体的な一つの金時計を指して云うのだから、er trug eine goldene Uhr と云うが、「彼は昔も金時計なんてものをぶら下げたものだ」と一般的に云う際には Ehemals trug er goldene Uhren という。(Ehemals trug er eine goldene Uhr と云えば、さて其の時計は其の後どうなったろう、質屋へ行ったか人に呉れたか? なんて事が問題になって来る。「金時計なんぞ」の意の時計には goldene Uhren である。) 一時に二個も三個も下げて歩いたのではない事は勿論である。それに反して、複数の物を一般的に云う際には好んで単数を使う。Er hat ein gutes Ohr. (彼奴は仲々耳がさとい) aus dem Auge, aus dem Sinn. (眼を去れば心を去る。去るものは日に疎し。)

(2) tragen, trug, getragen. 「運ぶ」ことにも云うが「持っている」「帯びている」「身につけている」ことにもいう。Kleider tragen (着物を着る) einen Hut tragen (帽子を冠る) Schuhe tragen (靴を穿く) Brille tragen (眼鏡を掛ける) einen Bart tragen (髭を生している) den Kopf hoch tragen (頭を高く持する) einen Namen tragen (名を有する) 等、身につけて持っているものを何でも tragen と云う。

(3) gefahren kommen. [これも前出の通り]

- (4) (5) 名親の手紙の間接引用故第一接続法。
 (6) Jüngling (青年)と云う言葉で既に彼が子供(Kind)や少年(Knabe)ではない事が告げられている。
 (7) zusehen (見物する)----zu には英語の at の意がある。der Zuschauer (観衆) zuhören (傾聴する) zulächeln (微笑みかける) zureden (助言する、言ってきたせる) zulaufen (押し寄せる)
 (8) 「.....云々するのを」 見る、または聞くと云う際、即ち sehen, hören 等の次には、日本語で考えると daß を用いそうな所で独逸語は wie を用いる。別に「如何に.....するかを」という程 wie の意が強く出るのではなくて、単に「.....するのを」または「.....する所を」の意に過ぎない。
 (9) ihm は nachtragen と合して意味をなす。即ち einem etwas nachtragen (或人の後から或物を運ぶ)という使い方である。nach- の前綴の附く動詞は大抵三格を要求する。einem nachsehen (或人の後姿を見送る) einem etwas nachsagen (ある人の陰で或事を噂する。)
 (10) aber という接続詞には、一種の極く軽い意味の用法がある。まあ日本語の「ところが」または「ところで」または「一方」(andererseits)である。時には単に「すると」と云う意味だけしかない事がある。それは叙事詩的の文体に多い (epischer Stil)。此処の aber (一方)の妙味がわかったら独逸語はもう卒業です。
 (11) nur noch (今はただ)註 20 の[9]を見よ。
 (12) still = stumm (黙した)
 (13) begrüßen は四格を支配する。故に ihn.....begrüßen.
 (14) seiner Mutter (二格)が kühle Hände の前に行く構造に就ては第一巻 71.
 (15) die ganze Nacht (四格、副詞的)に就ては第四巻 325.
 (16) Da liegt er 彼は「倒れた」----日本語では「動作」として云いそうな所を「状態」で云う事がある。Er ist da ! (彼が来た) Da liegt er ! (彼は其処に横たわっている、即ち、彼は倒れた！の意。)殊に bis の後に於ては最後の活人画的と云おうか画面的と云おうか、一つの静止的効果をねらって、状態を以て動作の代りにする事が多い。過去完了はつまり画面的、状态的表現である。

22.

Und als sie die Mutter begraben hatten, da nahm ihn der Pate Binßwanger am(1) Arm und ging mit ihm in sein Häuschen, das schien dem jungen Menschen noch niedriger und dunkler (2) geworden, und als sie lange beisammen gesessen waren und nur die kleinen Fenster noch schwach in der Dunkelheit schimmerten,(3) da strich der kleine alte Mann mit hageren Fingern über(4) seinen grauen Bart und sagte zu Augustus: "Ich will ein Feuer im Kamin anmachen,(5) dann brauchen wir die Lampe nicht. Ich weiß, du mußt morgen wieder davonreisen, und jetzt, wo(6) deine Mutter tot ist,(7) wird man(9) dich ja so bald nicht(8) wiedersehen."

- (1) 「或人の腕を取る」と日本語では云うが、決して腕だけ取るのではなく、腕と共に御本人そのものをも拉し去るのであるから、ドイツ語では einen am Arm nehmen (或人を腕の所で取る)と云う。同様に泥坊の襟首を掴むのは einen Dieb beim Nacken fassen もしくは ihn an der Kehle fassen である。am Arm は決して捉まえる方の人の腕ではない。相手 (einen) の方の腕なのである。けれども、事實は、要するに腕を組んで (Arm in Arm) 歩くと云う所に帰着する。
 (2) noch niedriger und dunkler [als es früher war 以前そうであったよりも]
 (3) schimmern は前に一度注意したように、輝くのではない、灰 [ほの]かに白く見えることである。
 (4) über と四格=或物の表面を伝わって、の意がある。über das Wasser (水面を渡って) über die Wangen (双頬を伝わって)
 (5) an- 点ずる、つける、出す。aus- 消す、とめる、しめる。---- an- は aus- と対照して、火や光やその他電気なぞを「附ける」「消す」という時に用いる前綴である。das Feuer anmachen (火をつける) ausmachen (消す)水道の栓をねじて水を出すのは andrehen, とめるのは ausdrehen. (drehen は、ねじる事)電気のスイッチをパチン(knips!)と捻って附

けるのは **anknippen**, **anknipfen**, 消す方は **ausknippen**, **ausknipfen** と云う。(扉や本を開閉するのを) **auf-** と **zu-** とで現わすのと同じ様な問題である。

(6) **wo** と云う接続詞は必ずしも空間的ではなく、時間的にも用いる。**in der Zeit**, **wo.....** (云々の時に於て) **in dem Augenblick**, **wo.....** (.....云々の瞬間に於て)

(7) **tot ist**. これも日本語なら動詞で云いそうな所を形容詞を用いて状態として云う一例で、これは極くわかり易い。

(8) **nicht so bald** と云いそうな所を **so bald nicht** と云ってある。これは **so bald** を強めんがためである。第四巻 401 「局部強調の目的を以てする **nicht** の後置」の項を見よ。

(9) **mann** の二格三格四格は **eines**, **einem**, **einen** を用いる----**man** というのは、此处では **Binßwanger** 氏が自分自身の事を指して云っているのである。**wir** を使っても構わないが、ドイツ語は、主語を具体的に指したくない時にはよく **man** を使う。誰かが部屋へ這入って来ると **man kommt hier nicht herein!** (這入って来てはいけません!) 子供が六人もあると仲々楽じゃないね、と自分の事を云う時でも **So leicht wird es einem nicht, wenn man sechs Kinder hat.** [**einem** は **man** の三格、第二巻 183 の注意 1 を見よ] 要するに日本語で主語を省く時には **man** で云うと思えば大過はないと知る可きである。

23.

Indem er das sagte, zündete er ein kleines Feuer im Kamin an und rückte seinen Sessel näher (1) hinzu, und der Student (2) den (3) seinen, und dann saßen sie wieder eine lange Weile und blickten auf die verglühenden Scheiter, (4) bis die Funken spärlicher (5) flogen, und da sagte der Alte sanft: „Lebe wohl, Augustus, ich wünsche dir Gutes. (6) Du hast eine brave (7)

Mutter gehabt, und sie hat mehr an (8) dir getan, als du weißt. Gern hätte (9) ich dir noch einmal Musik gemacht und die kleinen Seligen (10) gezeigt, aber du weißt, (11) das geht (12) nicht mehr. Indessen sollst du sie nicht vergessen und sollst wissen, daß sie noch immer singen und daß auch du sie vielleicht einmal wieder hören kannst, wenn du einst mit einem einsamen und sehnsüchtigen Herzen nach (13) ihnen verlangst. Gib mir jetzt (14) die Hand, mein Junge, ich bin alt und muß schlafen gehen. (15) “

Augustus gab ihm die Hand und konnte nichts sagen, er ging traurig in das verödete (16) Häuschen hinüber und legte sich zum letzten Male (17) in der alten Heimat schlafen, (18) und ehe er einschlief, meinte (19) er von drüben ganz fern und leise die süße Musik seiner Kindheit wieder zu hören. Am nächsten Morgen ging er davon, und man hörte lange (20) nichts mehr von ihm.

(1) **näher** は **nah** (近き) の比較級で、それを副詞として用いたもの。

(2) **und der Student** [**rückte**] **seinen** [**Sessel näher hinzu**] と云う可きを、全文に既にある字だけ省いてしまったのである。これを省略 (Ellipse) という。

(3) 「彼のそれ」は **der seine / seiner / der seinige**---- **den seinen** は **seinen Sessel** の代りであるが、こう云う省略の時には大抵定冠詞をつける。但し時には **der seine** の代りに **seiner** と、強語尾で現わすこともある。また **der seinige**, **des seinigen** 等、物主代名詞に **-ig** の語尾をつけた形容詞を用いることもある。

(4) **Scheit**, n. (薪) の複数。 **scheite** という複数もある。

(5) **spärlicher** [比較級] つまり、今までよりもより貧弱に、より心細く、の意。

(6) **Gutes** = **viel Gutes** と云っても好いところ。

(7) **brav** は、此处では別に「勇敢な」と云う意味ではない。「元気の好い」という意でもない。そんなのとは全然違った **brav** である。「好いお母さん」と云えばよかろう。**wacker** と云う。**gute Mutter** と云えば「親切な母」になり、**ehrliche Mutter** と云えば「正直な」また時とすると「貞女」のようにもきこえる。そこで日本語の「好い」という字が別になければならない。それが **brav** である。

(8) **an dir** = **gegen dich, für dich** (おまえに対して)

(9) **hätte**. これが約束法である。**wenn es sich machen ließe** (もしも出来ることならば) を裏に置いて考えればわかる。

(10) **die Seligen**. **selig** は、「瞑福なる」の意で、時には死んだ人々の事も云い、時には、今の場合の様に天使の事も云う。つまり天国、天上、神の世界に住むものの謂である。**die**

seligen Götter (至福の神々)等、ほとんど神、天使、故人等の枕詞 (Epithet)だと思えばよろしい。語根は Seele (霊)から来ているから、本当は (霊界の)という意味で、幸福な、という意はむしろ後から生じたと見るべきである。

(11) du weißt, Sie wissen 等は、wie du weißt, wie Sie wissen (御存じの如く)と同じ。

(12) das geht nicht. = das ist nicht möglich. 日本語の「そう云う訳に行く」とか「行かない」とか云う語法によく似ている。das geht nicht an. と angehen の形を用いることもある。

(13) verlangen (憧れる)は nach を支配する。

(14) jetzt は、今までにも度々あった通り、「今」ではなく、「では」という意のことがある。即ち nun (英語の now)と同じである。

(15) schlafen gehen (就寝する)は熟語。vor dem Schlafengehen (就寝前)なぞと名詞にすら用いる位である。

(16) verödet. öde (荒れた、荒寥たる)と同じ。das verödete Häuschen というのは、母が亡くなって一人きりになった自分の家。

(17) zum letzten Male は「遂に」ではない。「これを最後に」即ち寝おさめをしたわけである。

(18) sich schlafen legen. (寝るために身を横たえる)

(19) zu hören meinen = zu hören glauben. 聞くような気がする。Es war ihm (Ihm war), als hörte er.....でもよいわけ。

(20) lange. 長い間という時には -e の語尾をつけて lange と云う。lang と云う時はむしろ省略した形である。(但し前に数量の規定を付けると必ず lang と云う。zwei Stunden lang 二時間の間、等。)

話の内容に関する註釈。---- 敏感な読者は、作者が何を談らんとするかを既に看破された事と思うが、老婆心までに作品の思想に関する解説を一寸附加えて置く。例の不思議な音楽と天使の舞とは一たい何の心算であろう？それは何かの象徴 (Sinnbild, Symbol) に違いない。まだ世の中の悪を知らぬ幼年時代には耳に聞こえ眼に見えるが、もはや一旦世の濁流を浴びて、悪智慧が付き、意識が生じ、一人前になり掛かると云うともう聞く事も見る事も出来ない。「もう一度お聞かせ申したいが、もう一寸お聞かせする訳にも行かない」と云った教父 Binßwanger 氏の言葉は意味深長である。彼は同時に付け加える、「しかしその内にまた、あなたが孤独におなりになって、本当にもう一度聴きたいと心からお願いになる事があれば、或いはまた聞こえないものでもありますまい。」

天使の楽の意味する所は、一言にして云えば「善心」である。人生の「里心」である。それは人生の出発点を意味すると同時にまた人生の帰結を意味する。子供は願わずして天楽を聞き、老人は紆余曲折の人生を通過した後に於て.....(幸いにして心眼が開け得度の境地に達した暁には)願って之れを再び聞く事が出来る。前者はこれを意識前の善心と呼ぶ事が出来、後者は之れを意識後の善心と呼ぶ事が出来る。die schöne Seele (美しき魂)というのはつまり斯う云う善心を云うので、善しき魂にも此の二種類がある。要するに仏教の思想とちつとも違わない。人生るるや善、善は悪によって揚棄せられ、そのまた悪が必然的に再度の善を胚胎する。目的論的 (teleologisch) に云えば、悪心は最後の善心を生まんがための契機 (Moment) であつて、最後の善心こそ、これ即ち弁証論的第三者 (dialektisches Tertium) であり、人生窮極の目的であるということになって来る。之れが此の童話の教訓 (fabula docet) である。どうか其の心算で読んで頂きたい。

24.

Bald vergaß er auch den Paten Binßwanger und seine (1) Engel. Das reiche (2) Leben schwoll (3) rings um ihn, und er fuhr auf seinen Wellen mit. (4) Niemand konnte so wie er durch schallende (5) Gassen reiten und die aufschauenden Mädchen mit spöttischen Blicken grüßen, niemand verstand so leicht und hinreißend (6) zu tanzen, so flott (7) und fein im Wagen zu kutschieren, (8) so laut und prangend (9) eine Sommernacht im Garten (10) zu verzechen. (11) Die reiche Witwe, deren Geliebter er war, gab ihm Geld und Kleider und Pferde und alles, was er brauchte (12) und haben wollte, mit ihr reiste er nach Paris und nach Rom und schlief in ihrem seidenen (13) Bett, seine Liebe (14) aber war eine sanfte, blonde

Bürgerstochter, die er nachts mit(15) Gefahr in ihres Vaters Garten besuchte und die ihm lange, heiße Briefe schrieb, wenn er auf Reisen(16) war.

(1) seine は勿論 Pater Binßwanger を指すので、主人公の事ではないすぐ前の名詞を受けて und で結びつけられる物主代名詞は西洋語独特のもので、近頃はたゞ日本語にも其の口調が輸入されて来た。物主代名詞には大した意味はないと思つてよろしい。Pater Binßwanger と天使達とを殆んど一体として考えるから seine と云うので、もし両者をはっきり区別しようと云う時には dessen Engel という。

(2) 枕詞 [Epitheton] に用いられる形容詞---- das reiche Leben. reich (豊富な) というのは、bunt (多色) vielfältig (多様な) unerschöpflich (無盡蔵な) な事で、斯ういう式の形容詞は、epithetisch (枕詞的) である。即ち数個ある人生の仲で reich なのが、という意味ではなく、人生というものは reich なものであると云う、一般的宣言が其処に言い現わされているのであるから、枕詞的というのである。(これに反して、大きな子供とか青い花とか云う際の形容詞を determinierend 限定的)、と呼ぶ事が出来る。枕詞的な例を挙げると、たとえば der große Cäsar, der tapfere Siegfried などと固有名詞に附く枕詞を初め、料理術を讃美して die edle Kochkunst といい、葡萄酒を der kühle Wein (清冷なる薫酒) と呼ぶのなども、みなその部類に属する。文学書の翻訳によく見る誤訳は、この枕詞を普通の限定的な意味に取ったのがかなり多い。

(3) schwellen の意味----schwellen. 辞書の訳語だけでは一寸実感の得られない字である。schw という子音に関する実感が先ず必要であるが、これは英語の sw なんぞよりはずっと豊かな響きを持っていて、何でも斯う「ざわざわ」とした「濛々」とした「混沌」たる響きを表わす。たとえば幾千羽の鳥が群 (Schwarm) をなして飛ぶ時の羽音は schwirren すると云う。濛々たる蒸気や毒瓦斯は Schwaden と呼ばれ、胎内に何者かが「むくむく」と満ちているのは schwanger (妊娠せる) であると云ったように、独逸人は此の schw については或種の定義し難い語感を持っているのである。また schw の次に流動子音 (Liquida) 即ち l, n, m, 等が来ると、或種の軟らかさが加わって、「脹れる」と云ったような運動概念が生ずる。schwellen が其の一例で、「澎湃と」嵩が増すことになる。即ちざわざわ、ぶくぶく、むくむくと無数の雑音を伴いながら物がその内部から「むくみ」上って来る事である。此処では水嵩にたとえて云つてあるから、同様な例をあげて見ると、ゲーテの Der Fischer (漁夫) という譚詩 (Ballade) の最初に次のような詩句がある。

Das Wasser rauscht', das Wasser schwoll,	潮はどよめき潮は満つ、
Ein Fischer saß daran,	磯に釣する漁夫ありて、
Sah nach dem Angel ruhevoll,	水冷胸に迫りつつ、
Kühl bis ans Herz hinan.	無心に針を眺めたり。

それから漁夫は海の魅惑と水の神秘に誘われて、入るとはなしに水に入ってしまうと云うのが筋であるが、此の神秘的な「海の気配」を表現するのに schwoll の一語が如何に効いているか！本篇の主人公の場合も、人生を海に譬えるとすれば正にそれである。

(4) und er fuhr auf seinen Wellen mit. (そして彼はその波に浮かんで一緒に乗り出した。) そして今後は彼もまた人生の怒濤の翻弄する所となる、と云う訳である。

(5) schallende Gassen = lärmende, belebte Gassen. どよめく巷。---- 現代の日本で云えばまづ銀座と云った様なところ、なるべく人での多い所を選んで馬を駆るなぞと云うのは、大学生なぞの最も好むところである。その目的は勿論女たちに見られたいという所にある。

(6) hinreißen は浚って行くことで、hinreißend は人の気持を浚って行く様に、心も行かむばかりに、思わず見惚れるように、の意。

(7) flott も、泛[うか]ぶが如くに、飄乎[ひょうこ]として、なだらかにの意。軽い華奢な馬車がするすると走るのを形容するには持って来いの字である。

(8) Kutsche, f. (馬車) Kutscher (馭者) から造った動詞で、自から操車すること。das Auto (自動車) だったら hinter dem Steuerrad sitzen (操輪を執る) とか auteln (ドライブする) とか云うところ。

(9) prangen は元来「光る」ことであるが、それを抽象的に用いて、「異彩を放つ」ことに

云う。(prunken ともいう)

(10) 夏の夜、麦酒を飲みながら、提灯(Lampion)の満飾を施した料理屋の園で園遊会をやるのは大学生生活の最も楽しい部分である。彼等は室内の宴を好まない。

(11) ver-「.....し果す」---- 四格を補足語とする ver- の造語に注目する必要がある。einen Abend verpaidern (一晚を喋舌り明かす) das ganze Leben vertrödeln (一生を無為に過ごす) die Gelegenheit versäumen (ぐずぐずして機会を逸する) die ganze Nacht vertrinken (一夜を飲み明す) ---- 以上は時間的であるが、Haus und Hof vertrinken (家も邸も飲み果す) sein Geld verspielen (所持金を賭博で費い果たす)等の造語もある。---- zechen は飲食すること。だから勘定の事を Zeche という。

(12) brauchen (要する)= bedürfen (二格支配) ; gebrauchen (使用する)と混同すべからず。

(13) 物質名から「.....製の」という形容詞を作る時には、-en をつけるものと-ern をつけるものとがある。Gold 黄金 golden 金製の Metall 金属 metallen 金属製の Seide 絹 seiden 絹製の Silber 銀 silbern 銀製の Erde 土 irden 土製の----Stein 石 steinern 石製の Glas ガラス gläsern 硝子製の Wachs 蠟 wächsern 蠟製の Eisen 鉄 eisern 鉄製の Stahl 鋼 stählern 鋼鉄製の

(14) seine Liebe という Liebe は、lieb (親愛なる)という形容詞から転来したものではなく、die Liebe (恋)という抽象名詞の方である。それが転意して Geliebte, Liebchen, Lieb (恋人)の意に用いられるのである。恋人に向って、汝は meine Hoffnung (私の希望) meine Sehnsucht (わが憧れ)であると云う Anrede (呼びかけ)があるが、そう云う風に meine Liebe (我が愛よ)と云ったのが初まりである。seine Liebe は「彼の意中の人」とでも云うか。

(15) mit Gefahr = auf die Gefahr hin, entdeckt zu werden 見附かるという危険を冒して。----これが所謂批評の副詞句(第四卷 330)で、方法の副詞とは具合がちがうのである。たとえば er besuchte sie ungestraft weiter (彼はなおも彼女を訪問し続けたが幸い無難にすんだ)というのと、ungestraft (罰せられずに)等は一寸また変って結果の副詞になる。(第四卷 331)

(16) auf Reisen (旅行中)の Reise が複数になっているのも、前の rote Mützen の場合と同じように、どの旅行ともなく、一般的に云うからである。

25.

Aber einmal kam er nicht wieder.(1) Er hatte Freunde in Paris gefunden, und weil die reiche Geliebte ihm langweilig geworden und das Studium ihm längst verdrießlich(2) war, blieb er im fernen Land und lebte wie die große Welt,(3) hielt(4) Pferde, Hunde, Weiber,(5) verlor Geld und gewann Geld in(6) großen Goldrollen, und überall waren Menschen, die ihm nachliefen und sich ihm zu eigen gaben(7) und ihm dienten, und er lächelte und nahm es hin,(8) wie er einst als(9) Knabe den Ring des kleinen Mädchens hingenommen hatte. Der Wunschzauber(10) lag(11) in seinen Augen und auf seinen Lippen, Frauen umgaben ihn mit Zärtlichkeit,(12) und Freunde schwärmten(13) für ihn, und niemand sah – er selber fühlte es kaum –, wie sein Herz leer und habgierig geworden war und seine Seele krank und leidend lag.(14) Zuweilen wurde er es müde, so von allen(15) geliebt zu sein,(16) und ging allein verkleidet(17) durch fremde Städte, und überall fand er die Menschen töricht und allzu(18) leicht zu gewinnen, und überall schien ihm die Liebe(19) lächerlich, die ihm so eifrig nachlief und mit so wenigem zufrieden war. Frauen und Männer wurden ihm oft zum Ekel,(20) daß(21) sie nicht stolzer(22) waren, und ganze Tage brachte er allein mit seinen Hunden hin(23) oder in schönen Jagdgebieten(24) im Gebirge, und ein Hirsch, den er beschlichen(25) und geschossen hatte, machte ihn froher als die Werbung(26) einer schönen und verwöhnten(27) Frau.

(1) 旅に出るとある以上は必らず何時かは帰って来るものである。ところが遂に一度出たっきりになってしまった。此の云い方が仲々気が利いていて面白い。碎いて云えば Aber es kam doch die Zeit, wo er nicht wieder zurückkam.

(2) das Studium war ihm verdrießlich = er war des Studierens müde (geworden) うんざりし

た。

(3) die große Welt = die höhere Gesellschaft, die Großen (上流社会、貴顕)

(4) 抱える、置く、取る、飼う、使う、等が halten. たとえば Autos halten (自家用自動車を持っている) zwei Hausmädchen halten (下女を二人置く) Zeitung Halten (新聞を取る) 等、何でも専用することを云う。

(5) 所謂 Konkubine (妾)

(6) 此の in については前に述べた。即ち儲けるのも負けるのも、決して in geringeren Summen (少額ずつ)ではない。札で云うなら in dicken Bündeln または bündelweise (束をなして、束で算えるほど)の取引が行われるのだが、金貨だから、積んで柱(棒と云ってもよからう)にして紙で巻いた Rolle, Goldrolle (金貨の棒)を単位にして話すほど話が大きい事を云うのである。in は、-weise という語尾でも云い表わせる。

(7) sich einen zu eigen geben (我身を或人に、その人の所有物として与える)即ち sich einem widmen 人に身を捧げる。その人の奴隷 (Leibeigener, Sklave) となって、その人に頗使[いし]される等を云う。

(8) hinnehmen 軽々しく受ける。何でもない事のように受け入れる事。

(9) als Knabe 子供として、即ち子供の時に。

(10) Wunschzauber の Wunsch は「願い」の意ではなく、呪詛の意である。そう云う意味では、たとえば verwunschen (魔法にかかった)という形容詞がある。「いばら姫」(Dornröschen)の童話では、たとえば城仲が魔法に掛かって凡てのものが眠り込んでしまいが、そう云う、魔法にかかって百年後に目覚めると云った様な呪を受けた城を das verwunschene Schloß と云う。

(11) liegen は、斯う云う時には「宿る」「籠る」の意。はっきりと輪郭が見定められ、位置が決まっている時には stehen を使うが、唯何とはなしにその辺に在る「気配」がすると云う時には liegen がよらしい。

(12) zärtlich [発音 zä は長]は、「柔しい」の外に、「惚れっぽい」「恋心の」という、情愛の方に就て云う事が多い。たとえば Roderich Benedix 作の zärtliche Verwandten (情愛深き縁者たち)という喜劇は非常に名高い大衆的なものであるが、それは「情深い」と「多情の」との二つの概念に掛けた皮肉で、人物としては、大勢の女がいて、それがみんな一人の男を対象にして自分に惚れていると思ひ込んでいると云う滑稽が中心をなしている。要するにどっちつかずな変な形容詞で、略日本語の「醜女[しこめ]の深情」という「なさけ」にあたるのが Zärtlichkeit である。(英語の tenderness)

(13) für etwas schwärmen 或物に熱狂する。溺愛、感激を Schwärmerei と云う。

(14) 状態を表わす時に、形容詞と主語とを sein で結びつける以外、sein の代用になる繫詞的動詞 (kopulative Berben) が沢山ある。liegen もその一つである。Sie ist krank---sie bleibt krank---sie wird krank---sie liegt krank---sie steht gelassen da (悠々としている)----sie sitzt verlassen.

(15) 形容詞の名詞化したものは必ず大書するが、指示詞等の名詞化は小書する。(第二巻 197)

(16) geliebt zu sein = geliebt zu werden. werden の代りに sein を用うる例は少なくない。Sei mir begrüßt! (挨拶されてあれ、よくいらっしやいました)等。殊に wollen を伴う時には必ず sein で受身を表わす。Etwas anderes will auch berücksichtigt sein. それと少し違った点も考慮されねばならぬ。(soll....werden と同じ)

(17) verkleidet (変装して)は、つまり incognito (お忍びで)の意で、別に verklappt, verummt (仮装して、マスクをつけて)という程ではない。

(18) 「余りにも」は zu, allzu, vielzu, viel zu viel, allzu sehr. leicht zu gewinnen は「容易に得べき」または「得べく容易なる」である。限定と被限定の関係を誤ってはならない。(第四巻 283 及び 291, 292 を見よ)

(19) 茲では die Liebe (愛)が人格化されている。

(20) wurden ihm oft zum Ekel. Ekel (嘔吐)というのはつまり Gegenstand des Ekels (嘔吐の対象)である。Frauen und Männer ekelten ihn an. と anekeln (嘔吐を催さしめる)と云う動詞を用いて言ってもよい。

(21) daß の前には、glaubend (.....と思つて) sagend (と云つて) sich fragend (と不審りつつ)等の概念が省かれ.....ると云うよりはむしろ飛び喻え (überspringen) られてしまう事

がある。此处では前の文の主語が **er** でないから **glaubend** ではつなぎ得ないが、**darin** (.....という点で) を **daß** の前に置いて考えればわかる。意味は **weil sie nicht stolzer waren** である。

(22) **stolzer** [比較級] 大意は、何故もっと自尊的でないのかと憤慨して、であるが、碎いて云うと **daß sie nicht stolzer waren, als es bei ihnen meistens der Fall war. ---- der Fall sein** はそうであるの意。

(23) **hinbringen** [暮す] は **zubringen, verbringen** とも云う。

(24) **Gebiet, n.** は「領地」「領区」

(25) **beschleichen**. この **schleichen** こそは「忍び歩く」という意である。そして、或物を目標にして或る動作をすると云う時には、その動詞に **be-** を附して他動詞を作るのが慣例で或る。「或物に就て話す」は **von etwas sprechen**. 「或物を論ずる」は **etwas besprechen** 等。

(26) **werben** [um 支配] は、物でも人でも好い、何かを「求める」「手に入れんと試みる」事である。(英語の **to woo**) 男女関係では、口説く、言い寄る、時には求婚する意味になる。**erwerben** (獲得する) は、それに **er-** (目的到達を意味する前綴) の附いたものである。外に似た意の **freien** という動詞もあるが、これは露骨に「縁談を持ち掛ける」、時には、結婚する、事である。

(27) **verwöhnt** は、「悪い癖のついた」が第一の意で、それから「気むずかしい」「好みのむずかしい」「機嫌取りのむずかしい」「気持の奢[おご]った」という意になる。

26.

Da sah er einstmals auf einer Seereise die junge Frau eines Gesandten, (1) eine strenge, (2) schlanke Dame aus nordländischem Adel, die stand zwischen vielen andern vornehmen Frauen und weltmännischen (3) Menschen wundervoll abgesondert, (4) stolz und schweigsam, als wäre niemand ihresgleichen, (5) und als er sie sah und beobachtete und wie (6) ihr Blick auch (7) ihn nur flüchtig (8) und gleichgültig zu streifen schien, war (9) ihm so, als erfahre (10) er jetzt zum allerersten (11) Male, was Liebe sei, und er nahm sich vor, (12) ihre Liebe zu gewinnen, und war von da an (13) zu jeder Stunde des Tages in ihrer Nähe und unter ihren Augen, und weil er selbst (14) immerzu (15) von Frauen und Männern umgeben war, die ihn bewunderten und seinen (16) Umgang suchten, stand er mit der schönen Strengen (17) inmitten (18) der Reisegesellschaft (19) wie ein Fürst (20) mit seiner Fürstin, und auch der Mann (21) der Blonden (22) zeichnete ihn aus (23) und bemühte sich, ihm zu gefallen.

(1) 第二巻 193.

(2) 女が **streng** (厳[おごそか]な) だと云うのは、峻厳な、威ある、の意。日本の女にはあまり見かけぬ型である。

(3) **Weltmann** とは、社交に長けた、世渡りを心得た、外交官、政治家、銀行家等の型の男である。たとえば **Goethe** はその戯曲 **Torquato Tasso** に於て **Weltmann** 型の冷静老練な **Antonio** と、芸術家型の熱烈な純真の **Tasso** とを対立比較して表現している。

(4) **vereinzelt** (孤立して) **abgetrennt** (離れて)

(5) **ihtesgleichen, seinesgleichen, meinesgleichen, deinesgleichen**. (同輩) はみんな格変化をしない。

(6) **wie = da** (.....だったので、.....だから) **weil** の意を持つ。

(7) **auch ihn**. (彼をも、彼をすらも) **auch** は前置的接続詞。第四巻 309, 310, 311.

(8) **flüchtig = vorübergehend, leichthin, obenhin**.

(9) **es war ihm [so], als ob.....** と同じ。非人称熟語。第三巻 271.

(10) 前に **als ob** を用いれば **erfahre** はずっと文の最後に来る。**als ob** 又は **als** の次には普通は第二式接続法を用いるが、此处は第一式になっている。第三巻 217.

(11) **aller-erst** の前綴 **aller-** に就ては第三巻 224.

(12) **sich** (三格) **etwas vornehmen** 或事を志す。企てる。

(13) **von da an** (その時以来) の **an** に就ては第三巻 240.

(14) **er selbst** (彼自身が) = **auch er** (彼の方でも)

(15) **immerzu = immer, beständig** (しょっちゅう)

(16) **seine Umgang = seine Freundschaft**.

- (17) mit der schönen Strengen =どちらも形容詞であるから同じ語尾を取っている。
 (18) inmitten [二格支配の前置詞] (.....の真只中に)
 (19) Gesellschaft 「一行」「一同」「一座」の意。
 (20) Fürst, m. は元来は侯爵の意であるが、英語の prince と同じく、何でも王侯、支配者ならば Fürst と呼ぶ。
 (21) der Mann (良人)= Gemahl, Gatte.
 (22) die Blonde (金髪の女)も形容詞の名詞化である。
 (23) einen auszeichnen (或人を他の衆と区別すること、即ち特別待遇し、特に引き立てること。)英語の to distinguish である。

27.

Nie war es ihm möglich, mit der Fremden(1) allein zu sein, bis(2) in einer Hafenstadt des Südens die ganze Reisegesellschaft vom Schiffe ging, um ein paar(3) Stunden in der fremden Stadt umherzugehen und wieder eine Weile Erde unter den Sohlen zu fühlen. Da wich(4) er nicht von der Geliebten, bis(5) es ihm gelang,(6) sie im Gewühl eines bunten(7) Marktplatzes im Gespräch zurückzuhalten. Unendlich viele kleine, finstere Gassen mündeten (8) auf diesen Platz, in eine solche Gasse führte er sie, die ihm vertraute,(9) und da sie plötzlich sich mit ihm allein(10) fühlte und scheu(11) wurde und ihre Gesellschaft nicht mehr sah, wandte er sich ihr leuchtend(12) zu, nahm ihre zögernde Hand in seine und bat (13) sie flehend, hier mit ihm am(14) Lande zu bleiben und zu fliehen. Die Fremde war bleich geworden und hielt(15) den Blick zu Boden gewendet. (16) "Oh,(17) das ist nicht ritterlich,"(18) sagte sie leise. "Lassen Sie mich vergessen, was Sie da(19) gesagt haben!"(20)

- (1) die Fremde [形容詞より転用した名詞] 作者は「彼女」という代りに色々な形容詞を用いて、或いは die schöne Streng, 或いは die Blonde 或いは die Fremde と呼んでいる。
 (2) bis 意味は「.....まで」であるが、第四巻 300 に長々と説明した如く、茲では後続的(konsekutiv)に取って、後で訳すべきである。従って、「すると其のうちに」とか「遂に」とか、副詞のように訳する事になる。
 (3) ein Paar は「一対の」 ein paar は「二三の」(einige)である。第四巻 352.
 (4) weichen, wich, gewichen (その場を去る)三格支配の際は(第四巻 419)「避ける」の意であるが、von を支配すると、sich entfernen (遠ざかる)の意になる事がある。
 (5) 此の bis は、限定的に訳しても後続的に訳しても好いわけ。
 (6) gelingen は非人称動詞である。es gelingt mir (私は成就する)または物象を主語にする。
 (7) bunt, a. (雑色の、即ち賑やかな、目まぐるしい。)
 (8) münden (注ぐ)これは Mund (口)から来た動詞で、元来は河が海に「注ぐ」事を云う。(Mündung, f. 河口)それから転じて、路が広場等に向けて其の端を接する事にも云うのである。
 (9) einem vertrauen 或人に信頼する。---- 斯う云う風に、日本語と「てにをは」の関係がちがうもののがかなり沢山ある。第四巻 422. 女の方では何も知らずに信頼していると、相手は飛んでもない unzuverlässiger Reisegefährte (信用のならない道連れ)だったわけである。
 (10) allein [英語の alone]日本語では「二人きり」「三人きり」と云う所でもドイツ語では何時でも「一人きり」all-ein である。selbender (二人で) selbdritt (三人で) selbviert (四人で)等の言葉はあるが、普通は使わない。また nur (ただ)という概念が籠らないから、やはり allein が好いのである。
 (11) scheu = (怯えた、怯気ずいた)schüchtern という形容詞もあるが、これは別に「あわてる、心配する」の概念が這入らず、むしろ「遠慮勝な」「はにかみ屋の」「内気な」性質を云うのであるが、scheu は一時の性質で、心配してまごつく意味が多分に含まれる。たとえば馬が scheu になれば人を投げ落す、等。
 (12) mit leuchtenden Augen (輝く眼眸を以て) mit strahlendem Antlitz (面に晴々した色を見せて)と云っても好いところ。

- (13) bitten 日本語とは格支配がちがって、或人「を」願うという使い方である。
- (14) am Lande (陸地に) im Lande (国内に) auf dem Lande (田舎に)の三つは前置詞で区別する。
- (15) den Blick zu Boden gewendet halten (視線を地に向けて保つ)halten というのは、要するに何かを一定不動の状態のまま持続する時に使う言葉で、たとえば手を「翳す」のも die Hände so oder so halten 足を上げた儘にして置くのも die Füße aufgehoben halten 等。
- (16) gewendet = gewandt. wenden の三要形には二種類ある。
- (17) 「おゝ」という間投詞に二つある。o!の方は、詩的、且つ悲劇的な「おゝ」で、o Götter! (おゝ神々よ)と云った様な時に使うが、oh!の方はもっと散文的で、呆れた時や、否定する時や、「なあに！」と受け流す時などに用いる。此の oh!は、発音する時に、大抵同時に顔を横に向けるのが習慣である。
- (18) ritterlich, a. (騎士的、即ち紳士的)西洋人はたとえ現代人と雖も往古の騎士の如き態度を以て婦人を礼遇し、夜晚くなれば腕を取って家に送り届け、車の乗降にも手を貸す等、婦人崇拜、女人保護の美風は中世期と変りがない。然るに、保護すべき筈の男子が反って婦人を拐[かどわ]かさんとしたのであるから nicht ritterlich (非紳士的)だと云ったのである。
- (19) da (其処に)は日本語なら「唯今」とでも云う可き所であろう。
- (20) Lassen Sie das Gesagte ungesagt sein!とも云う。もし本人が自から取り消す時には ich will das nicht gesagt haben!とも云う。

28.

"Ich bin kein Ritter," rief Augustus, "ich bin ein Liebender, und ein Liebender weiß nichts anderes(1) als die Geliebte, und hat keinen Gedanken,(2) als bei ihr zu sein.(3) Ach, du Schöne, komm mit, wir werden glücklich sein."

Sie sah ihn aus(4) ihren hellblauen(5) Augen ernst und strafend an. "Woher konnten Sie denn wissen," flüsterte sie klagend,(6) "daß ich Sie liebe? Ich kann nicht lügen: ich habe Sie lieb und habe oft gewünscht, Sie möchten(7) mein Mann sein. Denn Sie sind der erste, den ich von Herzen geliebt habe. Ach, wie kann Liebe sich so weit verirren!(8) Ich hätte(9) niemals gedacht, daß es mir möglich wäre, einen Menschen zu lieben, der nicht rein und gut ist. Aber tausendmal lieber will ich bei meinem Manne bleiben, den ich wenig(10) liebe, der aber ein Ritter und voll(11) Ehre und Adel ist, welche Sie nicht kennen. Und nun reden Sie kein Wort mehr zu mir und bringen Sie mich an das Schiff zurück, sonst(12) rufe ich fremde Menschen um(13) Hilfe gegen Ihre Frechheit an."

(1) anderes (他の物、他の事柄)と anders (別様に)とが似ている。一は名詞的にして他は副詞的、時には、形容詞的用法。且つ nichts Gutes (nothing good)の際は形容詞の名詞化を大書するが、anderesは大書しない。(第二巻 185)

(2) keinen [anderen] Gedanken.

(3) als mit ihr beisammen zu bleiben. (彼女と一緒にいることより.....)

(4) aus ihren Augen = mit ihren Augen.

(5) hell (明)は dunkel (暗)の反対で、hellblau は淡青色 dunkelblau は濃青色。

(6) in einem klagenden Ton. (嘆くが如き調子で)

(7) 現在であれば ich wünsche, Sie mögen mein Mann sein. (od. : ich wünsche, daß Sie mein Mann sein mögen.)過去ではどちらも過去にする、但し mögenの方は mochtenではなく、接続法第二式(過去形)を用いて、ich habe gewünscht, Sie möchten mein Mann sein. または、過去の場合には wärenを用いて、Sie wären mein Mann. と云った方が簡単になる。(第三巻 210)

(8) sich weit verirren というのは、飛んでもない所へまで好い込んでしまう事、即ち日本語の所謂「脱線」をする事である。たとえば心理学上の変態現象(Abnormitäten) 破倫(Perversitäten) 頹廢(Depravation)等は凡て天然の本性が迷いに堕したもの(Verirrung der Natur)と考える。同じ様に「愛情」と云うものも本道を離れて迷誤倒錯(Irrtümer und Verkehrtheiten)に陥ることがあるものである。夫人はそれを嘆いて自責したのである。Liebeに冠詞がないのは、「抑も愛なるもの」と云う一般性を強めんが為めである。

(9) 「まさか斯々であろうとは夢にも思わなかった」と、日本語でならば事実宣言の直説法で云うところを、独逸語では、「まさか斯うであろうとは私は思わなかったであろう」と約束法で云うのが例である。それは、「たとえそう思わなければならない様な事情が身に迫ったと仮定しても、これまでの自分であれば決して斯々斯様には考えなかったに違いない」と云う意味だから約束法になるのである。同じ様に、「汝は左様な事をすべきではなかった」 *du hattest es nicht tun sollen* と云う代りに *du hättest* 云々と云う。要するに、過ぎ去ってしまった事を思い出して、想像で云う際には必ず約束法を用いるのである。

(10) *wenig* は準否定詞である。第四卷 397.

(11) *voll* (.....に充ちた) は二格支配であるが、こういう形容詞も何も附かない簡単な名詞の場合には、所謂無格 (*Nennform* 引用形) を持って来る。 *Adels* とならないのはその訳である。

(12) *sonst* = *andernfalls* (然らずんば) 時には *oder* と云う。 *oder* ならば其の次は倒置を行わない。

(13) *um* は前にも度々述べた通り、「何々を求めて」と云う意になる場合がある。

29.

Und ob(1) er bat und ob er knirschte,(2) sie wandte(3) sich von ihm und wäre allein gegangen, wenn er nicht schweigend sich zu ihr gesellt(4) und sie zum Schiff begleitet(5) hätte. Dort ließ er seine Koffer an Land bringen und nahm von niemand Abschied.(6) Von da an(7) neigte sich das Glück des Vielgeliebten.(8) Tugend und Ehrbarkeit waren ihm verhaßt geworden, er trat sie mit Füßen,(9) und es wurde sein Vergnügen, tugendhafte Frauen mit allen Künsten seines Zaubers zu verführen und arglose Menschen, die er rasch zu Freunden gewann, auszubeuten(10) und dann mit Hohn zu verlassen. Er machte Frauen und Mädchen arm, die er dann alsbald verleugnete,(11) und er suchte sich(12) Jünglinge aus edlen Häusern aus, die(13) er verführte und verdarb.(14) Kein Genuß,(15) den er nicht suchte und erschöpfte; kein Laster, das er nicht lernte und wieder wegwarf. Aber es(16) war keine Freude mehr in seinem Herzen, und von(17) der Liebe, die ihm überall entgegenkam, klang nichts in seiner Seele(18) wider.(19)

(1) *obgleich, ob auch* (たとえ.....しても) *wenn gleich, wenn auch* (同意)等の、所謂認容文章を作る接続詞は、それに附加される *gleich, auch* を、前半部と離して文章の中途に挿入する事もあり、或いは全然省略してしまう事もある。ここはその後者の場合の好例である。(認容文章の構成に就ては第四卷 299)

(2) *kn-* で始まる語の意味---- *knirschen* (齒軋りする、齒を食いしぼる) *kn-* で始まる字には、或種の共有な性質がある。それは必ず、何かを手か指か、それとも齒でもって力強く押しつける動作である。丁度日本語の「ぎゅっ」とか「きゅっ」とか云うのに当る。

kneifen つねる *kneten* 捏[こね]る *knicken* 挫[くじ]く、折る
knipsen パチッと弾く *knittern* 皺にする *knüpfen* 結ぶ
knutschen 犇[ほん、ぎゅう?]と締めつける *knoten* 結び目を作る
knabbern ガリガリ嚙る *knastern* はぜる(パチパチ云う)
knautschen 折目をつける、折る *knebeln* 棒で締め上る、しぼる
knarren ぎしぎし云う *knacken* 潰す、ひねり潰す

名詞も従って、何か小さくて同時に「ぎゅっ」としたものが多い。

Knoten (木の瘤) *Knolle* (球根、結節) *Knopf* (ボタン、即ち糸の節)

Knäuel (絲毬) *Knauf* (擬宝珠のようなもの) *Knochen* (骨) *Knie* (膝頭)

Knospe (蕾)---- 斯う云う *symbolische Onomatopöie* (象徴的擬音)に対する感じを養う事は非常に重要である。

(3) 認容文章の後には普通定形の倒置を行わない。(第四卷 299)

(4) *sich gesellen*. (或人に一緒にいる、合する、同伴する) 故に仲間の事を *Gesell* (或いは、職人の意) と云い、その集合名詞的な転形が *Gesellschaft* (一行、社会、寄り合い、

会社)

(5) **begleiten** (同伴する、附いて行く) **gleiten** (滑る)に **be-** が附いたものではない。**leiten** (導く)から **geleiten** (案内する)が生じ、**begleiten** になったのである。そんな現象は多い。たとえば **Glück** は英語の **luck** である。**Gelücke** (**Ge-** と **-e** で挟む造語は **Gebirge**, 山嶽、等沢山ある)から生じたのである。英語との比較として一寸面白いから序で紹介して置く。こう云う風に連絡を取って行くと単語を覚えるのが楽になるから、英語を知っている人はなるべく語源的検索をして、何か因縁を附けて単語を覚えるようにすると好いと思う。**einen begleiten** は、或人の行く方へ附いて行くことで、自分が積極的に案内をする時にはむしろ **geleiten** と云った方が好い。

(6) 即ち、這々[ほうほう]の体で、こっそりと逃げてしまった訳である。こんなのを **ohne Sang und Klang abziehen** (楽隊ぬきで退却に及ぶ、旗を巻いて逃げ出す)という。

(7) 此の **an** に就ては第三巻 240.

(8) 第四巻 427.

(9) 土足に掛けて踏み躪[にじ]った、蹂躪した。

(10) **ausbeuten** (利用し盡す)これは資本主義の発達した近代に至って盛んに用いられるようになった言葉で、人間をまるで牛か豚の様に心得て、「搾取」することである。「剥ぎ取る」と云っても好い。(仏語の **exploiter** の移植。)---- 彼はもはや明らかに **pervers**, a. (破倫的) **dämonisch** (悪魔的)になったわけである。悪のための悪 (**Das Böse um des Bösen willen**) 自己目的としての悪 (**das Böse als Selbstzweck**) を営む (**betreiben**) ようになったのだ。

(11) **einen verleugnen**. 或人を否認すると云うのは、**n ihm nichts mehr wissen wollen** (その人をもはや相手にしない)または **ihn gar nicht gekannt haben wollen**. (その人と知己であった事実を認容しない)事である。たとえば、会いに行ってももう会って呉れないとか、途中で遭っても知らん顔をするとか、そんな事を一括して云うのである。つまり裏切ることである。聖書の話でよく引用されるのは、**Petrus** が主を否認したと云う聖徒史上の一暗影である。---- **verleumden** (中傷する)と似ていて混同する。

(12) **sich** (三格)

(13) **die** 以下の従属文も、「後続的」に訳す可能きである。(第四巻 300 に「後続的」の説明あり。)

(14) **verderben, verderb, verdorben**. (英語の **spoil**)

(15) **Es war kein Genuß**. (如何なる享樂もなかった)の省略形。茲で例の二重の否定 (**doppelte Negation**) という語法が現れている。(第四巻 396 の 2)それから茲の所は斯うも云える **Kein Genuß, er suchte und erschöpfte ihn** 等。(第四巻 404 **kein.....doch** の項を見よ。)ただその **doch** を省いたきりである。

Ich kroch durch alle Krümmen des Gebirgs,

Kein Tal war so versteckt, ich späht' es aus; (Schiller, Wilhelm Tell, II. 2.)

つづら織りなる路づたい、深山の奥に分け入りて、

谷とし云わむ谷々の、里は隈なく訪れぬ。

(シルレル、ウイヘルム・テル 二幕二場)

(16) **es war** は「それは何とかであった」に非ず。非人称の熟語。(第三巻 270, 271 を見よ)

(17) **Nichts von der Liebe klang in seiner Seele wider**. [他人が自分に捧げる]愛の幾分だに彼の心の中に反響を惹起さなかった。斯う云う際にはよく **Nichts** と **von** の附いた部分とを離してしまつて、まず **von.....** を前に抽出するのが普通である。**von.....** だけを訳するとすれば **was die Liebe.....betrifft** (.....の愛となると)とでも考えるより仕方がない。---- 彼はあまり人に愛され過ぎるので **blasiert** (鈍った)になってしまつて、ちっとも心に反響を感じないのである。人々の側から云うと、彼等は何等の **Gegenliebe** (相手の愛)を以ても酬いられないのである。そういう **blasiert** な人間を **lieblos und kalt** であると言ふ。

(18) **Geist, m.** (精神)は智の座であり、**Herz, n.** (心)は情の座であり、**Seele, f.** (魂)となると、凡そ人間の中樞の最も神秘的な奥であると考ええる。その **Seele** に何の反響も起らないとあれば、その人間はよくよく救われない。神に見捨てられた者だという事になって来る。作者はそれを考えて **Herz** とせず **Seele** としたのである。

(19) wider- という前綴は、wieder- (再び)の意の時はこう云う風に分離する。gegen- (反して、抗[あらが]って)の意の時には分離しない。字数は後者の場合の方が多い。(第二巻 146)

30.

In einem schönen Landhaus am Meere wohnte er finster und verdrossen und quälte die Frauen und die Freunde, die ihn dort besuchten, mit den tollsten(1) Launen(2) und Bosheiten.(3) Er sehnte sich danach, die Menschen zu erniedrigen und ihnen alle Verachtung zu zeigen; er war es(4) satt(5) und überdrüssig von unerbetener,(6) unverlangter, unverdienter(7) Liebe umgeben zu sein,(8) er fühlte den Unwert seines vergeudeteten und zerstörten Lebens, das nie gegeben und immer nur genommen(9) hatte. Manchmal hungerte er lange Zeit, nur um doch(10) wieder einmal ein rechtes(11) Begehren zu fühlen und ein Verlangen stillen zu können.

(1) toll, a. 狂染みた、乱暴な、無茶苦茶な。----たとえば向う見ずな事を tollkühn という。また、「それはあんまり乱暴だ」は das ist zu toll! ---- 此处では übermütig (図に乗った、附け上った)と云っても好い所。

(2) Laune, f. は単に「機嫌」ではなく、「吾儘な行動」「突飛な思いつき」「突拍子もない振舞」の事である。(英語の caprice) hysterisch な婦人なぞが時々飛んでも無い事を言い出して周囲の人を手挺こずらせる。それが Laune である。穩便に云えば Grille (奇想)である。

(3) Bosheiten. böse (意地が悪い)から来た名詞。-heit, -keit は抽象名詞の語尾であるが、必ずしも Schönheit (美しさ) Tugendhaftigkeit (徳性)のように、「.....性」を意味する抽象名詞にはならない。殊に -heiten 等複数語尾を持っている際には、「性質」ではなく「物」そのものである。Grobheiten (失礼な云い草、皮肉) die Öffentlichkeit (公衆、江湖)等。

(4) es は、er war es müde (彼はそれにうんざりした)等に於けるが如き es で、müde (倦[あ]きる) satt (倦きる) überdrüssig (厭気を催す)等の形容詞は、名詞が来れば二格支配であるが、----

Ach, ich bin des Treibens müde !

Was soll all der Schmerz und Lust ? (Goethe)

あゝわれ俗事に倦み果てぬ !

そも何故の苦ぞ樂ぞ ? (ゲーテ)

---- 単に「その事に」という時には dessen (二格)ではなく、es (四格)を用いる。ich bin es müde, (または satt, überdrüssig) immer wieder zu lieben und zu hassen. (私は又しても愛したり憎んだりするのが煩わしくなった。)

(5) satt und überdrüssig は所謂 Hendiadyoin (二語一想)

(6) unerbeten これは erbitten, erbat, erbeten (乞う、願う)ちは直接に関係のない形容詞。

(第四巻 375 過去分詞の純形容詞化の項)むしろ Leichenbitter (葬式に招く役)

Hochzeitsbitter (結婚式に招待する役)等に現れた「招待する」という bitten と意味上の関係がある。つまり「頼みもしない」「おせっかいな」の意。

(7) unverdient (身に覚えのない)或る事をして、その努力によって或物を手に入れる資格を帯びるに至る事を etwas verdienen と云う。(英語の merit) Du hast es erworben, aber nicht verdient. (汝はそれを手に入れた。しかし手に入れて宜しい程の事は何もしなかった。)また、悪い事に関しても用いる。Ich habe seinen Haß nicht verdient. (私は彼に憎まれる様な事をした覚えはない。)そういう時には、相手の自分に対する憎しみは ein unverdienter Haß (身に覚えなき怨)である。故に此の場合の unverdiente Liebe と云うのは、主人公から考えると、人々が何故自分を愛するのか分らない、と云う意味を含めた云い廻しである。

(8) umgeben zu werden は「取り巻かれる事」 umgeben zu sein は「取巻かれている事」

(9) 人間觀の愛の現象を geben (人に愛を捧げること)と nehmen (人から愛を受けること)との対照で一般的に云い表わしたので、斯う云う言葉使いは、殊に近代の独逸人には最も gang und gäbe (普通)なことであり、誰も怪しむものはない。当然 (ganz an der

Tagesordnung)な抽象となっている。Geben ist seliger als nehmen (与うるは受くるより幸福なり----使徒行伝 20, 35)という聖書の文句も、時には「恋はされる者よりする者が幸である」という意味に取られる。この場合が現にそうである。

(10) doch (せめて) wieder (また) einmal (一度は) = 「たまには」と云う熟語。

(11) rechtes Begehren. まともな欲望、即ち欲望らしい欲望。

31.

Es(1) verbreitete sich unter(2) seinen Freunden die Nachricht, er sei krank und bedürfe der (3) Ruhe und Einsamkeit. Es(1) kamen Briefe, die(4) er niemals las, und besorgte(5) Menschen fragten bei der Dienerschaft nach(6) seinem Befinden.(7) Er aber(8) saß allein und tief vergrämt(9) im Saal über(10) dem Meere, sein Leben lag leer und verwüstet hinter (11) ihm, unfruchtbar(12) und ohne Spur der Liebe wie die graue(13) wogende Salzflut. Er sah häßlich aus, wie er(14) da(15) im Sessel am hohen Fenster kauerte und mit sich selber (18) Abrechnung(17) hielt. Die weißen Möwen trieben(19) im Strandwinde vorüber, er folgte ihnen mit leeren Blicken, aus denen jede Freude und jede Teilnahme(20) verschwunden war. Nur seine Lippen lächelten hart und böse, als er mit seinen Gedanken zu Ende(21) war und dem Kammerdiener schellte.(22) Und nun ließ er alle seine Freunde auf(23) einen bestimmten Tag zu einem Fest einladen; seine Absicht aber war,(24) die Ankommenden durch den Anblick(25) eines leeren Hauses und seiner eigenen Leiche zu erschrecken(26) und zu verhöhnen. Denn er war entschlossen,(27) sich(28) vorher mit Gift das Leben zu nehmen.

(1) es は文法上の主語、無意味、第三巻 273 文の非人称化の項を見よ。

(2) unter (第三巻 237 の 4)

(3) bedürfen は二格支配故 der Ruhe und Einsamkeit (女性二格)となっている。

(4) die 以下の副文章は後続的に考えないとわからない。

(5) besorgt, a. 心配したる (a. は形容詞の略符)

(6) nach etwas fragen (或事を聴き糺す、聴き求める)

(7) sich so und so befinden (斯々の近況である、状態である、様子である)から来た名詞。近況、様子。主として健康の様子の事を云う。

(8) 斯う云う時の aber が andererseits (一方) seinerseits (彼の方では)等の意味になる事は既に述べた。

(9) Gram, m. (内心の煩悶)から来た形容詞。

(10) über と三格は、その上方に静止している事である。此処の所の光景は、恐らくは伊太利の Venedig (ヴェニス)が Modell になっているらしい。そうとすれば海に懸かった楼阁は想像するに難くない。その下をゴンドラでも通ると云う訳であろう。西洋人は、世を遁れた金持ちは必ず南欧の海岸(Monte Carlo, Venedig, Neapel)等に別荘を構えるものと相場を決めている。

(11) 主人公は今や過去を省みている。故に lag hinter ihm と云ったのである。

(12) unfruchtbar (稔らざる、実を結ばざる)彼の一生は、蒔けども稔らず、照らせども暖まらぬ荒漠たる海洋の如きものであったという比較である。蒔けども、とは、人々の方からは度々愛して来たけれども、の意。稔らずとは、彼の心はそれに対して少しの反応も起さず、人間らしい感情を孕んだ事がなかったの意である。斯ういう風に、「荒寥」という状態を海洋の冷たい浪に譬えて云うのは文学者の常套手段と云っても好い程になっていて、たとえば詩人 Lenau は、自分の一生を回顧して、「もっと享樂すべきものを享樂し、人生らしい人生を送っておけば好かった」という悔恨の情を得意の題材にして歌っているが、その中でも、自分の過去を海に比較した詩があるが、それは正に此の場合と同じ観方である。

Herbst. (Ricolaus Lenau)

Nun ist es Herbst, die Blätter fallen,

Den Wald durchbraust des Scheidens Weh,

落ち葉の音に秋立ちて

森に無常の風満ちぬ

Den Lenz und seine Nachtigallen
Versäumt' ich auf der wüsten See.

鶯聞かず春知らず
荒海行きつありし間に

Der Himmel schien so mild, so helle,
Verloren ging sein warmes Licht;
Es blüete nicht die Meereswelle,
Die rohen Winde sangen nicht.

春陽熙々[きき]と照せども
冷たき汐を如何にせむ
浪間に花は咲かざりき
風は囀[さえず]り啼かざりき

Und mir verging die Jugend traurig,
Des Frühlings Wonne blieb versäumt;
Der Herbst durchweht mich trennungsschaurig,
Mein Herz dem Tod entgegenträumt.

かなしく過ぎし青春よ
見事逸せし行楽よ
必滅の秋におののきつ
死を想う身は夢心地

(13) grau, a. (灰色の、陰惨な) grau は単に色の名称ではなく、其処には多分に「恐しい」と云う色彩が加味される。grausig (物凄しい) gruselig (気味悪い) Greuel (惨虐) などと云う類似の語が gr と共に副音となって mitklingen (同時に響く、混響する) するからである。

(14) wie は、「現在.....云々しているところは」と、ある事実の現場を挙げる接続詞である。これが主文章の er sah häßlich aus の er ともっと密接な関係になると、wie er がそれを先行詞とする関係代名詞ともなるのである。(第二巻 173 wie と人代名詞で表わす関係文。)

(15) da (其処に、現在、眼前に、まのあたり) は上述の wie を強めんがための副詞である。

(16) kauern は日本人その他の東洋人がやるように蹲踞している訳ではなく、猫背を作って厭々と腰掛けてのことである。「しゃがむ」と云うよりは「うずくまる」と云った方が好い。

(17) Abrechnung halten (清算する) ---- 長らく手を入れなかったために紊乱[びんらん]状態に陥入っていた財政を清算するように、個人の頭の中でも時々そうした清算が行われる。紊乱が行詰ると、最後の大詰めという奴がやって来て、其処で人間は一応自己の生活に対する概観を行い、反省を試み、仔細に批判を試みんとする事がある。それを称して mit sich selbst Abrechnung halten (自分を相手に総決算をする) と云ったのである。それは自己分裂を来たした(mit sich uneinig geworden)人間が、自己に満足(mit sich zufrieden)である事が出来なくなって、自我の中に内乱が生じた(mit sich hadern)ために、何とかして安住の心境が見出したい(sich mit sich selbst versöhnen) と思って努力(an sich selbst arbeiten)する所に生ずる局面である。所謂キリスト教の Weltgericht (最後の審判) を如実にして、自らを被告とし、自らを裁き手とした、此の世ながらの地獄である....と牧師ならば云うであろう。まあそんな事はどうしても好い。次を読めばわかる通り、主人公は一応帳尾を締め括る事(vorderhand einen Abschluß machen)に決心した。

(18) selber = selbst.

(19) treiben[駆る]は元来他動詞であるが、丁度英語の drive を、「自動車を」なぞの補足語を省いて単独に用いるように、単独に用いて自動詞とすることがある。茲では vorübertreiben は vorüberfliegen (前を翔け去る)と同じである。

(20) Teilnahme「同情」ではなく「関心」である。Anteilnahme とも云う。an etwas teilnehmen (或事に関与する、興味を持つ)等。主人公はもはや何を見ても、凡てが無関心(gleichgültig, einerlei, interesselos)になり、彼の興を唆らなくなってしまったのである。

(21) mit etwas zu Ende sein, mit etwas fertig sein (或事を終る)

(22) schellen, klingeln は, Schelle, f. Klingel, f. (呼鈴)を鳴らすことである。schallen (響く)に対して schellen (響かす)は他動詞で、e 又は ä の幹母音は、a 又は i に対する自動詞である事が多い。fallen (落ちる) fällen (倒す)----hangen (懸かる) hängen (懸ける) henken (絞首の刑に処する)----haften (附着する) heften (綴じる、附ける) ----sitzen (座る) setzen (置く)----liegen (横たわる) legen (横たえる) ----sinken (沈む) senken (沈める) ----dringen (押し入る) drängen (押し、せき立てる) etc.

(23) 「将来を期して」の意の auf ---- auf einen bestimmten Tag. (一定の日を期して) auf

と四格は、時刻について云う際には、将来に於ける予定を云う。複数の場合は、ある期間の予定になる。**auf zwei Tage** (二日間の予定で)等。単数の場合は、現在の場合のように、ある予定の一点を指す。**auf bald!** (ではまたそのうちに!) **auf morgen!** (ではまた明日にでも) **auf Wiedersehen** (再会を期して! 即ち、さようなら!)等に現れた **auf** (24) **war es** の **es** を省く。

(25) **Anblick** (一瞥)は **Blick** (視線)と厳重に区別すべきである。**anblicken** (見る)は他動詞であり、**blicken** (眼付きをしている)は自動詞であるから、第四卷 414 に挙げた規則が適用される。**der Blick des Mannes** は「男の眼つき」であり、**der Anblick des Mannes** は、「その男を見ること」である。**sein Blick, sein Anblick** にも矢張り同様の区別が存する。丁度好い例だから 414 を復習したわけである。

(26) **erschrecken** は「愕ろく」の意の際は三要形は **erschrecken, erschrak, erschrocken** であるが、此の場合の様に、「愕ろかす」の際は規則変化である。

(27) 此の場合の **entschlossen** は、**entschließen** の過去分詞であるが、それが形容詞化したものである。動詞を用いて云えば **denn er hatte sich entschlossen**。

(28) **sich** (三格) **das Leben nehmen**. (自分から自分の命を取る、自殺する)---- 此の **sich** (三格)は所謂離格で、そのために「.....から」という訳になる。(第四卷 419)

32.

Am Abend nun(1) vor dem vermeintlichen(2) Fest sandte er seine ganze Dienerschaft(3) aus dem Hause, daß(4) es still in den großen Räumen wurde,(4) und begab(5) sich in sein Schlafzimmer, mischte ein starkes Gift in ein Glas Zyperwein(6) und setzte es an die Lippen. Als er eben trinken wollte, wurde(7) an seine Türe gepocht, und da er nicht Antwort gab, ging die Tür auf, und es(8) trat ein kleiner alter Mann herein. Der ging auf Augustus zu,(9) nahm ihm(11) sorglich(10) das volle Glas aus den Händen(11) und sagte mit einer wohlbekannten Stimme: "Guten Abend, Augustus, wie geht es dir?"

Der Überraschte,(12) ärgerlich(13) und auch beschämt, lächelte voll Spott und sagte: "Herr Binßwanger, leben Sie auch noch? Es ist lange her,(14) und Sie scheinen wahrhaftig nicht älter(15) geworden zu sein. Aber im Augenblick stören Sie hier, lieber Mann, ich bin müde und will eben einen Schlaftrunk(16) nehmen."

"Das sehe(17) ich," antwortete der Pate ruhig. "Du willst einen Schlaftrunk nehmen, und du hast recht,(18) es ist dies der letzte Wein, der dir noch helfen(19) kann. Zuvor aber wollen wir einen Augenblick plaudern, mein Junge, und da ich einen weiten Weg hinter(20) mir habe, wirst du nicht böse sein,(21) wenn ich mich mit einem kleinen Schluck(22) erfrische." (23)

(1) **nun** (さて)は所謂並立的接続詞で、先頭に置く筈だが、斯う云う風に後の方へ持って来る方が口調の好い事がある。(第四卷 306)

(2) **vermeintlich** (称する所の、実はそうでない所の) **angeblich, vorgeblich** とも云う。

(3) **-schaft, f.** の語尾に終るものは、**Sammelnamen** (集合名詞)の一種で、名詞の複数の代りである。

(4) **daß.....wurde.----** **wurde** が若し **werde** (第一式接続法)であつたら **daß** 以下の文は、「.....するように」という目的を指す意味になる所だが、**wurde** が直説法過去であるから、**daß** 以下の意は所謂「後続的」(第四卷 300)になって、「そのために.....云々になった」と、後で訳する方が好いのである。

(5) **sich begeben**. (赴く)仏語の **se rendre**. 所謂 **rendez-vous** [ランデヴー]は独訳すると **Begeben Sie sich** (何処其処へ赴け)である。(独逸語では **Stelldichein** という。**sich einstellen** 出頭する、顔を出す、から来た複合名詞)

(6) **Zypern** は所謂サイプラス島で、匈牙利[ハンガリー]の **Tokay** と並んで葡萄酒の名産地とされている。

(7) **wurde es** の **es** が省かれている。(第三卷 277)此の非人称語法については第二卷 117. 117. 第三卷 276 を見よ。

(8) 非人称語法に於ける文法上の主語(第三卷 273)

(9) こう云う **zu** は、**gehen** の分離前綴と考える事も出来れば(第二卷 139)前置詞 **auf** の

追加詞(第三巻 240)と考える事も出来る。

(10) sorglich は一寸 zweideutig (曖昧)な字で、sorgenvoll (心配げに)の意もあれば sorgfältig (細心の注意を払いつつ、そーっと)の意もある。茲は後者の意に取った方が自然である。

(11) ihm aus den Händen は aus seinen Händen というに同じ。(第四巻 416)

(12) überraschen は英語の surprise.で「愕ろかす」という意も同時に含まれているが、とにかく「不意を襲う」ことが主である。それから der Überraschte (吃驚 [びっくり] した彼は)という形に就ては第四巻 427 を見よ。

(13) ärgerlich und beschämt は、第四巻 371 に説明した客語的副詞句です。あの項で分詞に就て述べた事は凡て形容詞にも通用します。

(14) es ist lange her (随分しばらくでしたね)は熟語。

(15) älter [比較級]は勿論 als damals (あの当時に比べて)である。

(16) Schlaftrunk は両意に取れるが、茲では催眠剤の方ではなく、単に寝がけの一杯という意である。

(17) das sehe ich. (それは私が現在拝見している、なるほどそうらしい)教父はちゃんと主人公の企らみを知っていて斯う云うので、つまり皮肉である。

(18) recht haben. (英語の to be right)道理である、もつともである。---- 此の言葉でわかるが、教父は der Schlaftrunk の意味を、ちゃんと事実通りに解釈して、自殺しようとしていると云う事を相手の方で自から認めた事にしてしまっている。

(19) helfen と云うのは、retten (救助する)とは少し違っている。命など助けるのは retten であるが、或人の「為めを」計らうのは helfen である。従って、今若し本当に死にたい人がいて、其の人が自殺しようとしているのを誰かが止めてやったとすれば、Ich bin zwar gerettet, aber es ist mir dadurch nicht geholfen worden. (私はなるほど助けられはしたが、別にそのために身の為めが計られたというのではなかった)と云うだろう。此処の helfen はそれである。

(20) ある道程を旅行することを einen Weg, eine Strecke hinter sich zurücklegen と云う。従って或る距離を旅行して来た、は einen Weg hinter sich haben (或る道を己が背後に持つ)である。

(21) wirst du es nicht übel [auf-] nehmen; wirst du es mir nicht verübeln (悪くは取るまいね)または wirst du es mir gern gestatten (欣んで許してくれるだろうね)と云っても好い。此の際の böse は「怒っている」という形容詞。

(22) Schluck, m. これは飲み下すという schlucken から来た名詞。「一口」の意。但しそれは飲物に限る。食べ物ならば ein Bissen と云う。

(23) 独逸人が erfrischen, laben (気持を清涼ならしめる)というのは主として飲み物の事である。だから清涼剤の事を Erfrischungen または少し詩的に云うと Labsale という。sich erfrischen といえば大抵お酒を飲む事である。

33.

Damit(1) nahm er das Glas und setzte es an den Mund, und ehe(2) Augustus ihn zurückhalten konnte, hob(3) er es hoch(4) und trank es in einem raschen(5) Zuge(6) aus. Augustus war todesbleich(7) geworden. Er stürzte auf den Paten los,(8) schüttelte ihn an(9) den Schultern und schrie gellend:(10) "Alter Mann, weißt du, was du da(11) getrunken hast?"

Herr Binßwanger nickte mit dem klugen grauen Kopf und lächelte. "Es ist Zyperwein, wie ich sehe, und er ist nicht schlecht. Mangel(12) scheinst du nicht zu leiden. Aber ich habe wenig(13) Zeit und will dich nicht lange belästigen,(14) wenn du mich anhören(15) magst." (16) Der verstörte(17) Mensch sah dem Paten(18) mit Entsetzen in die hellen(19) Augen und erwartete von Augenblick zu Augenblick,(20) ihn niedersinken zu sehen.

Der Pate setzte sich indessen(21) mit Behagen(22) auf einen Stuhl und nickte seinem jungen Freunde gütig zu.(23)

"Hast du Sorge, der Schluck Wein(24) könnte mir schaden? Da(25) sei nur(26) ruhig! Es ist freundlich von(27) dir, daß du Sorge um(28) mich hast, ich hätte(29) es gar nicht vermutet. Aber jetzt laß(30) uns einmal reden wie in der alten Zeit! Mir scheint,(31) du hast

das leichte Leben satt bekommen?(32) Das kann ich verstehen, und wenn ich weggehe, kannst du ja dein Glas wieder vollmachen und austrinken. Aber vorher muß ich dir etwas erzählen."

- (1) damit = mit diesen Worten ; 斯く云って。
- (2) ehe = bevor (第四卷 298)
- (3) heben, hob [又は hub], gehoben (揚げる)
- (4) hoch [発音ホーホ、ホホに非ず]
- (5) rasch = schnell, geschwind (速き)、hastig, eilig (大急ぎの)
- (6) ein Zug (一息)は ziehen (引く)から来た名詞。文字通りに云えば「一引き」である。
- (7) bleich wie der Tod (死の如く真青に)= totenbleich (死人の如く真青に)とも云う。
- (8) 此の los も、losstürzen (飛びかかる)の前綴と見てもよし、auf.....los (或ものをめがけて)と云う語法の、前置詞を後曳する追加詞と見ても好い。
- (9) 或人の肩を揺ぶる、と云わないで、或人を肩の所で揺ぶる、と云う。そういう時の前置詞(局部を指す)が an である。
- (10) gellen は、耳が聾せんばかりの、鋭い声について云う。grell と云う形容詞もある。(eine grelle Stimme 痛高い声、絹を裂くような声) schrill, a. も同意。
- (11) 此の da も、「現在」の色彩を強調する副詞である。
- (12) 「困っている」事を Mangel leiden (欠乏をなやむ)という、不自由な生活をする事。
---- ドイツ人は概して斯ういう Litotes (弱化語法)を好む。それによって文句がみんな多少の Humor を帯びて来るから面白い。Litotes については第三卷 247.
- (13) wenig は「大して.....しない」と云う準否定詞(第四卷 397)であるから、此处は ich habe nicht viel Zeit または露骨に ich habe keine Zeit と云うのと大体同じ意味である。
- (14) belästigen は Last, f. (荷)から来たもの。stören (邪魔する、厄介をかける)と同じである。
- (15) einen anhören (或人の云う事を聴く) einen zuhören (或人に傾聴する) auf einen hören (或人の言を耳にとめる、或人の言に従う)はそれぞれ色彩がちがっている。
- (16) 此处の mögen の意味に就ては第三卷 247 の(4)を見よ。(wollen と同意)
- (17) 驚愕恐怖等のために顔相が物凄くなっている事を verstört という。
- (18) 此处は、日本語でならば in die hellen Augen des Paten (教父の眼をじっと)と云う所であるが、第四卷 416 に述べた語法に従って、dem Paten と三格になって前に離して置かれているのである。
- (19) 贅語[Pleonasmus]----hell (明らかな)は、初学の人には一寸理解し難いかも知れないが、此处では決して「淡色の眼」とか「明るい眼」とか云う意味なのではなくて、Pleonasmus (贅語)なのである。贅語と云っても決して全然無意義なのではなく、謂わば Augen を「まざまざと」想像せしめんが為めの強調的贅語なのである。換言すれば mitten in die Augen (眼の真唯中へ)と云うに等しい。斯う云う種類の贅語を veranschaulichungspleonasmus (具体的想像を助成する贅語)と云う事が出来る。hell の外になお leicht (明るい) schön (美しい) leibhaftig (具体的)等、諸種の形容詞を以て之に充てる事が出来る。

1. Er hat sich hundert harte Taler geben lassen.
彼は百枚の固いターレル銀を受け取った。(夢屋影には非ずの意。)
2. Ich habe einmal mit einem wirklichen kalten Schwert gefochten.
私は曾て本物の冷たい剣で勝負をしたことがある。
3. Er hat sogar einige Schritte von der hellen lichten Polizeibude gestohlen.
あいつと来た口には、現にまざまざと交番の立っている所から二足三足の所で泥坊をしやがった。
4. Es hat durchgeregnet und das helle Wasser steht mitten auf dem Zimmer.
雨洩りがして、部屋の真中に無遠慮に水がたまっている。
5. Der, den ich tot geglaubt hatte, stand leibhaftig vor mir.
死んだかと思っていた男がだしぬけにぬっと私の前に立っていた。
6. In ihren Augen standen helle Tränen.
彼女の眼にはあきらかに涙がたまっていた。

上例でわかる通り、hell なぞは必ずしも好い日本語にはならない。直訳しようとするとしても副詞か何かで間に合わせなければならなくなる。上例はまあ成る可く判り易い例を並べたのであるが。

(20) von Augenblick zu Augenblick (瞬間から瞬間へ、即ち、今か今かと)「彼は何時なんどき来ないとも限らない」と云った様な際には Er kam jeden Augenblick da sein と云う。その jeden Augenblick と同じようなものであるが、用い所が一寸違う。下の場合に上の句を使っても好いが nicht umgekehrt (その反対は不可。)

(21) indessen または indes, währenddessen. (そうしている間に、さるほどに)

(22) mit Behagen = behaglich, gemütlich, ruhig, gelassen. (好い気持で、打ち寛ろいで、悠々と)

(23) einem zunicken (或人に向って點頭[うなずく]く)というのは、「よしよし、好いよ好いよ」という親愛の意を表わす表情(Gebärde)である。日本人は斯う云う事はしないが。

(24) ein Schluck Wein (葡萄酒の一口) eine Tasse Kaffee (一杯の珈琲) eine Prise Tabak (一服の煙草) ein Glas Bier (コップに一杯の麦酒)等は時には定冠詞で云う事がある。すると、「只今の一杯」とか、「例の一杯」等の意になる。ein paar Fehler (二三の誤り)が die paar Fehler になると、(それっ位な誤り、少々の誤りぐらいで)等の意になるのと同じである。

(25) 此の da は、「其の儀ならば」「その点に関しては」「其処は」という用法で或る。Da sei mir Gott vor! (其の儀ならば御免を蒙る) Da erkennst du meinen Vater! (そりゃあ我輩の親父を大いに見違ええいるよ) Da wäre ich von ganz anderer Meinung! (其処へ来ると我輩の意見は大いに違う) Da kannst du dich auf mich verlassen! (其の点なら我輩が引き請けた)

(26) ゆとりのある命令には nur (まあ)を用い、切望的な命令には doch (是非)を用いる。その中間にはなお俗語の mal または方言の man というのがある。Gehen wir mal spazieren! (一寸散歩に行こうよ)

(27) freundlich von.....というのは一種の熟語で、Du bist freundlich という代りに es ist freundlich von dir,---- Er ist freundlich という代りに es ist freundlich von ihm というだけの話である。云いかえると、Du warst so liebenswürdig, Sorge um mich zu haben. (おまえさんは親切にも私の身を気づかって呉れた)である。

(28) um は Sorge (心配)の要求する前置詞であるが、一たい或物が関心の対象になる時には um を用いるのが例である。um jemandes willen (或人のために)の um もそうだし、sich um etwas [be-] kümmern (或事を気にかける)の um もそうである。

(29) 斯う云う hätte に関しては既に註で述べて置いた。

(30) laß uns reden は reden wir! と同じである。(第四巻 364)

(31) es scheint mir [非人称句]の es は、倒置の場合には省く事がある。(第三巻 277)

(32) etwas satt bekommen. [熟語]或物にうんざりする。換言すれば des leichten Lebens satt geworden.

34.

Augustus lehnte sich an die Wand und horchte auf(1) die gute, wohlige(2) Stimme des uralten(3) Männleins, die ihm von Kinderzeiten her(4) vertraut war und die Schatten der Vergangenheit in seiner Seele wachrief. Eine tiefe Scham und Trauer ergriff ihn, als sähe er seiner eigenen unschuldigen Kindheit in die Augen.(5)

"Dein Gift habe ich ausgetrunken," fuhr der Alte(6) fort, "weil ich es(7) bin, der(7) an(8) deinem Elend schuldig ist. Deine Mutter hat bei deiner Taufe einen Wunsch für dich getan, und ich habe ihr den Wunsch erfüllt, obwohl er(9) töricht war. Du brauchst ihn nicht zu kennen, er ist ein Fluch geworden, wie du ja selber gespürt hast. Es tut mir leid,(10) daß es so gegangen(11) ist, und es möchte(12) mich wohl freuen, wenn ich es noch erlebte, daß du einmal wieder bei mir daheim(13) vor dem Kamin sitztest und die Englein singen hörst. Das ist nicht leicht, und im Augenblick(14) scheint es dir vielleicht unmöglich, daß dein Herz je (15) wieder gesund und rein und heiter werden könne. Es ist aber möglich, und ich möchte (16) dich bitten, es zu versuchen. Der Wunsch deiner armen(17) Mutter ist dir schlecht bekommen,(18) Augustus. Wie(19) wäre es nun, wenn du mir erlaubtest, auch dir noch einen Wunsch zu erfüllen, irgendeinen?(20) Du wirst ja wohl(21) nicht Geld und Gut

begehren, und auch nicht Macht und Frauenliebe, davon (22) du genug hast. Besinne dich, und wenn du meinst, einen Zauber zu (23) wissen, der dein verdorbenes (24) Leben wieder schöner und besser und dich wieder einmal froh machen könnte, dann wünsche ihn (25) dir!"

(1) horchen (傾聴する) hören (聴く) aufmerksam sein (注意する) richten (向ける)等、ある方向に集中する動作を表わす動詞には、その対象に auf を附するのが常である。その際の auf は「何々の方に向って」の意になる。(方向を現わすから従って四格支配である。第三巻 236)

(2) wohlig, a. 好い気持の(柔らかな好い気持のことをいう)

(3) ur-alt, a. 元来は「往古の」の意であるが、此处では単に greisig (非常に年老いた)の意。teinalt と云う。

(4) her は von の後曳する追加詞である。(第三巻 240)

(5) einem in die Augen sehen (或人の眼をじっと瞞[みつ?]める)----此处では Kindheit (幼年時代)を人間のように考えて、それを正視することを云うのである。

(6) 第二巻 189, 190.

(7) es は der の先行詞である。(詳細は第三巻 279)

(8) an は次の schuldig の支配する前置詞。an etwas schuldig sein (何々に責任がある。)

(9) er は前の Wunsch を受ける。Wunsch が男性故 er である。次の文の ihn, er も同様。これが性というもののあるドイツ語の特長で、その単語が男女中のいずれであるかに従って er, sie, es を用いるのである。

(10) es tut mit leid (気の毒だ)は非人称の熟語。

(11) daß es so gekommen ist と云っても好い。es geht, es kommt は共に「.....な廻り合せになる」という非人称熟語である。(第三巻 271)

(12) 此の möchte は würde (.....であろう)と同意。

(13) daheim は da と heim (英語の home)との結合形。in deiner Heimat の意。

(14) in diesem Augenblick, augenblicklich (目下では)

(15) je = einst, eines Tages (何時か、そのうちに、一度)

(16) 此の möchte は普通の möchte で、第三巻 218 に説明がある。

(17) arm [英語の poor]に関する知識----arm, a. には意味が二つある。「貧乏な」と「可哀相な」とである。(つまり英語の poor)ところがその他に微妙な第三の用い方がある。それは、親愛の意を現わす arm である。単に「親愛なる」と云う意味を云おうとする時に、その誠意を或種の同情の如きものにまで誇張して armer Vater ! armer Freund !と云うので、その気持がわからずに「可哀相なお父さん！」なんて訳するから、どうも少し変になって来て、そう云う翻訳小説を読む読者が、「西洋人という奴は変なところで同情するもんだ」という感じを抱く。また「可哀相なお父さん」なぞと面と向って云われたお父さんそのものが、不思議がりもせず、怒りもせず、元来ならば「可哀相だ？何が可哀相だ！」とでも反問しそうな所を、当然の事のようにして聞いている。要するに西洋人というのは変なものだと言う感じを与えてしまう。---- これは決して arm 一字の問題ではないが、arm に於て殊に甚だしいと云って好い。翻訳者の内で arm に対する実感を以て訳している人が果して何人いるだろう？実に心細い次第である。---- 今問題になっている此の個所では、arm にはなお多少憐憫の意も含めてあるとも云えよう。けれどもたとえば次のような場合にはどうだろう。たとえば自分の娘が歌なぞ歌って大勢の前で喝采される。列席している父親が、これも大いに得意になってしまつて、自分の娘を改めて見直おしたような気持になり、その嬉しさに堪えずして思わず口にする文句が meine arme, arme Tochter ! である。これをしも「おゝ私の可哀相な可哀相な娘よ！」と訳す可きであろうか？私にはどうしても娘の可哀相な訳がのみ込めない。---- これはドイツ語ばかりの問題ではなく、英語でも仏語でも、その他の大抵の西洋語には共通の現象である。仏語は殊に甚だしくて、mon pauvre petit père ! (私の可哀相な小さなお父さん)とまで云う。可哀相も小さいも決して文字通りの意ではない、みんな単に親しく馴れ馴れしい感じを出すための贅語である。そんなものを文字通りに訳すると滑稽になってしまう。滑稽な個所ではよからうが、滑稽でも何でもない所で直訳するのは、それこそ滑稽である。(参考のために、こういう語法に興味を持たれる人は、Molière 作 Le Tartuffe の第一幕の、Orgon なる人物が何遍も繰り返す le pauvre homme ! [der arme Mann !]という

名高い文句に注目せられたい。好個の例である。)

(18) schlecht bekommen (身の不為になる) wohl bekommen (身の為になる)は熟語。bekommen は、他動詞として用いる場合は erhalten (手に入れる)の意になるが、助動詞 sein と共に完了形を作る自動詞として用いる際は英語の become とまず同じ様な意味と思えば好い。

(19) wie wäre es nun, wenn.....(「云々して見てはいかが？」と勧める意味の文句)は、所謂約束法的語法であるから第二式接続法が二つ用いてある。(wäre と erlaubtest)約束法については第三巻 212, 213, 214 を見よ。----簡単な云い方に wie wenn (又は wie, wenn) というのがある。wie, wenn du gingest? おまえ行っってはどうかろう？

(20) irgendeinen 又は irgend einen Wunsch ----此の irgend に関しては第二巻 184.

(21) ja wohl nicht = doch nicht, (まさか)gewiß nicht, sicherlich nicht, natürlich nicht (勿論.....はしまい)

(22) 此の davon は、代名詞ではなく関係代名詞である。即ち wovon と同じである。(第二巻 175)----此の von だけに関していうと、これは genug の支配する前置詞である。即ち「そんな書物は充分読んだ」は Von diesen Büchern habe ich schon genug gelesen.----それから原文の von etwas genug haben (.....には慊[あ]きた、もう沢山だ)は熟語である。

(23) zu を伴う不定法の文章は往々にして daß.....の文と同じ意になる事がある。此処がその例で、wenn du meinst (glaubst でもよい), daß du einen Zauber weißt.

(24) verderben, verdarb, verdorben (英語の spoil)これは必ずしも墮落した事を指すのではなくて、駄目になった、の意に用いられる事がある。むしろそれが第一義である。たとえば einem den Spaß verderben (或人の楽しみをぶっこわす)等。

(25) ihn (男性)は Zauber を受ける。

35.

In tiefen Gedanken(1) saß Augustus und schwieg, er war aber zu müde und hoffnungslos, und so sagte er nach einer Weile: "Ich danke dir, Pate Binßwanger, aber ich glaube, mein Leben läßt(2) sich mit keinem Kamm wieder glattstreichen.(3) Es ist besser, ich tue(4), was ich zu tun gedachte,(5) als du hereinkamst. Aber ich danke dir doch,(6) daß du gekommen bist."

"Ja," sagte der Alte bedächtig,(7) "ich kann mir denken,(8) daß es dir nicht leicht fällt.(9) Aber vielleicht kannst du dich noch einmal besinnen, Augustus, vielleicht fällt dir das ein,(10) was dir bis jetzt am(11) meisten gefehlt hat, oder vielleicht kannst du dich an(12) die früheren(17) Zeiten erinnern, wo(13) die Mutter noch lebte, und wo du manchmal am Abend zu mir gekommen bist.(14) Da(15) bist du doch zuweilen glücklich gewesen, nicht?"(16)

"Ja, damals," nickte(18) Augustus, und das Bild(19) seiner strahlenden(20) Lebensfrühe(21) sah ihm(22) fern und bleich(23) wie aus einem uralten Spiegel entgegen. "Aber das kann nicht wiederkommen. Ich kann nicht wünschen, wieder ein Kind zu sein. Ach, da finge(24) doch(25) alles wieder von vorne(26) an!"(27)

(1) 或種の抽象名詞の複数にはよく注意する必要がある。というのはたとえば der Gedanke (考え、思いつき) die Gedanken (物思い = Grübeleien) die Zeit (時、時間=空間の反対、または暇の意) Die Zeiten (時代) das Mittel (方法) Dei Mittel (資本=Kapital) die Kraft (力) Die Kräfte (力量、体力、精力、意志の力、精根) Gott (キリスト教の神----冠詞なし) die Götter (神々----主としてギリシャの)

(2) läßt sich に就ては第三巻 251 の 3 を見よ。

(3) 譬喩話法 (die Metapher)---- etwas glattstreichen (或物を撫でて glatt 滑らかにする)の glatt なる形容詞は、所謂結果的客語である。(第四巻 423)----此処に用いてある修辞(rhetorische Figur)を etapher (譬喩話法)という。「阿呆につける薬はない」とか、「其処は上手に舵を取らねばいかん」とか「あいつには全く兜をぬいだ」とか云う日本語も、それぞれ病氣、船、試合等にかこつけた Metapher である。此処では mein Leben を宛[あ]たか]も乱れた髪の毛のように見立てたので、大変面白い言い方である。

(4) ich tue 以下は、主文章の形にはなっているが、daß ich tue の意で、本当は前の es ist besser を主文章としているのである。たとえば Du weißt, ich bin sehr vergeßlich (御存じ

でもあろうが私は大變物を忘れる性分で) Ich denke, ich muß es tun. (思うに、それをしない訳には行くまい)等と同じ関係にある。

(5) gedenken (.....するつもりである)は一種の助動詞の如きもので、第三卷 253 にあげた助動詞的動詞に属する字である。

(6) doch (やはり、いずれにせよ、それはそうとして、それにも拘らず。)

(7) bedächtig = mit Bedacht (深く慮[おもんばか]りつつ)日本語の所謂「じっくりと」である。

(8) sich [三格] denken = sich [三格] vorstellen 想像する、想像がつく。所謂三格の再帰代名詞を支配する再帰動詞(第二卷 155)であって、単なる denken とは区別すべきである。

(9) leicht fallen, leicht werden = leicht sein, schwer fallen, schwer werden = schwer sein. は各々熟語。fallen, werden 等の意味をあまり文字通りに考えると分らなくなる。

(10) einfallen (思い浮ぶ)、故に Einfall (落想、着想)という名詞もある。

(11) am meisten の am には別に意味はない。副詞の最高級である。(第三卷 227) am---sten の形については第三卷 226.

(12) sich [四格] eines Dinges erinnern 又は sich an etwas [四格] erinnern. (或事を思い出す)

(13) wo は Zeiten を先行詞とする関係代名詞的なもの。(即ち in welchen の代り)一寸断わって置くが、wo の如きものを何が故に関係代名詞と呼ぶかというに、接続詞と区別するために、先行詞を有するものを関係代名詞と呼び、先行詞なくして単に文と文とを結びつけるものを接続詞と呼ぶのが合理的である。先行詞は勿論名詞かそれとも代名詞でなければならぬ。wo については第二卷 174. 先行詞の概念については第二卷 162.

(14) 談話体では、現在完了を以て過去に代える事がある----会話体に於ては、過去を用いる可き筈のところに現在完了を用いるのが常である。その儘を文語体で真似しては勿論いけない。此処の個所なぞも、教父の打ちとけた話だからみんな現在完了で述べられているが、もしこれを、教父の口を借りないで著者自から叙述するとすれば gekommen bist は kamst, bist gewesen は warst と改めなければならないのである。----たとえば、悪童日記と云ったような自叙伝の談話の調子 (Gesprächston) で書かれたものは、元来半過去でなければならぬ筈の所がみんな現在完了で書かれる。所謂半過去になると、いやに改まった客観的な叙述になってしまうからである。

(15) da は damals (あの時は、当時は)

(16) nicht ?または nicht wahr ? 俗語では gelt ? ja ? 等も用いられる。(第四卷 376)

(17) früher (以前の) später (今後の)は各々 früh (早き) spät (晩き) に対する比較級であるが、その比較級に特殊な意味が生じたもので、実は殆んどその比較級である事を意識せず、一つの特別な単語として用いている。所謂絶対比較級 (第三卷 223)

(18) 斯ういう挿入句に倒置法を用いる事は第二卷 133 に於て述べたが、「.....と彼は云った」の代りに、即ち sagen の代りに色んなものが用いられる。fuhr er fort, (と話を続けた) entgegnete er, erwiderte er, antwortete er (と答えた) versetzte er (と遣り返した) nickte er (と點頭いた)なぞは普通の部類であるが、lenkte er ein (と話題を外した) brauste er auf (といきり立った) rettete er sich (と巧みに逃げた) seufzte er auf (と吐息をついた)なぞと、其の言葉と同時に行為される動作や、第三者の下馬評を以て「云った」に代えることが珍らしくない。

(19) Bild というのは、何でもよろしい、肉眼または心眼の前に現われたところの現象を指すので、ドイツ人の最も好む詞の一つである。光景、有様、図、体たらく、場面、おもかげ、状景、片影、心像、想像、面目、等、その場合によって色々に訳される。こう云う字の応用法を会得すれば、それが直ちに以てドイツの心理学、美学、哲学等の重要な問題に乗り込む手引きとなるのであるから、特にその用法に注意せねばならぬ。

(20) strahlend は heiter (朗らかな)または「麗らかな」事を指すのであって、同じ「輝く」という字でも glänzend (赫々[かくかく]たる)とは根本的に違う。

(21) die Frühe は früh (早い)から来た名詞で、早朝の事である。(-e の語尾については第二卷 191) 人生を一日に譬えて、Kindheit (幼時)を人生の早朝と云ったのである。

(22) ihm は entgegen sehen (或人の方を迎えて見る)が三格を支配するからである。

(23) bleich は必ずしも青ざめたと云う意ではなく、色褪せて、朦朧としていること。

(24) **finge an** は **anfangen** (始まる) の第二式接続法を約束法に用いたもの。即ち **da** という一字が **wenn ich wünschte, wieder ein Kind zu sein** (もし私が再び小供になることを望むとすれば) という前提文の代りになっているのである。finge と云う形は **fangen, fing, gefangen** の **fing** から来ている。(第三巻 205)

(25) **doch** は間投形の文を強めるために用いられる。「それこそ」とでも訳するか。

(26) **von vorne** (始めから) また元に戻ってやり直しになる時にのみ使われる。同意の **da capo** (始めより繰り返す) という伊太利語は音楽の術語として名高い。**da** は **von** (から) **capo** はドイツ語の **Kopf** (頭) である。

(27) ドイツ哲学の一常識----また小供になり帰るということは望まれない、そんな事をすればまたやり直しになる！此処には深い意味が含まれている。**Entwicklung** (進化) **dialektische Bewegung** (弁証論的な動き) に関する重要な反省が窺われる。主人公の一生はたしかに失敗ではあった。「万人に愛されるように」という願の成就是たしかに彼の一生を不幸に陥入れた。けれどもそれを否定して進歩の過程を逆行しようとするのは愚である。主人公が此の次を取る可き方向は、今までの方向の全然的否定であってはならぬ。今までの方向を取り入れ、今までの方向が何等かの意味に於て生きて来るような種類の方向でなくてはならぬ。それが時間的发展、即ち歴史の真義である。第一のものに帰るのではなくて第三のものに進むのだ、それがたとえ第一のものに帰るが如き外観を呈するにしても！----歴史に反復なし、進化あるのみ。自己の進む路を選ぶ時にはよろしく此の精神を体す可きである。(一案を立てた後に、他の案へ他の案へと考えが進み、結局また廻り廻って最初の第一案に帰ると云った様な場合などもそれで、それは決して謂う所の「復帰」ではない。第一案そのものが一段上へ登っているのである。人がそれを意識するとせざるとに拘らず。)

36.

"Nein, (1) **das hätte** (2) **keinen** (3) **Sinn, da** (4) **hast du recht. Aber denke noch einmal an die Zeit bei uns daheim** (5) **und an das arme Mädchen, das du als Student bei Nacht** (6) **in ihres Vaters Garten besucht hast, und denke auch an** (7) **die schöne blonde Frau, mit der du einmal auf dem Meerschiff gefahren bist, und denke an alle Augenblicke, wo du einmal glücklich gewesen bist und wo das Leben dir gut** (8) **und wertvoll schien. Vielleicht kannst du das** (9) **erkennen, (10) was** (9) **dich damals glücklich gemacht hat, und kannst dir das wünschen. Tu** (11) **es mir zuliebe, (12) mein Junge!**"

(1) **Nein** は、自分がこれから云おうとする文句が否定文である時に前に置かれる事がある。決して相手の言に反対を打ったのではない。(第四巻 377 ja と nein の使い分けの項を見よ。)

(2) **hätte** [約束法] これも前の **finge an** と同じ意味に於ける約束法である。

(3) **keinen Sinn haben** (何の意義も持たない) 即ち **Unsinn** (英語の **nonsense**) である。**Das hätte keinen Zweck** (無駄だ) **Das wäre eine verlorene Mühe** (草臥れ損だ) と云っても好いところ。

(4) 此の **da** も一寸前に述べた **da**。(註 33 の[25]を見よ) **darin hast du recht, damit hasu du recht** と云える。

(5) **an die Zeit bei uns daheim** は続いた一句である。即ち **daheim** に於ける **bei uns** の **Zeit** と考えればよい。

(6) **bei Nacht** (夜間) は熟語である。それは第一 **Nacht** に冠詞がないのでもわかる。(第三巻 244) 昼間は **bei Tag**。

(7) **an etwas denken**. 或物の方に注意を向けて考えることである。だから **Andacht** (黙禱) という字が出来ている。精神を統一し、邪念を去って、専ら神に念を向ける、即ち **an Gott denken** する、それが **Andacht** である。口で文句を唱える **Gebet** (お祈り) とはちがうわけである。

(8) **gut und wertvoll** は二語一想である。**gut** というのは、所謂積極的な「善い」「好い」ではないが、「悪くはない」即ち「用いるに足る」「取り柄がある」「まんざら貶すしたものでもない」と云う時に使われる。**Mein Schwert ist gut**. (某儀の一刀もまんざら鈍刀ではござらぬ、----とでも云った所) **die Ware ist gut** (此の品は確実だ)----つまり **gut und**

wertvoll は、捨てたものではないの意。wo dir das Leben lebenswert schien. (人生が生き甲斐ありと思われた時代)と云っても好い。

(9) das は was の先行詞。dasjenige.....was でもよい。(第二巻 168 を見よ)----此の das は、別に何を指すという事なしに、極く抽象的に言ったものである。例----Das Wesen ist das, wodurch ein Ding das ist, was es ist. 本質とは、或る物が依って以てそれが現在さある所の其の物であり得る所の物である。----斯うなると日本語が如何に不便な国語であるかが露骨にわかる。

(10) Lineare Aktion [線動] と Punktuelle Aktion [点動] ----kennen は「知っている」と云う状態動詞、erkennen は「さとり、認識する」という動作動詞。こういう区別を学者は Aktionsart (動作様式)の相違と呼んでいる。erkennen は、一瞬間、一点の動作を指すが故に punktuelle Aktion (点動)を指すと謂われ kennen は時間のある長さを占めるから lineare Aktion (線動)を指すと云われている。lineare Aktion を持っている動詞 (schlafen, stehen, schreiten) と、punktuelle Aktion を持つ動詞 (fallen, einschlafen, sterben, ankommen) との区別は非常に重要である。その他 Aktionsart に関する区別は、文法の最も重要な部分であって、こういう点に注目するとしないことで語学の精確さに非常な差異を生ずるものである。たとえばギリシャ語を習おうという野心のある人は、此の Aktionsart の区別に注目しないと、ギリシャ語の動詞の変化した諸種の形は絶対にわからないであろう。

(11) Tun (なす)の命令法。tue または e を略して tu. (第四巻 362)

(12) mir zuliebe = mir zu Liebe. zuliebe は「或人に免じて」「或人に対する好意から」「或人を欣ばせるために」と云う三格支配の前置詞である。

37.

Augustus schloß die Augen und sah über(1) sein Leben zurück, wie man aus einem dunklen Gange nach jenem fernen Lichtpunkt(2) sieht, von dem man hergekommen ist, und er sah wieder, wie es(3) einst(4) hell und schön um ihn(5) gewesen und dann langsam(6) dunkler und dunkler geworden war, bis(7) er ganz im Finstern(8) stand und nichts ihn mehr(9) erfreuen konnte. Und je(10) mehr er nachdachte(11) und sich erinnerte, desto schöner und liebenswerter(12) und begehrenswerter blickte der ferne Lichtschein herüber,(13) und schließlich erkannte(14) er ihn, und Tränen stürzten aus seinen Augen.

"Ich will es versuchen,"(15) sagte er zu seinem Paten. "Nimm(16) den alten Zauber von mir, der mir nicht geholfen(17) hat, und gib(18) mir dafür,(19) daß ich die Menschen liebhaben kann!"(20)

(1) über と四格は、ある物の表面を渡って此方から彼方へ、または彼方からこちらへである。日本語では「海を」見渡すと云ったように、単に「を」で云い表わすより仕方がない。(第三巻 236 über の部を見よ。)

(2) nach jenem fernen lichten Punkt と、licht, a. (明るい)を使って云っても好い所である。

(3) 此の es については第三巻 270.

(4) einst は、未来の意に用いて「そのうちに何時か」の意味に用いる事もあり、現在の場合の如く「曾て」と過去の意になる事もある。

(5) um ihn her と云う。(四囲、身の意)

(6) langsam = allmählig, nach und nach (追々、徐々に、漸次、段々と)

(7) bis は後続的の意。(第四巻 300)

(8) das Finstre は finster (暗黒な)から作った名詞。= Finsternis, Dunkelheit.

(9) nichts.....mehr (第四巻 394 mehr の用法)

(10) je.....desto (第四巻 307, 308)

(11) nachdenken (熟考する)は、或物を追求して (nach etwas)考える、の意。nachforschen (調査する) nachsetzen (追う) nachjagen (追いかける)等の nach.

(12) wert, würdig はいずれも「.....の価値ある」という二格支配の形容詞である。愛する価値ある、ならば lieben (愛する)を中性名詞 das Lieben (第四巻 282)として、その二格をつけて Liebenswert, Liebens würdig それが一字となって lebenswert, lebenswürdig という字が出来るわけである。lebenswerter はその比較級。

(13) herüber (こちらへの方へ) 反対は (彼方の方へ)

(14) **erkennen** の意味----**erkennen** は、此処では **wiedererkennen** の意に用いられている。故に別に所謂「認識する」の謂ではない。たとえば、昔の友人なぞに途中で遭って、それが友人だとわかるのが **erkennen** または **wiedererkennen** である。「わかる」「思い出す」「内心によみがえる」「心当る」ことである。もっと詳しく定義すれば、昔馴染を識別する事である。たとえば Schiller 作の Wallenstein の中の詩句でよく引用されるのに----

Daran erkenn' ich meine Pappenheimer !

其の言あってこそ我がパッペンハイム連隊の兵士なるぞ。

Pappenheim と云うのは Wallenstein の部下の名誉連隊の隊長であるが、その兵士達を褒めて、「それでこそ我がパッペンハイム連隊所属者がわかる」と云ったのである。また他の例を云うと、奥国の詩人 Nepomuk Vogl の Das Erkennen と云う詩が有名である。久しく故郷を去っていた流浪の青年が、ひょっこりと故里の町に帰って来る。昔親友であった税関吏が町の入口に立っているが彼の顔があまり日に焼けているので、遂に彼を **erkennen** しない。次に恋人に遭う。恋人すら変り果てた彼の姿を不審そうに打ち眺めるきりである。最後の腰の曲った彼の母が教会から出て来る。するとどうだ、母は一瞥の下に彼を **erkennen** した。

Wie sehr auch die Sonne sein Antlitz verbrannt,

Das Mutteraug' hat ihn doch gleich erkannt.

彼の面は縦令[たとい]如何に日に焼けて居ようとも、

母の眼は遠[さす]がに一瞥の下に彼が何人たるかを見抜いた。

日本語には此の **erkennen** または **wiedererkennen** に対する正確なる直訳語が無いから、こんなのはよく意味を覚えておく必要がある。敢て長註を附した所以である。----問題の個所なぞも、「そして遂にそれが、ああ、あれだな、と合点が行った」とか、「そして遂にそれが元来自分が元っから知っていた筈のものだった事に気づいた」とか、或いは又「そして遂に、確[はた]と胸に思い当たるところがあった」とか云った様な複雑な事実を、此の **erkennen** と云う動詞の持っている意味を応用して、うまく、簡単に言い現わしたのである。彼には暗闇の中に一道の光明が閃めいた。彼は最初その何なるかを知らなかった。そのうちに段々と、それを見つめているうちに、その瞬間に於ける彼の心理状態は、その光が何者であるかははっきりしないが、とにかくそれが何か斯う故里の如く温い、物悲しく慕わしい何者かである事だけはわかり出したのだ。そのうちに、確と手を打って、そうだ、自分が求めていたのは之れだったのだ、と、あたかも旧知の友に逢ったかの如き欣びを経験した。だから何等の規定もなく、意味深長に此の **erkennen** を用いたのである。----彼が認めたのは勿論幼時の純朴なる幸福である。居ながら神の意に合することである。けれども前に断わったように、それは決して過去への復帰を意味するのではなく、一見過去への復帰の如くにして其の実第三の何者か、(即ち Verklärung 聖化、大悟徹底)への向上である。此処が此の作品の頂点である。戯曲ならば斯ういう個所を Höhepunkt (クライマックス)の一番最後に持って来て、此処から Umkehr der Handlung (急転直下、ねり戻し、翻転)が初まって、これから一息に大詰まで落として行くのである。

(15) 試みよう、というのは、教父が前に、何か望みを云って見ろ、と云ったのに対して云ったのである。ich will es doxh (やはり)versuchen と云えばなおよくわかる。

(16) 主人公は、「万人に愛される」という Zauber に取り憑かれているのだから、先ず以て其の Zauber を取り除くのが正当の手続きである。

(17) helfen[助ける] が retten[救う]と違う事は一度註で詳しく説明して置いた。der mir nicht geholfen hat = der mir nicht wohl bekam. (一向私の身の為めにはならなかった)

(18) geben, daß.....と云うのは一つの熟語のようなものである。「.....することを得せしめる」「.....することを許す」の謂である。たとえば Gott gebe mir, daß ich ihm begegne ! (希くば神我に彼と邂逅することを得せしめ給えかし。)等。

(19) dafür = an dessen Statt (その代りに)

(20) Geben ist glücklicher als nehmen. 与うるは受くるよりも幸なり(聖書)----此処に此の一篇の中心思想が暗示されている。Geben ist glücklicher als nehmen. (与うるは受くるよりも幸なり)という聖書の文句は、Lieben können ist glücklicher als geliebt werden. (愛し能うは愛さるるよりも幸なり)と解釈して見れば益々意味が深刻になる。

Weinend kniete er vor seinem alten Freunde und fühlte schon im Niedersinken, wie die Liebe zu diesem alten Manne in ihm brannte und nach(1) vergessenen Worten und Gebärden(2) rang.(1) Der Pate aber nahm ihn sanft, der kleine Mann,(3) auf seine Arme und trug ihn zum Lager,(4) da legte er ihn nieder und strich ihm(5) die Haare aus der heißen Stirn.

"Es ist gut," flüsterte er ihm leise zu, "es ist gut, mein Kind, es wird alles gut werden." (6)

(1) ringen, rang, gerungen (もがく)----nach etwas ringen は「何物かを求めてもがく」事である。----老人に対する愛が、既に忘れられてしまった言葉と科[しぐさ]とをもとめてもがくと云うのは、彼は既に長い間他人から愛されるばかりで、自分の方から愛した事が無かったから、今愛の気持が急に起っても、その表現様式がみつからないのである。

(2) Gebärde は英語の所謂 *gesture* である。Gebärde は、日本人と西洋人とでは大いに違っている。日本人は失敗すると頭を搔くが、西洋人が *hinter den Ohren kratzen* (耳のうしろを搔く)のは何か「じれったい」困難に面した時である。と云った様に、大変違っている。けれども概して云うと、日本人は Gebärde の貧弱な国民で、西洋人の方が多くの Gebärde を持っている。Wundt が調べて発表している所なぞに依ると、凡そ世界中で一番 Gebärde の発達しているのは Italien の Neapel [Napoli]で、ナポリ人は一口も口を利かないでも、単に Gebärden だけで色々な会話が出来る位だそうである。一たいに西洋でも南欧の人種ほど Gebärdenspiel が激しい。

(3) (第四巻 427 を見よ)此の *der kleine Mann* の一句は一体どう云う風にして文章全体の一部分を成しているのだろうか？文法的には一たい全体の文章とどんな関係に立っているのだろうか？----これは所謂 *eingeschaltetes Prädikat* (挿入された客語)なるもので、謂わば主語の繰り返しである。大抵の場合は、代名詞を以て繰り返しつつ、同様に関係代名詞の文がその次に続くのが例である。或種の奇異な対照を試みる時に専ら用いられる。たとえば、「縦の物を横にするのも厭がる横着者が、飯だと聞くと急いで立ち上る」*Beim Ruf : das Essen ist fertig ! steht der niederträchtige Taugenichts immer hastig auf, er, der sonst um nichts in der Welt einen Finger rühren will.* (直訳。----食事が出来た、と云う呼び声に際しては、横着千万な役立たず奴が大急ぎで立ち上る、何時もならばたとえ世界中の如何なる事柄のためにも指一本動かそうとしない彼が。)----現在の個所に関して云えば、*der kleine Mann* なる挿入句は、*so klein er war* (小柄であるにも拘らず)の意である。

(4) *das Lager* 又は *die Lagerstätte* は、*liegen* (臥す)する場所の意で、*das Bett* (床)に対する詩的な言葉である。臥床とでも云う可きであろう。少し調子の高尚な文では、*Bett* なぞと云う普通の言葉を使うと、いやに事務的になって滑稽になる。日本語でも、そんな現象はむしろドイツ語よりも甚だしい。時まさに秋冷の候、天高く馬太るの秋なぞと云っては大笑いだ。馬が「太る」のに対しては何等の意義はない、むしろ非常に結構なことで、痩せて貰っては困るのであるが、天高くして馬がふとるのは甚だ困る。天高ければ馬は肥えなくてはいけない、太ったりふくれたりしてはならぬと云うのが日本語の規則である。いやにやかましい様だが、*wortgefühl* (語感)と云うものだけはどうにも致し方がない。同じ寝床が或る時は *Bett* たらざるべからず、或る時は *Lager* たらざるべからず、これがのみ込めて来ればドイツ語は卒業である。

(5) *ihm die Haare = seine Haare*.

(6) *es ist gut !* (よしよし、わかったよ、の意。) *mein Kind* (子供をなだめる様に云ったから思わず此の言葉が出たのである。) *es wird alles gut werden.* (*ea* は文法上の主語、*alles* が意味上の主語、今に凡てがよくなる、安心しておいでの意)----此处を誰か涙ぐまずして読む事が出来よう！斯ういう個所に於て読者は、いわば作者の霊に触れることが出来るのである。教父は *mein Kind !* と云っている。その言は蓋し無意味ではない。かくの如き立場に立てば世に憎む可き者は一人もない。如何ともなれば人間はみんな小供なのだから。

Darüber(1) fühlte Augustus sich(2) von einer schweren Müdigkeit überfallen,(3) als sei(4) er im Augenblick um(5) viele Jahre gealtert, er fiel in einen tiefen Schlaf, und der alte Mann ging still aus dem verlassenem(6) Hause.

Augustus erwachte von einem wilden Lärm, der das hallende(7) Haus erfüllte, und als er sich

erhob und die nächste Tür öffnete, fand er den Saal und alle Räume voll von seinen ehemaligen Freunden, die zu dem Fest gekommen waren und das Haus leer gefunden hatten. Sie waren erbost(8) und enttäuscht,(9) und er ging ihnen entgegen, um sie alle wie sonst mit einem Lächeln und einem Scherzwort zurückzugewinnen;(10) aber er fühlte plötzlich, daß diese Macht von ihm gewichen(11) war. Kaum sahen(12) sie ihn, so begannen sie alle zugleich auf ihn einzuschreien,(13) und als er hilflos(14) lächelte und abwehrend(15) die Hände ausstreckte, fielen sie wütend über ihn her.(16)

- (1) 既に度々出て来た darüber. (その言葉を聞くと)
- (2) sich so und so fühlen (自分を斯々に感ずる)という語法である。
- (3) überfallen, überfiel, überfallen (襲う)は非分離動詞。不定法と過去分詞とが偶然同形であるが、現在の個所の überfallen は勿論後者である。
- (4) als の次に接続法の定形が来れば、その als は als ob (宛も.....なるが如くに)の意。sei は第一接続法だが、普通は第二式を用いて wäre とするのが例である。(第三巻 217)
- (5) um は、現在の場合の如く、数量的規定に用いることがある。er ist zwei Jahre älter als ich (彼は私より二年だけ年上だ)等。「.....だけ」「.....分」とでも訳すれば大抵の場合には当てはまる。
- (6) verlassen は、元来は verlassen, verließ, verlassen (見捨てる)の過去分詞である、がそれが純形容詞化して、「淋しい」の意になったものである。
- (7) das hallende Haus. hallen (反響する)というのは、人声のために起る結果であるが、それを斯ういう風に形容詞的に用いるのは、詩によくある語法である。
- (8) erbost = böse, zornig.
- (9) täuschen [騙す] enttäuschen [幻滅に陥入れる] 従ってその過去分詞は getäuscht [騙されている] enttäuscht [騙されていたことがわかった、がっかりした]
- (10) gewinnen (獲得する)はつまり das Herz gewinnen (心を獲得する) die Gunst gewinnen (寵愛を獲得する)ことで、zurückgewinnen は「とり戻す」「再びなづける」
- (11) einem weichen (或人を避ける)と von einem weichen (或人の許を去る、einen verlassen)とを混同する勿れ。
- (12) Kaum hatten sie ihn gesehen と過去完了にするのが普通である。茲ではその文法を無視している。しかし別に間違いという程ではない。
- (13) auf einen ein (或人をめがけて、或人を引とらえて)という句には色々な動詞が付けられる。或人をめがけて打ち掛かる、= auf einen einhauen 或人に向って荐[しき]りに喋舌り掛ける、= auf einen einreden 等。
- (14) ratlos (為す所を知らず)と云っても好い。
- (15) 「まあまあ怒り給うな」と、宥めながら手を突き出して堰きとめたわけである。
- (16) ein ; her ; los,-----云々をめがけて「どしどし」「ぐんぐん」「かまわず」「やたらに」「まっしぐらに」「一目散に」---über einen her も、今述べた auf einen ein と同じ。auf einen los と云う。斯ういう風に、動詞の前綴 (ein, her, los)はその意味に従って auf, über 等の前置詞と密接な関係を持っているものである。

40.

"Du Gauner," schrie einer,(1) "wo ist das Geld, das(2) du mir schuldig bist?" Und ein anderer: "Und das Pferd, das ich dir geliehen habe?" Und eine hübsche, zornige Frau: "Alle(3) Welt weiß meine Geheimnisse, die du ausgeplaudert hast. O wie ich dich hasse, du Scheusal!" Und ein hohläugiger(4) junger Mensch schrie mit verzerrtem(5) Gesicht: "Weißt du, was du aus(6) mir gemacht hast, du Satan, du Jugendverderber?"(7) Und so ging es weiter,(8) und jeder häufte Schmach und Schimpf(9) auf ihn, und jeder hatte recht, und viele schlugen ihn, und als sie gingen und im Gehen die Spiegel zerschlugen und viele von den Kostbarkeiten(10) mitnahmen, erhob sich Augustus vom Boden, geschlagen und verunehrt,(11) und als er in sein Schlafzimmer trat und in den Spiegel blickte, um sich zu waschen, da schaute sein Gesicht ihm(12) welk und häßlich entgegen, die roten Augen tränkten, und von der Stirne(13) tropfte Blut.

- (1) 「一人」と「他」または「甲」「乙」と云ったような際には **ein** に強語尾を附けて **einer**, 時には (二人いる中の一方の時には) **der eine** とする。(第二巻 183)
- (2) 借りがある、という意の **schuldig sein** は、まるで他動詞の様に四格を採る。
- (3) **all** はよく **ganz** の代りに用いる。**alle Welt** は一種の熟語で、仏語の **toute le monde** (直訳---世界中、---意---みんな、皆の者)の直訳である。**Alle wissen** (みんなが知っている)と云うのと同じで、別に「世界」とは何の関係もない。
- (4) **hohl, a.** (凹んだ)と **Auge, n.** (眼)との複合形。
- (5) **zerren** は「引っ張る」事。**verzerrt** は「引っ張り曲げた」即ち、痙攣(**Krampf**)のために引き釣った、の意。
- (6) **aus A B machen** と云えば、A を化して B にする事である。同様に A が B になる、と云う事を **aus A wird B** と云う。**Aus ihm wird nichts** は、「あんな奴は碌なものに成りっこない」の意。此の **aus** の用い方は特に注目すべきである。
- (7) 此の最後の、若い青年に関する事実は、欧州の社交界の暗黒面に関するかなり甚[はなはだし]い事実を考えないとわからない。**die Inversion** (性の錯倒)と、それから生ずる **Knabenschänderei, Päderastie** (少年相手の男色)等の事実は、現在の欧州に於て最もはびこっている事実である。(仏国の超現実派の巨匠と云われている **Marcel Proust** は、其の長篇の一部 **Sodome et Gomorrhe** [淫都ソドムとゴモラ]と称する三冊を、此の変態現象の叙述に費して、**Charlus** なる面白い人物を描いている。)ここでは勿論極く曖昧に云ってあるに過ぎない。
- (8) **weitergehen** (英語の **to go to**) 此处では非人称的熟語をなしている。
- (9) **Schmach und Schimpf** (恥辱と罵詈)は所謂二語一想。
- (10) **-keit, -heit** の抽象名詞が複数になる時には大抵具体名詞化する。
- (11) **Ehre, f.** (名誉)から **Unehe** (不名誉)が出来、その次に **verunehren** (辱かしめる)が出来たのである。
- (12) **entgegen-** の前綴を有する動詞は必ず名詞の三格を要求する。**einem entgegenschauen** = 或人を睨みつつ待ち構えていること。**einem entgegenlächeln** = 微笑みつつ或人を待っている。**einem entgegenrufen** = 或人を迎えて呼ばれる。
- (13) **Stirne** は **Stirn** の別形。(die Tür 扉、を **Türe** と云い、**gern** [好んで] を **gerne** と云うが如し。)

41.

"Das ist die Vergeltung," sagte er zu sich selber und wusch das Blut von seinem Gesicht, und kaum hatte er sich ein wenig besonnen, da drang von neuem(1) Lärm ins Haus, und Menschen kamen die Treppen(2) heraufgestürmt:(3) Geldleiher, denen(4) er sein Haus verpfändet hatte, und ein Gatte, dessen(5) Frau er verführt hatte, und Väter, deren(6) Söhne durch ihn verlockt(7) ins Laster(8) und Elend gekommen waren, und entlassene Diener und Mägde, Polizei(9) und Advokaten, und eine Stunde später saß er gefesselt in einem Wagen und wurde ins Gefängnis geführt. Hinterher schrie das Volk und sang Spottlieder, und ein Gassenjunge warf durchs Fenster dem Davongeführten eine Handvoll(10) Kot ins Gesicht. Da war die Stadt voll(11) von den Schandtaten(12) dieses Menschen, den so viele gekannt und geliebt hatten. Kein(13) Laster, dessen(14) er nicht angeklagt war, und keines,(15) das er verleugnete. Menschen, die er lange vergessen hatte, standen vor den Richtern und sagten Dinge(16) aus,(17) die er vor Jahren(18) getan hatte; Diener, die er beschenkt(19) und die ihn bestohlen,(19) erzählten die Geheimnisse seiner Laster, und jedes Gesicht war voll von Abscheu und von Haß, und keiner war da, der für(20) ihn sprach, der ihn lobte, der ihn entschuldigte, der sich an Gutes von ihm erinnerte.

- (1) **von neuem Lärm** (新たな騒音から)と読んではいけない。**von neuem** (新たに、復々、又候)という熟語。
- (2) **die Treppen** が四格なる事に関しては第四巻 324.
- (3) **gestürmt** の過去分詞形に関しては第四巻 372.
- (4) **denen** は関係代名詞複数三格(第二巻 163, 164.----特に 165 に述べた事を思い出されたし。)
- (5) **dessen** については第二巻 166.

- (6) deren に就ても同上。
- (7) durch ihn verlockt なる句に就ては第四卷 371.
- (8) das Laster (罪惡)と Sünde (罪業)とは、元来宗教上の術語であつて、Laster は習慣的になり、その人の性格の一部になってしまった悪癖を謂い(たとえば Trunksucht 酒癖) Sünde は過失、出来心で犯す罪を謂う。
- (9) Polizei, f. (警察)と云うのは、つまり Polizisten (警吏たち)の事である。
- (10) eine Hand voll (第四卷 428)が eine Handvoll となつたのである。
- (11) voll von etwas (何々で満ちたる) voll は二格支配の事もあれば、また斯う云う風に von を伴う事もある。
- (12) Tat, f. (行い、業)の複合名詞。Wohltat (慈善) Missetat (犯行) Schandtat (醜行)等。
- (13) Kein Laster きりで切つてある主文章だが、Es war kein Laster (如何なる罪惡もなかった)と考えて見ればわかる。また、少し難かしいが、Es war kein Laster, er war dessen angeklagt と云つても好い。(第四卷 404)また第四卷 396 に、此種の二重否定を説明した項がある。
- (14) anklagen は二格支配(第四卷 429 の 1 を見よ。)
- (15) kein Laster を繰り返す代りに、kein に中性語尾を附したのである。
- (16) Dinge は Ding, n. (事、事柄)の複数であるが、次に関係代名詞が来る時に、その先行詞 (第二卷 162)を強めんとして冠詞を省く事がある。
- (17) aussagen (供述する)は法廷の述語である。名詞は Aussage, f. (供述)
- (18) 「数年」とか「数日」なぞと云う際には、生じつか viele Jahre, viele Tage なぞと云うよりは、全然無冠詞、即ち不定冠詞の複数を用いた方が言葉に力が這入る。
- (19) 前綴 be- の一機能 (動詞を四格支配になす)----schenken と beschenken, stehlen と bestehlen はどう違うか? be-なる前綴は一たいどんな機能を持っているか? 次の用法に注意するとわかる。er schenkt mir eine Uhr (彼は私に時計を贈る) er beschenkt mich mit einer Uhr (彼は私を時計で贈り恵む) er stiehlt mir eine Uhr (彼は私から時計を盗む) er bestiehlt mich um eine Uhr (彼は私を時計のために盗み欺く)----um は本当は「ために」の um ではないが、そうでも云わないと訳が出来ない。----要するに各々同じ事を云うのだが動詞の用い方が違っている。be- は、元来「間接補足語」(三格、または前置詞を伴う名詞)だったものを「直接補足語」(四格)に変える機能を持っている。----beschenkt 及び bestohlen の次に hatte と hatten とが省かれている。
- (20) für ihn (彼のために、彼に味方して)第三卷 239 を見よ。弁護者、庇護者の事を Fürsprecher と謂う。

42.

Er ließ alles geschehen, ließ sich(1) in die Zelle und aus der Zelle vor die Richter und vor die Zeugen führen, er blickte verwundert und traurig aus kranken Augen in die vielen bösen, entrüsteten, gehässigen Gesichter, und in jedem sah er unter der Rinde(2) von Haß und Entstellung(3) einen heimlichen Liebreiz und Schein des Herzens glimmen.(4) Alle diese hatten ihn einst geliebt, und er keinen von ihnen, nun tat er allen Abbitte(5) und suchte bei(6) jedem sich an etwas Gutes zu erinnern.

Am Ende wurde er in ein Gefängnis gesteckt, und niemand durfte zu ihm kommen, da sprach er in Fieberträumen mit seiner Mutter und mit seiner ersten Geliebten, mit dem Paten Binßwanger und mit der nordischen Dame vom Schiff, und wenn er erwachte und furchtbare Tage(7) einsam und verloren(8) saß, dann litt(9) er alle Pein der Sehnsucht und Verlassenheit und schmachtete nach dem Anblick von(10) Menschen, wie(11) er nie(11) nach irgendeinem(12) Genusse oder nach irgendeinem Besitz geschmachtet hatte.

- (1) sich führen lassen. (自分を導かせる、即ち導かれる) 第三卷 251.
- (2) Rinde, f. (外皮)は元来樹皮の事である。
- (3) Entstellung, f. 元来は、形状が変わること、変り果てた形相、即ち凄い顔付き、恐ろしい容貌。
- (4) 自分に対して憤激しつつある人々の顔の裡に、人知れぬ魅力 (heimlichen Liebreiz) と真情の反映 (Schein des Herzens) とが窺見するのを見るに至ったら、それはもう生きながらの仏である。----glimmen は、schimmern (微光を発する) よりももっと微かな見え

方をするものに就て用いる字で、たとえば灰の被さった炭火は **glimmen** する、朽ちた木の燐光が **glimmen** する。あるかあらぬか、ほんのりと、ぼーっと見えるのが **glimmen** である。

(5) **Abbitte tun** (謝罪する、わびる)は熟語。冠詞なきは熟語の徴。

(6) **bei jedem** (彼等の各々に就て) **bei** の特殊な用法。----即ち、「此の人間から何か恩を受けた事は無かったか？」なぞと、悪を忘れて善を想ったのである。

(7) 副詞句 (第四巻 326)

(8) **verloren** [失われた、迷った]はまず **einsam, verlassen** (孤独の、見捨てられた)と同じような意である。たとえば舵の緒絶えて絶海を漂う船は、**ein verlorenes Schiff** であり、絶海の孤島は **eine verlorene Insel** である。**einsam und verloren** は二語一想。

(9) **leiden, litt, gelitten** (悩む、具[つづ]きに嘗める)

(10) **Anblick** に相当する動詞は **anblicken** [他動詞]で、従って次の **von Menschen** は補足語二格(第四巻 414)に相当するものである事は既に註で述べた。故に、人間「を」見る事に懂れた、の意。

(11) **wie.....nie** の語法に関しては第四巻 405 を見よ。

(12) **irgend einem** とも書く。**irgend** に就ては第二巻 184.

43.

Und als er aus dem Gefängnisse kam, da war er krank und alt, und niemand kannte ihn mehr. Die Welt ging(1) ihren(2) Gang,(1) man fuhr und ritt und promenierte in den Gassen, Früchte und Blumen, Spielzeug und Zeitungen wurden feilgeboten,(3) nur an Augustus wandte sich niemand. Schöne Frauen, die er einst bei(4) Musik und Champagner(5) in seinen Armen gehalten hatte, fuhren in Equipagen(6) an ihm vorbei, und hinter ihren Wagen schlug der Staub über Augustus zusammen.(7)

(1) **Gang gehen** という一見妙な語法については第四巻 425 「所謂 inneres Objekt」の項を見よ。

(2) **ihren** という変な物主代名詞の用法については第四巻 417 **Er trinkt seinen Kaffee** の項を見よ。

(3) **feilbieten, bot feil, feilgeboten = verkaufen** (売る) **zum Verkauf ausstellen** (売るために並べて置く)

(4) 此の **bei** は「同時」を意味する前置詞。つまり音響を聴き、三鞭酒[シャンパン]を飲みながら、である。

(5) シャムパーニエルと発音する。

(6) **Equipage** [エキページ] 仏語。ドイツ語は **Wagen**。

(7) **über einen zusammenschlagen** (或人をとじ込めてしまう、或人を呑み込んでしまう)は非常に面白い言葉だが、少し詳しく分解して考えないと其の妙味がわからない。これは主として水の中へ飛び込んで水中に姿を没する時の叙述に使われる文句である。**Er fällt kopfüber ins Wasser hinein, und die Wellen schlagen über ihn zusammen.** (彼が真逆様に水の中へ飛び込む、すると浪が彼の上に打ち合わせる)即ち、人間が飛び込めば、まず波が分れる、そして彼を水中へ吸い込む、その次には水の表面にどんな現象が起るか？分れた水が元の位置に帰らんとしお互に鉢合せをし、其処に **zusammenschlagen** と云う現象が起るであろう。海戦の際砲弾の落下に伴う水煙、水柱 (**Wassersäule**) もその類である。----その用法から一転して、何でも或物が人の頭上に一下して彼を取り巻いてしまう時に此の熟語を用いる。**Das Wetter (Gewitter) schlägt über sein Haupt** (時には **über seinem Haupte**) **zusammen =** 彼の頭上に嵐が舞い降る。**Die Schmach schlägt über ihn** (又は **ihm**) **zusammen.** (汚辱が彼に一下する、即ち、彼は一夜の内に世間に顔向けが出来なくなる)等。

44.

Die furchtbare Leere und Einsamkeit aber,(1) in welcher(2) er mitten(3) in seinem prächtigen Leben erstickt war, die(4) hatte ihn ganz verlassen. Wenn er in ein Haustor trat, um sich für Augenblicke(5) vor der Sonnenglut zu schützen, oder wenn er im Hof(6) eines Hinterhauses(6) um einen Schluck Wasser bat, dann wunderte er sich darüber, wie mürrisch

und feindselig(7) ihn die Menschen anhörten, dieselben,(8) die ihm früher auf stolze und lieblose Worte dankbar und mit leuchtenden Augen geantwortet hatten. Ihn aber freute und ergriff(9) und rührte jetzt der Anblick jedes Menschen, er liebte die Kinder, die er spielen und zur Schule gehen sah, und er liebte die alten Leute, die vor ihrem Häuschen auf der Bank saßen und die welken Hände an der Sonne(10) wärmten. Wenn er einen jungen Burschen sah, der ein Mädchen mit sehnsüchtigen Blicken verfolgte, oder einen Arbeiter, der heimkehrend am Feierabend(11) seine Kinder auf die Arme nahm, oder einen feinen,(12) klugen Arzt, der still und eilig im Wagen dahinfuhr und an seine Kranken dachte, oder auch eine arme, schlecht(13) gekleidete Dirne,(14) die am Abend in der Vorstadt(15) bei einer Laterne wartete und sogar ihm, dem Verstoßenen, ihre Liebe anbot, dann waren alle diese(16) seine Brüder und Schwestern, und jeder trug(17) die Erinnerung an eine geliebte Mutter und an eine bessere Herkunft(18) oder das heimliche Zeichen einer schöneren und edleren Bestimmung an sich(17) und jeder war ihm lieb und merkwürdig und gab ihm Anlaß(19) zum Nachdenken, und keiner war schlechter, als er selbst sich fühlte.(20)

- (1) aber の変な位置に関しては第四巻 306.
- (2) 日本語の悲哀！この in welcher という句はどうしても余り好い直訳は出来ない。(第二巻 165「日本語の悲哀」の項を見よ)
- (3) mitten in = 英語の amidst.
- (4) 指示代名詞が殆んど冠詞と同形である事を忘れた人は第二巻 178 を復習せよ。
- (5) Augenblicke, pl. なる複数形を用いたのは für einige Augenblicke (数瞬間)と云うことで、別に単数の際と意味は変らない。
- (6) 西洋の町では、大抵の建築はみんな四角に立て廻らされてあって、中央には中庭(Hof, Hofraum)がある。表の街道に面した方は大抵商店、事務所等になり、左右と裏の方とは住宅用である。そして Vorderseite (前側)の一個所には、車でも何でも通れる Haustor (門)があって、そこの(上には勿論二階が渡っている)通路を Torweg と云う。其処と、中へ這入った所の中庭とは、その建築の Hinterhaus (中庭に面した部分、即ち裏家)に住む多くの家族に共通の通路があるから、誰でも無断で這入れるわけである。Haustor に入れば、それは表家の下の道だから、日陰になるわけである。(Haustür 玄関の扉、と混同する可からず。Tor, n. は門で Tür, f. は扉。)
- (7) feindselig (敵意ある) glücklich (幸福な)等の -selig は Seele, f. (魂、霊)から来たものの。
- (8) 第二巻 181.
- (9) ergreifen (掴む)は、「慄然たらしめる」事。もっと強い言葉には packen というのがある。
- (10) Sonne (太陽)はよく「日向」の意に用いる。例の樽[たる]聖人 Diogenes が Alesander der Große から、「何でも汝の望みを叶えてやろうほどに、願いの趣きを申せ」と云われて、Geh mir aus der Sonne ! (日向を退いて呉れ)と云ったのは名高い逸話(Anekdote)である。
- (11) feiern は休息すること。Feiertag は「休日」Feierabend は「休日の前の日」または「その日その日の仕事仕舞」である。ここは、むしろ後者の意であるが、うっかりすると「祭の夜」とか「祭の晩」とかいう意味に取られがちであるから注意を要する。
- (12) fein は、人間に就て云う際には、上品な事である。ein feiner Herr (風采の上品な紳士)
- (13) schlecht は、往々にして「不十分に」「手落ち多く」の意がある。ich habe schlecht geschlafen (私はよく眠れなかった)等。故に schlecht gekleidet は、碌な着物を着ていない事。
- (14) Dirne 元来「娘っ兒」の意味だったのが、近頃では非常にさげすんだ名称になって、所謂 Straßenmädchen [street girl] Prostituierte [prostitute] の意に用いるようになった。西洋は今なお街頭の私娼がはびこっている。
- (15) Vorstadt. vor der Stadt liegen, 即ち、町の手前、又は町外れに在る、という意で、元来は近郷、市街町村の事を云うのだが、東京で云えば、山の手の方を考えてはいけな、板橋や、北郊、隅田川の東の区域等を考えると Vorstadt (場末)の意がわかる。主と

して労働者が住み、工場がある。故に貧民苦を称して *Vorstadt elend* (場末苦)と謂う。

(16) *alle diese* で切れる。*alle diese seine u. s. w.*ではない。

(17) *an sich tragen* (身に備える、帯びる)----それらの人間は、自から意識せると否とに拘らず、どこか矢張り人間らしい神聖な方面を身につけて持っている、の意である。

(18) *Herkunft*, f. (由来)と云うのは、因縁、素性、お里、の事。即ち元を洗えばと云う意味である。

(19) 深慮の機縁を与えるとは、一般的考察の材料を提供する事。

(20) 彼は、己れ自身を反り見て、いやいや、彼等と雖も決して俺より以下の人間ではない、と思った訳である。

45.

Augustus beschloß, durch die Welt zu wandern und einen Ort zu suchen, wo es ihm möglich wäre, den Menschen irgendwie zu nützen und ihnen seine Liebe zu zeigen. Er mußte sich daran gewöhnen, daß sein Anblick niemanden mehr froh machte; sein Gesicht war eingefallen, seine Kleider und Schuhe waren die(1) eines Bettlers, auch seine Stimme und sein Gang hatten nichts mehr von dem,(2) was einst die Leute erfreut und bezaubert hatte. Die Kinder fürchteten(3) ihn, weil sein struppiger grauer Bart lang herunterhing, die Wohlgekleideten(4) scheuten seine Nähe, in(5) der sie sich unwohl und beschmutzt(6) fühlten, und die Armen(7) mißtrauten ihm als(8) einem Fremden,(9) der ihnen ihre paar(10) Bissen wegschnappen wollte.(11) So hatte er Mühe,(12) den Menschen zu dienen. Aber er lernte und ließ sich nichts verdrießen.(13) Er sah ein kleines Kind sich nach der Türklinke des Bäckerladens strecken und sie mit dem Händchen nicht erreichen. Dem konnte er helfen, und manchmal fand(14) sich auch einer,(15) der noch ärmer war als er selbst, ein Blinder oder Gelähmter, dem er ein wenig auf seinem(16) Wege helfen und wohl tun konnte. Und wo(17) er das nicht konnte, da gab er doch freudig das wenige, was er hatte, einen hellen,(18) gütigen Blick und einen brüderlichen Gruß, eine Gebärde des Verstehens und des Mitleidens. Er lernte es auf seinen Wegen den Leuten ansehen,(19) was sie von ihm erwarteten,(20) woran sie Freude haben würden: der eine(21) an einem lauten, frischen(22) Gruß, der andere(21) an einem stillen Blick und wieder einer daran,(23) daß man ihm(24) auswich(25) und ihn nicht störte.(26) Er wunderte sich täglich, wieviel Elend es auf der Welt gäbe(27) und wie vergnügt doch die Menschen sein können, und er fand es(28) herrlich und begeisternd, immer wieder zu sehen, wie neben jedem Leid ein frohes Lachen, neben jedem Totengeläut ein Kindergesang, neben jeder Not und Gemeinheit eine Artigkeit, ein Witz, ein Trost, ein Lächeln zu(29) finden war.(30)

(1) *die* は指示代名詞 (第二巻 178)即ち *diejenige* というに同じ(第二巻 180)

(2) 一格は *das* (指示代名詞の中性)中性は、「事」「物」「点」「例」「方面」等の意を有す。

(3) *fürchteten sich vor ihm* と云うに同じ。

(4) 形容詞を複数にして、しかも大書してあれば必ず人間を意味す。(第二巻 198 の規則は非常に重要)

(5) *in der* の代りに *wo* でもよし。(第二巻 174)

(6) *beschmutzen* (汚す)の過去分詞。

(7) 註 4 を見よ。

(8) *als* の次に *einem Fremden* が前の *ihm* と同じく三格になっている現象に関しては第四巻 309 に詳しく説明あり。

(9) 第二巻 190 に述べた形容詞 *fremd* (外国の、他所の)の名詞化。

(10) *ein paar* (僅かの)は、冠詞、物主代名詞、指示詞等、所謂定語尾属 (第一巻 94 の真中辺に説明あり)の次には *ein* を除いて用いる。

(11) *wollte* は所謂時称の一致 (*consecutio temporum*) という現象のために過去になっている故、訳語は現在形である。

(12) *Mühe haben* (骨が折れる)は *sich Mühe geben* (努力する)とはちがう。

(13) *sich* (三格) *nichts verdrießen lassen* (直訳----自分に何も不快ならしめて置かない----即ち、へこたれない)斯くの如く、非人称語法 *es verdrießt mich* [第三巻 268] を、例の *sich*

lassen [第三卷 251] を用いて受身形にしたのである。こんなのは熟語として覚えるのが早道である。

(14) sich finden (自らを見出す)は sein (ある、有る)と同じである。

(15) einer は jemand と略同意。

(16) 此の sein は「誰の」事を云うのだろうか？微妙な語感を見れば Augustus 自身でも好きそうだが、そうではなく、助けられる方の人を指すのである。普通は in, bei を用いる。(Ich helfe dir in deinem Studium =おまえの勉強の手助けをしてやる) Weg は動作ではないから in, bei は用いられない。(in seinem Gehen, bei seinem Gehen と云っても構わないが)それ故 auf を用いたのである。

(17) wo は「場合」の意。(falls と同じ----第四卷 298 の表中にあり)

(18) 此処の hell = heiter (朗らかな、明るい)

(19) 或人を一瞥して直ちに或事を看取することを einem etwas ansehen と云う。

(20) これも時称の一致故、訳語が現在になる。

(21) der eine.....der andere (或者は.....或者は.....)は対立して用いる。

(22) frisch (新鮮な、水々しい、すがすがしい、----即ち景気の好い軽快な)

(23) daran ---- an etwas Freude haben (或事に愉快を感じる)という故、an という前置詞。は一々繰返さなければならないのである。

(24) 此の ihm は離格 (第四卷 419)

(25) 時称の一致に注意せよ。

(26) 同上

(27) es gibt etwas (或物が存在する)第三卷 272.

(28) 此の es は、下の immer wieder zu sehen の先行詞である。(第四卷 284)

(29) zu finden は「見出すことが出来る」の意 (第四卷 291 を見よ。)(

(30) 此の童話の作者 Hermann Hesse は、その処女作 Peter Kamenzind という自叙伝的な物語に於て、彼が例の乞食僧の元祖聖フランシスの崇拜者であった事を告白している。故に此の箇所は作者自身の憧れている理想を実現させているのである。

46.

Das Menschenleben schien ihm vorzüglich eingerichtet. Wenn er um eine Ecke (1) bog (2) und es (3) kam (4) ihm eine Horde Schulbuben entgegengesprungen, wie blitzte da (5) Mut und Lebenslust und junge Schönheit aus allen Augen, und wenn (7) sie ihn ein wenig hänselten (6) und plagten, so war das nicht so schlimm; (8) es war sogar zu begreifen, er fand sich selber, wenn er sich in einem Schaufenster oder beim Trinken im Brunnen gespiegelt sah, recht welk und dürftig von (9) Ansehen. Nein, für ihn konnte (11) es sich nicht mehr darum handeln, (10) den Leuten zu gefallen oder Macht auszuüben, davon (12) hatte er genug gehabt. Für ihn war es jetzt schön und erbaulich, andere (13) auf jenen Bahnen streben und sich fühlen (14) zu sehen, die er einst gegangen war, und wie alle Menschen so eifrig und mit soviel Kraft und Stolz und Freude ihren Zielen (15) nachgingen, das war ihm ein wunderbares Schauspiel. (16)

(1) Straßenecke 町の角。

(2) biegen, bog, gebogen (曲がる)

(3) 非人称の無意主語

(4) kam は、前に wenn があるから文の最後に行く可きであるが、副文章に於ては、その二度目の定形は後置しない事がある。それは殊に wenn の場合に多い現象である。

(5) da は時間的な意味である。

(6) hänseln は Hans (人名、第四卷 353 の表にあり)から来ている。der demme Hans (ハンスの馬鹿)とか云って、あんまいい意味にならない。日本の「太郎」に似ている。其処で人を揶揄う事を hänseln (ハンス扱いにする)と云う訳である。

(7) wenn auch (たとえ.....にせよ)の auch は省く事がある。第四卷 299 で述べた通り。

(8) これが本篇の最初の註で云った Praeteritum mimikum (扮役の過去)である。「大した事はなかった」「大事ない」「なに構やせぬ」の意。

(9) von Ansehen = was sein Ansehen betraf (彼の外貌に関しては) im Ansehen (外貌の点

では) こう云う von の使い方の例をあげると、---- Ich kenne ihn nicht von Gesicht, sondern nur von Namen. 私は彼を顔では知らない、ただ名前だけで知っている。Sie ist schön von Gesicht. (彼女は、顔は美しい。)

(10) es handelt sich um etwas (或事が問題である、重要である、関心の対象である) は非人称熟語である。(第三巻 271)

(11) 此の können は、能力を指す können ではない。理屈の上の可能性を指すものである。es war ihm unmöglich と考えて見ればわかる。

(12) von etwas genug haben (或事について充分を持つ、満足する、うんざりする)

(13) 第三巻 255.

(14) sich fühlen (自分を感じる) 得意の感を味う、意を得る、力を意識する、志を得る、fühlen, was einer eigentlich kann 自己の実力を発揮して見て、己れが元来如何なる力を持っていたかを改めて意識する。----近代ドイツ人の beliebter Ausdruck (好む言葉) である。

(15) nachgehen 等、nach- の前綴を有する動詞は大抵三格の補足語を取る。

(16) Schauspiel には「芝居」の意もあるが、英語の sight, spectacle (壮観、奇観、みもの、光景、場景) の意にも用いる。Bild (光景) と云ってもよからう。

斯くの如く人生を全然客観視してしまえば、其処にはもはや憎む可き何物もないに違いない。すべては一つの芝居の筋の如きものだ。悪人も善人も、富めるも貧しきも、争えるも親しめるも、彼等はすべて神から命ぜられた自分の役を忠実に演じているにすぎないのだ。----我々もその喜劇役者中の一人の端役である。そして同時に観衆にもなり切る事は出来ないものか？俺が作者 Hesse の憧憬的な問いである。

47.

Indessen wurde es Winter und wieder Sommer, Augustus lag lange Zeit in einem Armenspital (1) krank, und hier genoß er still und dankbar das Glück, (2) arme, niedergeworfene Menschen mit hundert zähen Kräften und Wünschen am Leben hängen und den Tod überwinden zu sehen. Herrlich war es, in den Zügen (3) der Schwerkranken die Geduld und in den Augen der Genesenden (4) die helle Lebenslust gedeihen zu sehen, und schön (5) waren auch die stillen, würdigen Gesichter der Gestorbenen, (6) und schöner als dies (7) alles war die Liebe und Geduld der hübschen, reinlichen Pflegerinnen. (8) Aber auch diese Zeit ging zu Ende, der Herbstwind blies, und Augustus wanderte weiter, dem Winter entgegen, (9) und eine seltsame Ungeduld ergriff ihn, als er sah, wie unendlich langsam er vorwärts kam, (10) da (11) er doch (11) noch überall hinkommen und noch so vielen, vielen Menschen in die Augen sehen (12) wollte. Sein Haar war grau geworden, und seine Augen lächelten blöde (13) hinter roten, kranken Lidern, (14) und allmählich war auch sein Gedächtnis trübe geworden, so daß (15) ihm schien, (16) er habe (17) die Welt niemals anders (18) gesehen als heute; (19) aber er war zufrieden und fand die Welt durchaus (20) herrlich und liebenswert.

(1) Spital は Hospital を省略した形で、専ら施療院の意に用いる。

(2) das Glück は、それより以下の長い zu を伴う不定法の文を附加語とする先行詞で、第四巻 285 に説明した語法に相当する。

(3) Zug は、その複数 Züge を顔相の意にもちいる。Zug は ziehen (引く、即ち線を引く) から来て居り、一線一劃の事を云うので、その総合が Züge である。

(4) der Genesende に関しては第二巻 194 を見よ。

(5) schön は、少し前の Herrlich と同じく、主語を定形の後に置いて、形容詞を先置したものである。

(6) 第二巻 193 を見よ。

(7) dieses を dies と略するのが普通である。

(8) Pflegerin = Krankenpflegerin, Krankenwärterin. 大戦中は単に Schwestern と云って居た。pflegen (世話する) から作ったもの。

(9) 三格支配の後置詞 (第三巻 233)

(10) vorwärts kommen (前へ進む) = von der Stelle kommen : (歩みが捗取る)----道程のことばかりでなく、同時に彼の努力をも指している。

(11) da.....doch (.....云々であるのに) は熟語的な接続詞。

(12) 多くの人間の眼を見る、と云うのは、多くの人間に親しく面して其の喜怒哀樂の実情を見聞する事を云ったので、作者は、その意味の深長にして重大なるに拘らず、努めて天真爛漫な、何気なくすっとした言葉を用いようとして努力しているのが見える。こんなのが反って初学者には骨が折れる。

(13) blöde (愚鈍に)---彼の眼からは凡ての小ざかしさ、鋭どさが消えている。末梢神経はもはや手術して取り除けられたかの如くである。おお、その愚鈍さの中に如何に貴き叡智が輝ける事よ！大賢は愚に似たり。

(14) Lied, n. = Augenlid, n. (まぶた)

(15) so daß を「そのために」と訳するのは、第四巻 300 の所謂後続的なるによる。

(16) es が省かれている。入れるとすると、so daß es ihm schien

(17) hat に対する第一式接続法。これが所謂間接話法である。(第三巻 210)

(18) anders = auf andere Weise (他の方法で、別様に、ちがって、これ以外の様子に)

(19) heute = jetzt, in diesem Augenblick (只今、此の瞬間)---即ち heute は「こんにち」であって「きょう」の意ではない。

(20) durchaus = durch und durch, in allem und jedem, in jeder Beziehung (徹頭徹尾、凡てに於て、凡ゆる点から見て)

48.

So kam er mit dem Einbruch(1) des Winters in eine Stadt; der Schnee trieb(2) durch die dunkeln Straßen, und ein paar späte(3) Gassenbuben warfen dem Wanderer(4) Schneeballen nach, sonst aber war alles schon abendlich still. Augustus war sehr müde, da kam er in eine schmale Gasse, die schien ihm wohlbekannt, und wieder in eine, und da stand seiner Mutter Haus(5) und das Haus des Paten Binßwanger, klein und alt im kalten Schneetreiben,(6) und beim Paten war ein Fenster hell, das schimmerte rot und friedlich durch die Winternacht. Augustus ging hinein und pochte(7) an die Stubentür, und der kleine alte Mann kam ihm entgegen und führte ihn schweigend in seine Stube, da war es warm und still und ein kleines, helles Feuer brannte im Kamin.(8)

(1) der Winter bricht ein (冬が初まる) Einbruch = Anfang.

(2) treiben は、雪について云う時には、風に吹き捲られて散り交[まじら]うことである。

(3) spät (晩き) は、人間や物体にも形容詞として附けることがある。späte Läden (夜晩く開いている店) später Gast (夜晩く居残っている、もしくはやって来る客)---späte Gassenbuben は、他の子供達がもうとっくに家へ帰ってしまっているのに、まだ表で遊び残っている街の児である。

(4) Augustus の事を云ったのである。こんなにして、人の名の代りに普通名詞を用いるのは、Periphrase (換語)の一種である。

(5) seiner Mutter Haus に就ては第一巻 71 を見よ。

(6) 第四巻 282 の規則によって、Der Schnee treibt (雪が吹き捲る)を名詞化したのである。(故に「吹雪」)---性は、第一巻 48 の規則に従って、Treiben が中性故全体が中性になる。

(7) 擬音詞 [Onomatopöie]---pochen = klopfen. poch ! poch ! と云う音響から来た Onomatopöie (擬音)

(8) Augustus の毒薬を飲んだ筈の Binßwanger 氏がまだ生きている。これがつまりお噺 (Märchen)で、神秘的存在 (mystisches Wesen)として扱ってあるのである。だから、嘘みたいな事を märchenhaft と云い、馬鹿々々しい！という事を Das ist ein Kindermärchen ! という。

49.

"Bist du hungrig?" fragte der Pate. Aber Augustus war nicht hungrig, er lächelte nur und schüttelte den Kopf.

"Aber müde wirst(2) du sein(1)?" fragte der Pate wieder, und er breitete sein altes(3) Fell auf dem Boden aus, und da kauerten die beiden alten Leute nebeneinander und sahen ins Feuer.

"Du hast einen weiten Weg gehabt," (4) sagte der Pate.

"Oh, (5) es war sehr schön, ich bin nur ein wenig müde geworden. Darf ich bei dir schlafen? Dann will ich morgen weitergehen."

"Ja, das kannst du. Und willst du nicht auch die Engel wieder tanzen sehen?"

"Die Engel? O ja, das will ich wohl, wenn ich einmal wieder ein Kind sein werde."

"Wir haben uns lange nicht mehr gesehen," fing der Pate wieder an. "Du bist so hübsch (6) geworden, deine Augen sind wieder so gut und sanft wie in der alten Zeit, wo deine Mutter noch am Leben war. Es war freundlich von (7) dir, mich zu besuchen." (8)

(1) Aber du wirst müde sein? という代り。----müde が先置されると du wirst が wirst du になる。(第一巻 74)

(2) werden と不定法は、未来を意味する外、「だろう」という想像の意に用いる事もある。

(3) alt = altbekannt (おなじみの)

(4) haben (持つ) という字の volkstümlich (平俗な) な自由な使用に注目せよ。

(5) o! と oh! とはちがう。(第四巻 376 の表の初めを見よ)

(6) hübsch [pretty] と schön [beautiful] とは違う。

(7) 此の von dir という語法については既に度々述べた。

(8) 大詰 [Schlußszene] ----これが愈々 [いよいよ] 大詰 (Schlußszene) である。筋 (Handlung) は辿り着く可き所へ辿りついた。Augustus は不満と幻滅と焦慮との人生を通過して、遂に「美しき魂」(schöne Seele) を実現した。浄化 (Katharsis) 聖化 (Verklärung) の心境に入った。Der Dichter hat nur noch sein letztes Wort zu sagen 作者はもはや結論さえ下せば好いのである。----勿論、論文の結論のような結論でなくっても好いが。

50.

Der Wanderer in (1) seinen zerrissenen Kleidern saß zusammengesunken (2) neben seinem Freunde. Er war noch nie so müde gewesen, und die schöne Wärme und der Feuerschein machte ihn verwirrt, so daß er zwischen heute und damals nicht mehr deutlich unterscheiden konnte. (3)

(1) illustrierendes Attribut (注解的添辞) に用いる前置詞には mit が一番多い。Das Gebirge mit seinen stummen Schrecknissen (山嶽とその無言の恐怖、----沈黙裡に多くの危険を蔵する山嶽) Der Philosoph mit seinen Methoden und Schlüssen (方法だの結論だののやかましい哲学者) 等。----けれども in その他の前置詞を用いると、具体的描写の効果が得られる。Der Arbeiter in seiner Fabrik (工場にある職工) Der Priester in seinem Ornat (式服の僧) Der Kutscher auf seinem Bock (馭者台上の馭者。----いずれにしても、) illustrierendes Attribut の特徴は、物主代名詞を必ず使用する所にある。----in は着物と人との関係を指す普通の云い方である。日本語では人が着物の中に居るなどとは云いもしなければ考えもしないが。

偕

(2) zusammen- なる前綴の持っている特殊な機能 (Funktion) に注目して貰いたい。元来は「一緒に」の意であるが、斯う云う場合は mit allen Gliedern zusammen (四肢五体偕 [とも] に) の意である。即ち、或る動作が、身体総体を以て行われる事を意味する。zusammenbrechen (がくりと立ち崩れる) zusammenfahren (はっとする) zusammenbrechen (はっとする、縮み上る) zusammenschauern (身の毛がよだつ) ----また物体に就て云う際には、物体が、総体的に変化する際云う。zusammenrühren (攪拌する、上を下へと掻きまぜる) zusammenschrumpfen (収縮する) zusammenschmelzen (融けて無くなる) zusammenziehen (凝縮する) ----故に zusammengesunken は、力なく其の場にだらりと腰を下ろして、の意。「がくりと」「だらりと」「べそとして」「やれやれと云った様に」「力が抜けて」「がくりと頭垂れて」

(3) 何十年か前にいた事のある場所に辿りついて、おまけに「とろん」としたひどい甘い疲労を感じた様な瞬間には、ある種の錯覚が起る。作者はそれを巧く利用している。次の一節はこれを念頭に置かないとわからない。次の個所は、前篇の結論であると同時に

に、比類のない傑作である。其処には深き理念の飛躍がある。

51.

"Pate Binßwanger," sagte er, "ich bin wieder unartig(1) gewesen und die Mutter hat daheim geweint. Du mußt mit ihr reden und ihr sagen, daß ich wieder gut sein will. Willst du?"

"Ich will," sagte der Pate, "sei nur ruhig, sie hat dich ja lieb." (2)

(1) unartig sein (いけない、おいたをする)「おとな」な事を artig と云う。sein と状态的に云ってあるが、実は何か悪い事をしたことを unartig gewesen sein というのである。此のあたり一帯の、極く子供らしい言葉遣いに注目する必要がある。

(2) 此の短い対話が作者が言わんとする最後の詞であり、謂わば前篇の落ちである。----Augustus にとっては、或種の光学的錯覚 (optische Täuschung) の如きものに依って、今までの長い長い人生が、まるで二三十分間に起った一寸した挿話の如く思われたのである。その二三十分間の間に彼は何をしたか？はつきりとは覚えていないが、何かこう自分でも不愉快な事をして来たことだけは感じてわかった。それ故「僕はまた一寸いけない事をしちゃって、おっ母さんを泣かせちゃった、おじさん、おっ母さんの所へ行って謝まっておくれよ」と云ったのである。daß ich wieder gut sein will (僕はもうお利口になるからって)----斯う云う風にお利口になるためには人間は一生を費さなくてはならないのである。けれども神の眼から見れば二三十分と五六十年との間にはいくばくの差があろう！それは丁度我々人間の感じを以てすれば一秒の百萬分の一も十分の一も大して変りがない様なものである。Augustus の気持は決して錯覚ではない。二三十分と五六十年位の取り違い位はまあある事だ。彼は本当に一寸おいたをして来たにすぎない。大したおいたではない。人間と云う子供は何かそう云うおいたをしたがるものだ。そんな事を真面目に取り上げる必要はない。それに、もうおいたはしないと云っているし、第一もう人生という昼間の騒ぎに疲れてしまって、今はもう寝るより外に楽しみがないのだから、実に全く罪のないものである。----と云ったように、作者はその筆の飛躍を以て、神の如き立場に立って人間の一生に結論を下している。此処の妙味がわかって初めて此の一篇の深き構造が見通せるのである。此の一見馬鹿馬鹿しい様な、子供の如き対話、そして同時にその言葉を口にするのが白髪の老人であって、その言葉の中には彼の数十年の人生が意味されている事を想い給え。誰か涙なしに読み得ようか？それは決して同情と嘆きの涙ではない。斯うした作者の物の観方に対する共鳴の喜びと、感激の涙である。

52.

Nun war das Feuer kleingebrannt,(1) und Augustus starrte mit denselben großen schläfrigen Augen in die schwache Röte, wie einstmals in seiner früheren Kindheit, und der Pate nahm seinen Kopf auf den Schoß,(2) eine feine, frohe Musik klang zart und selig durch die finstere Stube, und tausend kleine, strahlende Geister kamen geschwebt(3) und kreisten frohmütig in (4) kunstvollen Verschlingungen(5) umeinander(6) und in(4) Paaren durch die Luft. Und Augustus schaute und lauschte und tat alle seine zarten Kindersinne(7) weit dem wiedergefundenen Paradiese auf.(8) (9)

Einmal war(10) ihm, als(11) habe ihn seine Mutter gerufen; aber er war zu(12) müde, und der Pate hatte ihm ja(13) versprochen, mit ihr zu reden. Und als er eingeschlafen war, legte ihm der Pate die Hände zusammen(14) und lauschte an seinem stillgewordenen(15) Herzen, bis es in der Stube völlig Nacht geworden war.

(1) kleinbrennen は、小さく燃える事ではなく、燃えて小さくなる事である。これは他動詞ではないが、第四巻 423 に説明した結果的客語に相当するのが此の klein である。

(2) Schoß [発音ショース] 膝とは云っても、Knie とはちがう。人間が腰掛けた際、または座った際に、たとえば子供を抱く時などに用いる大腿部と腹部との総称としての膝である。

(3) schweben は、ふわりふわりと虚空を浮沈すること。過去分詞になっているのは既に度々あった通り、kommen に附くからである。(第四巻 372)

(4) 此の in も、ずっと前に in Kreisen (円を描いて)を説明する時に問題になった in で

ある。

(5) verschlingen は、「纏[まと]わる」「絡まる」意。故に複雑な曲線の事を Verschlingung (纏繞[てんにょう])と云ったのである。

(6) umeinander = einer um den andern (お互いの周囲をめぐって、纏わり合って) einander に就ては第二巻 159.

(7) Sinn は複数の時 (die Sinne)には五感、官能の事を云う。単数の時には必ずしもそうでない事もあるが、五感とは Gesicht (視覚) Gehör (聴覚) Geschmack (味覚) Geruch (嗅[きゅう]覚) Gefühl, 又は Tatsinn (触覚)

(8) auftun (開く)の auf に就ては第二巻 144.

(9) 彼のいたいけな天真爛漫の感能を心行くばかり此の再び見出された樂園に向って開いた----は実に巧く云ってある。或物に向って己が五感を開放すると云うのは、惘然[ぼうぜん]自失の状態で見惚れること、恍惚奪魂の体でうっとりと己が視聴を外界に曝すこと。一たい子供というものはそんなものである。彼の物に感じ易い (zart, empfänglich) 耳目は、外界の印象の前には、自我を没却して見とれ聴きとれる。

(10) war es ihm という代り。es の省略に関しては第三巻 277.

(11) als ob. 第三巻 217.

(12) zu müde, um ihr zu antworten とでも補えば zu がわかる。(zu.....um の形式に就ては第四巻 287)

(13) ja のこうした用法は、日本語の「そうだ!」という自分で云って自分で首肯する語法を考えてみるとわかる。「それに、そうだ、おじさんがお母さんに口を利いて呉れると約束したじゃないか」の意。

(14) die Hände zusammenlegen と云うのは、手を重ね合して腹の上に置いてやることで、臨終の床に立ち会うものの死人に対する務めである。

(15) still werden を分離動詞と見た故、過去分詞を一字に書いたのである。